

# 神武が来た道

古田史学の会 伊東義彰



いひかり  
吉野山の井光神社

# 目次

一、はじめに	4
二、和歌山平野から熊野へ	7
1, 「南方の論理」	7
2, 和歌山平野と紀ノ川流域	8
3, 竈山陵と紀ノ川河口	10
4, 和歌山平野の銅鐸	11
5, 紀伊半島西南部沿岸	12
6, 熊野上陸	13
三、熊野から吉野へ	17
1, 紀伊山地横断	17
2, 吉野河の河尻	18
3, 大字井光、井光神社、井光川	20
4, 吉野山の「井光神社」と「井光の井戸」	21
四、宇陀から奈良盆地へ	24
1, 宇陀	24
2, 奈良盆地に入るまでの戦い	27
3, 奈良盆地での戦い	28
4, 磐余	29
五、北部九州の弥生王墓	33
1, 弥生の時代区分	33
2, 弥生王墓の副葬品とつくられた時期	33
3, 中国史書との関連	35
4, 各地域の有力者の墓・遺跡	37
六、欠史八代は語る	39
1, 欠落している奈良盆地平定説話	39
2, 后妃、宮居・陵墓の所在地	41
3, 奈良盆地平定の過程	42
葛城地域への進出	42
盆地中央への進出	43
吉備文化の流入	44
奈良盆地の平定	46
4, 欠史八代の理由	50
5, 宮居・陵墓の比定地について	51

# 資料目次

資料1	弥生中期(約2000年前)ごろの大阪平野	53
2①	弥生中期ごろの和歌山平野と主な弥生遺跡	54
②	和歌山県下の主な高地性集落	54
3	吉野川上流域(川上村)	55
4	宇賀志・佐倉周辺	55
5	糸島半島周辺の地名	56
6	ニニギノミコトの系図(古事記)	57
7	欠史八代の后妃、宮居・陵墓	57
8	北部九州の主な弥生遺跡	62
9	須玖岡本遺跡「D」地点	62
10	欠史八代の宮居・陵墓所在地の略図	63
11	立坂型特殊壺・特殊器台から円筒埴輪への変遷	64
12	楯築(岡山県)・西谷3号(島根県)弥生墳丘墓	65
13	最古級前方後円墳の特徴(奈良県桜井市箸墓古墳)	66
	【参考文献】	67

# 神武が来た道

## 一、はじめに

樹木の生い茂った広大な神苑の中に鎮座している橿原神宮は、普段は訪れる人として少なく閑静なたたずまいの中に静まり返っていますが、正月には初詣の人波が押し寄せ、森厳な神苑も華やかに着飾った若い男女や家族連れで埋め尽くされ、拝殿前の玉砂利の広場などは立錫の余地もないほど混雑します。

奈良盆地には、縄文時代や弥生時代・古墳時代など大昔に起源を持つ有名な神社があちこちに点在しているので、地元の人たちもさることながら他府県からも初詣に押し掛ける人が多く、正月三賀日は東西南北どの道路も車で混雑し、長時間の渋滞で身動きできなくなります。奈良盆地の年中行事の一つです。

橿原神宮には、言うまでもなく人皇初代とされている神武天皇が主神として祀られています。だから橿原神宮にお詣りするということは、神武天皇を参拝することにほかならないわけです。初詣に押し寄せる大勢の人たちは、好むと好まざるにかかわらず主神である神武天皇をお詣りして、新年の幸運をお祈りしているのです。

橿原神宮は大和三山の一つ、畝傍山の南麓にあります。実はその北側にも神武天皇ゆかりのものがあるのですが、知って知らずか初詣の人波はそこへは流れていきません。そこには神武天皇陵があるというのに。日本書紀に言う「うねびやまのうしとらのみさぎ畝傍山東北陵」、すなわち神武天皇が葬られたとされているところです。橿原神宮に主神として祀られている神武天皇の墓所は、初詣で賑わう神宮と同じ神苑の中にありながら、訪れる人も少なく、別世界のような森厳さを漂わせています。

現在の神武天皇陵は、江戸時代末期の文久三年（一八六三）に、「うねびやまのうしとらのみさぎ畝傍山東北陵」に治定されたもので、明治三八年（一八九八）、現地にあった二ヶ所の小丘をつな繋ぎ合わせて八角形の墳丘（径三三祀、高さ六祀）に造成したものです。この造成された埋葬施設もない墳丘に神武天皇が葬られているかどうかは、治定や造成のいきさつ経緯からして議論するだけ無駄でしょう。このような事情のわかっている人は、橿原神宮に初詣をしても神武天皇陵には参拝する気になれないのかも知れません。

初詣をして神武天皇に新年の幸運をお祈りしたにもかかわらず、同じ神武天皇が葬られたとされているりようほ陵墓に人波が向かわない大きな理由は、陵墓治定や墳丘造成の経緯もさることながら、神武天皇その人が、作り出された架空の人物とされていることにあると思われまふ。作り出された架空の人物なら葬られたとされる墓も架空ですから、治定や造成の経緯を持ち出すまでもなく、誰が敬虔な気持ちで参拝するでしょうか。

現在の歴史学では神武天皇は作り出された架空の人物とされていますから、小・中学校の社会科や高校の日本史の教科書には神武天皇の名前や説話は、一部のもの（『新しい歴史教科書』扶桑社）を除いてほとんど出てきません。作り出された架空の人物であり、その説話も過去の歴史事実を反映したものではないとされ、歴史上の存在を完全に否定されているのですから授業に使う歴史の教科書に出てくるはずもないのです。学校の教科書にも出てこないし、授業でも教わらないとすれば知識として吸収する機会がほとんどないわけですから、その名前や説話を知っている人もどんどん少なくなっているに違いありません。初詣の人波が神武天皇陵へ向かわないのも当然のことでしょう。初詣は日本人独特の宗教観と生活習慣に基づく年中行事の一つとして認識している人が多いのではないのでしょうか。その神社にどのような神が祀られ、どのような伝承が語り継がれ、それが自分や家族、あるいは先祖とどのように関わっているか、などの宗教観に基づいて新年のお詣りをする人は少なくなっているのではないのでしょうか。

第一代天皇とされ、現天皇家の祖先とされている神武天皇については、いわゆる「神武東征」説話が古事記・日本書紀にかなり詳しく語られています。現在ではこの「神武東征」説話が全て作り話とされ、従って過去の歴史事実を何一つ反映したものではないとされており、それを証明するための研究が盛んに行われて、それ相応の成果を取めているやに見えます。すなわち、「神武架空説」は現在の常識であり、定説となっています。

作り話だという前提で古事記・日本書紀の語る「神武東征」説話を一読すると、誰もが感じるのではないかと思います。何故？と首を傾げたくなる二つの不思議に出会います。しかも定説では二つの不思議に対する明確な答えが示されていないように思われるのです。

一つは、何故、こんな話をわざわざ造作するのか、造作しなければならないのか、というような話がいくつも出てくるのです。神武を初代天皇として相応しい尊貴な徳の高い人物として造作すればよいものを、何故か、騙し討ちや残虐な殺戮場面を何度も描いて、むしろ残忍非道な人物に仕立て上げているようにさえ思えるのです。神武の後を嗣いだとされる綏靖天皇は、異母兄を殺して二代目に収まっていますが、何故、こんな話をわざわざ造作する必要があるのか理解に苦しみます。古事記にいたっては、神武天皇の死後、その子（多藝至美美命）が神武の正妃だった継母（伊須氣余理比売）を自分の妃にした話まで載せています。綏靖は、この異母兄であり、母（伊須氣余理比売）の夫（義理の父）である多藝至美美命を殺して二代目の天皇になったとしているのです。こんな話までどうしてわざわざ造作したのだろうと不思議なりません。

二つは、「神武東征」説話には古事記・日本書紀が編纂された奈良時代にはなかった地形や、その地形にまつわる地名が出てくるのです。奈良県と大阪府の境をなす生駒山の西麓（大阪府側）のクサカ・タテツなど現在でも残っている地名です。これらは瀬戸内海を東へ航行してきた神武が、船を停泊して上陸し、長髓彦と戦い、敗退したところにまつわる地名として出てきます。地名の残存率はかなり高いとされていますから現在まで残っていても何の不思議もありますが、問題は、神武が停泊・上陸した地点が、奈良県と大阪府の境にそそり立つ生駒山の西麓だとされていることであり、クサカ・タテツなどもこのあたりの地名だということです。つまり神武は生駒山の西麓まで船で行き、クサカ・タテツの地名が残るところに停泊・上陸して長髓彦と戦い、再び船で大阪湾に逃れたこととなります。生駒山西麓の地域から大阪市の上町台地にかけて広がる平地を河内平野と言いますが、神武は大阪湾から生駒山の麓までこの河内平野を船で往復したことになるのです。現在の地形からそんなことが想像できるでしょうか。同じことは奈良時代にも言えることであって、古事記・日本書紀が編纂されていたころも河内平野は既に陸地であって、大阪湾から生駒山の麓まで船で行けるはずもなかったのです。船で航行することなどおおよそ不可能な河内平野を大阪湾から生駒山麓まで船で往復したなどというような話をわざわざ造作する必要がどこにあるのでしょうか。

以上、二つの不思議が、「神武東征」説話が造作されたとする歴史学の常識・定説に納得できない理由です。

河内平野は、縄文時代には河内湾と呼ぶに相応しい海域で、大阪湾に大きく口を開いていたことや、弥生時代には大阪の上町台地が北に伸びて大阪湾との口が狭くなり、周囲の河川が運んでくる土砂の堆積で面積が縮小しつつあったものかなり広い汽水湖、河内湖と呼ぶに相応しい水域であったことが現在ではわかっています。上町台地がさらに北に伸びて対岸とくっつき、大阪湾との通路が閉ざされたのは古墳時代に入ってからで、その後も土砂の堆積が進み、いつしか低湿地の多い河内平野が形成されていったのです。古事記・日本書紀が編纂された奈良時代には、河内湾や河内湖の名残はすっかり姿を消し、船で往来するなどおおよそつかない地形になっていたのですから、「神武東征」説話、特に生駒山西麓の停泊や上陸・戦闘の話など造作できるはずもなかったと考えざるを得ません。上町台地を舞台に造作した方が怪しまれずに済むだろうに、何故、わざわざ生駒山麓にしたのか理解のしようがないではありませんか。

それどころか「神武東征」説話に出てくる河内湖は弥生時代の地形によく似ているのです。大阪湾と河内湖を結ぶ水路を「浪速渡を経て」（古事記）、「難波碕（上町台地の先端）に到るときに、奔き潮有りて」（日本書紀）と表現しているところなど、潮の干満時に狭い水路を速い潮流が往き来する様子を現しているように思えるし、生駒山の麓まで水域が広がっていなければクサカやタテツに船を着けることはできません。このようなことから「神武東征」説話は、遠い弥生時代の昔から伝わる古い伝承にかなり忠実に従ったものではないか、と考えられるのです。こうしていつの間にか、歴史学の常識であり定説である「神武東征」説話造作説に疑いを抱くようになりました。

## 二、和歌山平野から熊野へ

### 1, 「南方」の論理 (資料1 参照)

「神武東征」説話が、古事記・日本書紀編纂に際して「造作された架空の物語」だとする常識・定説に対して、弥生時代からの古い伝承を伝えたものであり、「神武東征」は実際にあったことだと主張されている古田武彦氏が、『古代は輝いていたⅡ (日本列島の大王たち)』(朝日新聞社・朝日文庫)で述べられている「南方」の論理を知るにおよんで、定説である「造作説」に対する疑問がますます深くなってきました。

古事記によると、神武が日下の<sup>たてつ</sup>蓼津で<sup>とみびこ</sup>登美毘古(長髓彦)と戦って敗退するとき、<sup>みなみのかたよりまわりいでまししとき</sup>「自南方廻幸之時、<sup>ちぬのうみにいたりて</sup>到血沼海」と、南の方へ廻って血沼海(大阪湾の和泉沿岸の海)に脱出しています。低湿地が多かったとは言え、奈良時代にはすでに陸地であった河内平野を生駒山の麓から船で南の方へ脱出することなど、古事記・日本書紀編纂時の史官にとっておよそ理解しがたい不可解なことであったに違いありません。ところが、この脱出行を弥生時代の地形に当てはめてみると、不可解でも何でもないことがわかります。弥生時代には、河内平野は生駒山の麓まで広がる汽水湖であり、逆に船でなければ大阪湾へ脱出できないのです。では「南方」とは何でしょうか。生駒山の麓から南の方へ向かうと河内湖の南岸を巡って上町台地に突き当たり、北上しなければ大阪湾に出られません。それでは南の方へ逃れて大阪湾に出たことにならないでしょう。

「南方」の「方」は<sup>ひらかた</sup>「枚方(潟)」「新潟」などの<sup>かた</sup>「潟」ではないか。調べてみると、大阪市淀川区を通る地下鉄御堂筋線に<sup>にしなかしまみなみかた</sup>「西中島南方」、阪急電鉄京都線にはズバリ<sup>みなみかた</sup>「南方」という駅があります。ともに西中島三丁目にあり、淀川に架かるJR東海道線の鉄橋や新淀川大橋を北へ渡った地域です。現在の淀川区西中島と東淀川区東中島の淀川沿いには、かつて<sup>みなみかた</sup>「南方」という町名があったのですが、淀川区は昭和四十九年に西中島に、東淀川区は同五十四年に東中島に変更され、それ以後「南方」の町名は姿を消して、二つの駅名にその名残をとどめるのみとなりました。弥生時代、北へ伸びてきた上町台地と対岸の間、河内湖と大阪湾を結ぶ潮路の北岸あたりに位置しており、そこに広がる「潟」を北岸から<sup>みなみかた</sup>「南潟」と呼んでいたのではないのでしょうか。古墳時代に入ると上町台地の北端が北岸と接続して河内湖と大阪湾が分断され、そこに広がっていた<sup>かた</sup>「潟」もいつしか姿を消してしまい、「ミナミカタ」という地名だけが残存したものであると思います。神武はまだ<sup>みなみかた</sup>「潟」であった<sup>ちぬのうみ</sup>「南方」から血沼海へ脱出したのです。

このように考えると、古事記の<sup>みなみのかたよりまわりいでまししとき</sup>「自南方廻幸之時、<sup>ちぬのうみにいたりて</sup>到血沼海」という記述は、生駒山西麓の停泊・上陸・戦闘記事や地名なども含めて、河内平野が汽水湖であり大阪湾とつながっていた弥生時代から伝わる古い伝承に基づいたものと理解せざるを得ません。古事記の編纂担当史官が、遠い昔の弥生時代の地形やその変化を知る由もなかったでしょうから、わけのわからない造作などできるはずがないではありませんか。ところが古事記の後に完成した日本書紀は、編纂時前後の地形からは理解できない不可解な脱出行をすっぱり省いてしまい、生駒山麓からいきなり<sup>ちぬ やまきのみなと</sup>「茅渟の山城水門」(大阪湾の和泉の港)へ脱出させてしまいました。この脱出行が日本書紀から省かれたのは、弥生時代から伝わる古い地形に基づく伝承が編纂担当史官の理解を超え、意味不明の不可解な行動としか考えられなかったからでしょう。遠い昔に河内湖があったという認識が全くなかったから、大阪湾から生駒山西麓への舟行も<sup>かわよりさかのぼりて</sup>「遡流而上りて」と記さざるを得なかったのでしょう。

詳しくは先に紹介した古田武彦氏の著書(朝日新聞社・朝日文庫)をご参照下さい。

## 2、和歌山平野と紀ノ川流域（資料2①参照）

（地図中に紀ノ川旧河口とあるのは奈良時代の河口です。弥生時代の河口は現在の河口から約4キロ上流あたりにあったと思われます）

生駒山麓の戦いで敗れた神武とその武装船団は「南方」より「血沼海」に逃れて大阪湾を南下し、やがて和歌山平野に姿を現します。

古事記は「紀国の男之水門に到りて…（五瀬命の）<sup>いつせのみこと</sup> 陵は即ち紀国の<sup>かまやま</sup> 竈山に在り」と記しており、日本書紀は「進みて紀国の竈山に到りて、五瀬命、<sup>いくさ</sup> 軍に薨りましぬ。因りて竈山に葬りまつる」としています。生駒山麓の戦いで重傷を負った神武の兄、五瀬命の死亡したところが若干異なっていますが、両書とも竈山に陵がある、または葬ったとしています。ところが、生駒山麓や次の到着地である熊野に比べて、和歌山平野での記述は極めて少ないのです。古事記にいたっては先述の竈山の後、いきなり「其地より廻り幸<sup>そのち</sup>でまして、熊野の村に到りまししとき」と熊野に来てしまっています。日本書紀は「<sup>みいぐさ</sup> 軍、名草の<sup>むら</sup> 邑に至る。則ち名草戸畔といふ者を誅す」と続けた後、「<sup>いつせのみこと</sup> 遂に狭野を越えて、熊野の<sup>みわのむら</sup> 神邑に到り」と、やはり和歌山平野での記述は少ないのです。神武の兄、五瀬命を葬ったり墓を造ったりしているのだからもう少し和歌山平野のことが書かれていてもよさそうに思うのですが、単なる通過地点としてしか扱っていません。

普通、奈良盆地へ行くのに、生駒山を越えられなかったからと言って、紀伊半島をぐるりと巡った先にある熊野へ迂回し、そこから紀伊半島を縦断（紀伊山地横断）するような難路を目指すのでしょうか。答えはノーでしょう。生駒山を越えることができなくても、わざわざ熊野へ迂回するまでもなく、奈良盆地へのルートはほかにもいくつかあったはず。高安山や葛城山、あるいは金剛山の麓を廻る道もあっただろうし、大和川伝いに入る道もあったはず。現に日本書紀では生駒山麓の戦いが起こる前に、大和川流域の<sup>たつた</sup> 竜田へ出ようとして道に迷って引き返した話が記されていますが、道不案内もさることながら、重傷を負った兄を抱え、敗軍の兵を率いた神武は敵の勢力のおよぶところからできるだけ遠くへ脱出しようとしたのでしょう。それが神武を和歌山平野にまで行かせた主な理由ではないかと考えられます。

それにしても、和歌山平野から熊野を目指して再び船出したのは何故でしょう。奈良盆地を最終目的地としていたのであれば、わざわざ熊野へ迂回して、距離も長く険しい難路が続く紀伊山地横断ルートをとらなくとも、和歌山平野からなら紀ノ川流域を東へ進む平坦で距離も短いルートがあります。現在では和歌山市から紀ノ川沿いの国道二四号線を東へ走れば、途中奈良県の五條市を経てそのまま御所市、奈良盆地南西隅の<sup>かつらぎ</sup> 葛城地域へ出ることができます。熊野から紀伊山地を北に横断するルートとは比較ならないほど距離も短く平坦な道です。和泉山脈から紀ノ川までの間には、広くはないまでも平地が流域沿いに伸びており水田が続いています。紀ノ川が吉野川に名前を変えるところ、奈良盆地の葛城地域への入り口に当たる五條市へ出るにしても、熊野からなら山また山の険しい紀伊山地を横断しなければならないのに比べ、紀ノ川ルートはほとんど平地であり、船で遡上することもできるのです。五條市までの距離も紀伊山地横断ルートだと熊野から約一三五キロにもおよび、これに和歌山平野から熊野までの船旅が加わります。ところが紀ノ川ルートだと和歌山市から約五〇キロにもなりません。神武がたどったとされる吉野までだと、熊野から約一七五キロ、和歌山市からは約六四キロです。両ルートにはこれほど大きな差があるのに、神武は何故か距離も長く険路でもある紀伊山地横断ルートをとっています。現在のわれわれから見ても極めて不合理な選択であるように思えます。「神武東征」説話造作説の理由の一つに数えられる所以でもあります。逆に、造作するなら合理的なルートをとらせた方が説得力があるのではないかと考えられますが。

「短距離で、楽に行ける紀ノ川ルートがあるのに、わざわざ熊野へ迂回して紀伊山地を横断する険路を選ぶのはおかしいではないか」と誰しも疑問を抱く神武の行動原点には、熊野へ迂回しなければならなかった「よほどの理由」があったはず。



神武の不可思議な行動の原点である「よほどの理由」については色々な考え方がありますが、何故か、和歌山平野と紀ノ川流域に住んでいる人々の生活や社会状況にふれたものがあまり見あたりません。和歌山平野は、神武とその武装集団が熊野へ迂回する出発点になったところですから、そこに展開されている人々の生活や社会状況を探ることによって、その不可解な行動の原点とも言うべき「よほどの理由」の一端が浮かんでくるのではないのでしょうか。

日本各地の弥生時代の始まりは、その地理的条件によってかなり差のあることがわかっていますが、和歌山平野の弥生時代は前期（前三世紀）から始まっていることが、太田黒田遺跡（平成十二年十二月二十日・朝日新聞）をはじめとする数多くの遺跡や出土遺物によって証明されています（和歌山市史）。そしてこのことは、「よほどの理由」を探る上で重要な意味を持っています。何故なら、神武とその武装集団が和歌山平野に姿を現したころは、そこにはかなり成熟した弥生社会が形成されていた、ということの意味するからです。つまり、神武とその武装集団は成熟した弥生社会の真っ直中に姿を現したのです。

和歌山平野では「神武東征」のおよそ二〇〇年以上前から弥生社会の形成が始まっていたことになりま。そこでは洪水・干害などの災害や、近隣集落や海からの襲撃者との戦いなどに耐えながら生き抜いてきた人々やその子孫たちが、二〇〇年以上の歳月をかけて築いてきた弥生社会が営まれていたのです。貧富の差や身分の差による支配・被支配の仕組みも出来上がり、複数の集落を支配する有力な豪族もいくつか居たことだろうし、その主である王もいた可能性もあります。あるいは和歌山平野の大部分を、また紀ノ川流域の大部分を支配する王が居たかも知れません。そのような和歌山平野に突如、見も知らぬ武装集団が上陸してきたとしたら、そこを過去・現在および将来の生活基盤として先祖代々営々として生きてきた人々は、どのような反応を示すでしょうか。また、集落の指導者やその上に立つ豪族・王たちはどのように対処するのでしょうか。弥生前期から二〇〇年以上の歳月をかけて築いてきた生活の基盤たる弥生社会を、不意の侵入者に簡単に譲るわけも、素直に従うわけもないでしょう。不意の侵入者である神武とその武装集団から護ろうとするのではないのでしょうか。

突如、海から物騒な武装集団がやってきて近くの集落に押し掛け、食料と寝る場所を要求したとしたら、その弥生集落の人たちはどんな対応をしたでしょうか。武装集団の威力で一時は一つ二つの集落を制圧してきたとしても、知らせを受けた周辺の集落や豪族・王たちの指揮などによる組織的な抵抗・反撃が始まると、場合によっては「生駒山麓の戦い」の二の舞になる恐れがあります。日本書紀によると、神武とその武装集団は五瀬命を<sup>かまやま</sup>竈山に葬って、「名草の<sup>むら</sup>邑に至って名草戸<sup>とべ</sup>畔<sup>ころ</sup>を誅した」後、和歌山平野から姿を消しています。これなどは、神武とその武装集団が和歌山平野に形成されている弥生社会の激しい抵抗と反撃にあり、和歌山平野にとどまらなかったことを意味していると考えられます。

一つだけ例を上げますと、奈良県五條市中町の中遺跡から住居跡や環濠らしい溝を含む弥生時代の大規模な集落跡が見つかっています（平成十四年五月二十四日・朝日新聞）。吉野川南岸の河岸段丘平地にあって、阪合部小学校の建て替えに必要な敷地だけの発掘調査であるにもかかわらず、県内でも異例と言われる一五棟を越える多数の住居跡が見つかっており、重なっている住居跡から弥生全期間にわたって存続していた遺跡だと推定されています。余談ですが、中遺跡から1kmほど下流の南岸にある火打ち遺跡からは、明治二十五年頃に<sup>けさたすきもん</sup>袈裟禪文の入った銅鐸が発見されています（五條市史）。このほか、和歌山県橋本市の血縄遺跡など、紀ノ川流域には弥生時代の遺跡が数多く点在しています。

和歌山市から奈良県五條市にかけて紀ノ川流域に点在する弥生遺跡が語るように、紀ノ川流域にも弥生前期から弥生集落が営まれ、そこを生活の基盤とする人々が弥生社会を営々と築いていたのです。神武とその武装集団が紀ノ川流域を進もうとするとき、そこに住む人々は自分たちの生活基盤である弥生集落を突然の侵入者から護るために、集落指導者や豪族・王たちのもとに結集して抵抗と反撃を繰り返すことでしょう。神武とその武装集団にとって紀ノ川流域は、そこに形成されている弥生社会の抵抗と反撃を排除しながら進まなければならない険しいルートだったと考えられ、決して楽なルートではなかったのです。

### 3、<sup>かまやまのみささぎ</sup>竈山陵と紀ノ川河口（資料2①参照）

「生駒山麓の戦い」で重傷を負った神武の兄、<sup>いつせのみこと</sup>五瀬命は、古事記では南方より<sup>みなみかた</sup>血沼海に脱出した後「<sup>きのくに</sup>紀国の男之水門に到りて…崩りましき。陵は即ち<sup>かむあが</sup>紀国の<sup>みささぎ</sup>竈山に在り」とされ、紀国の男之水門で亡くなり、墓は<sup>かまやま</sup>竈山に在るとしてはいますが、日本書紀では「<sup>みいぐさ</sup>軍、<sup>ちぬ</sup>茅渟の<sup>やまぎのみなと</sup>山城水門に至る」とし、ここを「<sup>おのみなと</sup>雄水門」と号けて「<sup>きづ</sup>進みて紀国の竈山に到りて<sup>みいぐさ</sup>五瀬命、<sup>かむあが</sup>軍に薨りましぬ。困りて<sup>よ</sup>竈山に葬りまつる」となっていて「オノミナト」の場所や五瀬命の亡くなったところが異なっています。

古事記に言う「<sup>おのみなと</sup>紀国の男之水門」も、日本書紀に言う「<sup>ちぬ</sup>茅渟の<sup>やまぎのみなと</sup>山城水門（<sup>やまのいのみなと</sup>山井水門・<sup>おのみなと</sup>雄水門）」も現在の泉南市樽井付近ではないかとされています。樽井周辺に<sup>おのさと</sup>男里・<sup>おのさとがわ</sup>男里川や<sup>おのじんじや</sup>男神社があり、このあたりに船着き場があったのではないかとされています。古事記では紀国、日本書紀では茅渟（和泉国）と違いがありますが、両書とも「<sup>きのくに</sup>紀国の<sup>かまやま</sup>竈山」は一致しているので、竈山について若干検討を加えてみたいと思います。

角川地名辞典の和歌山県を調べてみると、和歌山市で「カマヤマ」と発音する地名は、「和田の竈山神社」と「木ノ本の釜山古墳」の二つしかなく、釜山古墳は和歌山市と言っても和泉山脈麓の平地、和歌山平野の北の外れに位置していて、当時の紀ノ川河口からも北へ遠く離れているので一応除外することとし、ここでは和田の竈山神社について調べてみることにします。

<sup>えんぎしきだいしや</sup>延喜式内社であり旧官幣大社でもある<sup>かまやま</sup>竈山神社の社の北には、<sup>やしろ</sup>五瀬命の墓と伝えられる<sup>ろくろく</sup>径六尺、高さ一尺の墳墓があります。延喜式諸陵寮墓条によると、遠墓として「<sup>かまやま</sup>竈山墓、<sup>かまやま</sup>五瀬命、<sup>おのみなと</sup>在紀伊国名草郡」とあり、紀伊国唯一の陵墓だとしています。

和歌山市史によると、竈山神社のある和田にも弥生遺跡があり、弥生土器が多数出土しているとのこと。神武がやってきたころには、ここにも弥生集落が形成されていたのです。神武とその武装集団は「<sup>きづ</sup>進みて<sup>きのくに</sup>紀国の<sup>かまやま</sup>竈山に到りて」食料と休息、さらには服従を求めたのではないのでしょうか。「生駒山麓の戦い」で傷を負い、亡くなったのは五瀬命だけではなかったでしょうから、上陸地点からさほど遠くない集落で食糧を確保し、休息する必要があったはず。

ところが、神武とその武装船団が外海の荒波を避けて紀ノ川河口付近の入江に停泊したとすると、現在の河口から和田の竈山まで少し離れすぎているのではないかと、ということに気づきました。地図上で計測しただけでも直線距離にして六<sup>ろく</sup>尺ほどあり、上陸直後に押し掛けるには遠すぎるように思えます。地図上の直線で六<sup>ろく</sup>尺ほどですから実際の道のりはもっと遠いはずで、もし河口付近に船を停泊させていたとしたら、その間に集落の二つや三つあってもおかしくない距離ですから緊急事態が起こったとき、船の留守部隊と陸上部隊で連絡を取り合うのに時間がかかりすぎたり、妨害を受ける危険があります。何故、こんな陸地内に<sup>いつせのみこと</sup>五瀬命の墓を造ったのか、理解に苦しみます。

それに、古事記にも日本書紀にも「オノミナト」から「竈山」までの途中経過が全くありません。両書とも「オノミナト」から「竈山」まで直行していて、上陸地点の記載がないのです。日本書紀は<sup>おのみなと</sup>雄水門から「<sup>きづ</sup>進みて<sup>きのくに</sup>紀国の<sup>かまやま</sup>竈山に到りて」となっており、古事記にいたっては五瀬命が亡くなった後の地名説話に続けて、いきなり「<sup>みはか</sup>陵は即ち紀国の竈山に在り」としています。どこかに上陸してから陸路で竈山へ行ったようには見えず、船で竈山へ直行したように思えてならないのです。しかし、現在の和歌山平野の地形からは船で和田の竈山まで行けるはずもありません。最も近い和歌浦湾の海岸からでも直線距離で約二<sup>に</sup>尺の陸地内にあるのです。

古事記・日本書紀の記述では船で直行したように思えるのに、現実の地形からは不可能である、という問題に随分悩まされましたが、次のように考えてみるにより、この問題を解く光明が見えてきました。

大阪平野の中央部から東部を構成する現在の河内平野も縄文の昔は大阪湾の一部をなす河内湾であり、弥生時代には発達北上する上町台地によって大阪湾との出入りが狭められ、また淀川水系や大和川などの河川による堆積作用によって面積が縮小して河内湖に変化しています。大阪湾との出入りが上町台地によって閉じられ、さらに進む河川の堆積作用で低湿地に変化したのは古墳時代に入ってからです。これ

と同じような地形の変化が和歌山平野でも起こっていたのではないか、いや、起こっている方がむしろ自然なのではないか、と調べて調べ直してすることにしました。

この考えを証明してくれたのが和歌山県立博物館に展示されている一枚のパネルでした。パネルには紀ノ川の現在と古代の河口や流路が描かれていて、どの川もそうであるように紀ノ川も長い年月の間に流路や河口はいうまでもなく、上流から運んできた土砂の堆積により周辺の地形を度々変えていました。

パネルと和歌山市史に基づいて弥生時代の和歌山平野を再現してみるとだいたい次のようになります。

今から五〇〇〇年前ごろ（縄文時代中期ごろ）の和歌山平野は紀伊湾と呼ぶに相応しい広い海域になっており、北岸は大阪府と和歌山県の境をなす和泉山地の麓を洗い、南部では名草山（山腹に紀三井寺がある）・雑賀山（西端が雑賀崎）・岡山（和歌山城のある高地）などが孤立した島嶼として海上に浮かんでいました。現在は和歌川に注いでいる和田川の河口も遙か東方にあり、和田湾と呼ぶに相応しい水域に河口がありました。その後、海水準の低下に呼応して、加太南岸の磯ノ浦あたりから西南西に向かって海岸砂州が形成されるようになり、やがて紀伊湾はこの海岸砂州によって西側の紀伊水道と東側の広い水域（入り江）とに分断されます。

和歌山市西北端の加太は大阪府泉南郡の南にあり、加太海水浴場や友が島へ渡る漁港のあるところでした。

弥生時代には、加太の南岸、つまり紀伊水道に面した南岸の東側、磯ノ浦あたりから西南西に伸びる大きな海岸砂州が形成されており、それが雑賀山（雑賀崎）の東部高地にまで達していました。砂州の幅は、狭いところ（西庄）で約四〇〇㍎、もっとも広いところ（鷺ノ森＝和歌山城の北部あたり）では約二〇〇〇㍎にも達していたそうです。紀伊水道に面したこの砂州の西岸は延々と砂浜が続き、今もその一部に二里ヶ浜という地名が残っています。

弥生時代には紀ノ川の河口は、現在の河口より約四〇㍎前後上流にあったらしく、紀ノ川に架かっている県道一五号線の北島橋（南海電鉄の鉄橋より少し下流）あたりかと推測されます。河口の西側は、河口から先述の海岸砂州の東岸まで約一〇〇〇㍎ほどもある広い水域でした。この水域は海岸砂州の東岸に沿って南の方へ広がり、名草山の北麓を洗って西麓で紀伊水道と接していたと思われます。当時の河口近くの南側に当たる太田・黒田・秋月・鳴神あたりは紀ノ川の堆積作用によって早くから陸地化が進んでいたところで、弥生前期の遺跡が数多く残っているのもそのせいでしょう。

この水域の東岸に竈山神社の鎮座する和田があるのです。和田の北部を流れ、現在和歌川に合流している和田川の河口は、弥生時代のころには神前の南あたりにあったとされていますから、和田の西北端にあったこととなります。そして竈山神社は、この和田川の河口付近から南へ延びる海岸の近くにあるのです。

紀ノ川の河口が、加太の南岸あたりから雑賀山の東側付近まで伸びていた砂州を突き破って現在のようになり紀伊水道に直接開くのは遙か後世になってからです。

弥生時代の和歌山平野の地形がこのようだったとすると、また、五瀬命を葬ったとされる竈山が現在の竈山神社のあたりだとすると、男之水門（雄水門）を出発した神武とその武装船団は、和田の竈山近くの浜辺まで船で直行（できた）したのではないかと、と考えられるのです。加太から南東に伸びる砂州に沿って航行し、雑賀崎から新和歌の浦を東へ進むと、名草山を右手に見ながら和田の竈山近くの浜に到ります。ここに船団を停泊させ、上陸したのではないのでしょうか。古事記は男之水門の地名由来を記した直後に「陵は即ち紀国の竈山に在り」としており、日本書紀も雄水門から「進みて紀国の竈山に到りて」と記しているところから見て、そのまま船で進んで竈山に到ったとしか考えられないのです。このように見えてくると、古事記・日本書紀の記述が、弥生時代の和歌山平野の地形と適合していることがわかります。すなわち、和歌山平野も河内平野と同様、弥生時代の地形を伝える古い伝承に基づいて語られていると考えられるのです。また、吉備の高島を出発してから熊野に到るまでの間は、進むも退くもすべて船で行われたことを前提として語られているのではないのでしょうか。

奈良時代の紀ノ川河口は現在の和歌川河口付近（和歌浦湾）にあったとされていますから、奈良時代には和田の竈山あたりも既に陸地化しており、船で直行できないことがわかっていたはずで、にもかかわ

らず古事記が、神武が途中の海岸に上陸してから竈山を目指したように記述しなかったのは、弥生の昔から伝わる伝承に従って記述したからではないでしょうか。古事記編纂のこのような姿勢を見るにつけ、古事記・日本書紀を架空の作り話だとする常識や定説を素直に受け容れるわけには参りません。

和田の竈山近くまでやって来た神武とその武装船団は、そこに停泊・上陸して和田の弥生集落を一時的に制圧し、五瀬命や落命した将兵を葬ったり、負傷者の手当と暫しの休息を得たあと、次なる行動の拠点にしようとしたのでしょう。

#### 4、和歌山平野の銅鐸<sup>どうたく</sup>

近畿の弥生集落とその社会を知る上で、見逃すことのできない重要な要素の一つに銅鐸があります。和歌山平野ではどのような銅鐸がいつごろから使われだしたのでしょうか。和歌山県下からは、現在二七ヶ所から三一個の銅鐸が出土しており（このほか具体的な出土地の明らかでないものが八個あります）、そのうち和歌山平野からは六個出土しています。（資料2①参照）

和歌山平野出土の銅鐸	型式	製作時期	出土地
① 吉里出土袈裟禪文銅鐸 <sup>けさたすきもん</sup>	扁平鈕式 <sup>へんぺいちゆう</sup>	中期末～後期初め	高地性集落
② 橘谷出土袈裟禪文銅鐸	扁平鈕式	中期末～後期初め	高地性集落
③ 紀伊砂山出土袈裟禪文銅鐸 <sup>とっせんちゆう</sup>	突線鈕式	後期中ごろ	中洲
④ 宇田森出土袈裟禪文銅鐸	突線鈕式、	後期中ごろ	河岸
⑤ 有本舟渡出土流水文銅鐸	扁平鈕式	中期末～後期初め	低地性集落
⑥ 太田黒田出土袈裟禪文銅鐸 <sup>がいえんつきちゆう</sup>	外縁付鈕式	中期前半	低地性集落

以上六個の銅鐸が出土しています。もっとも古い型式の菱環鈕式<sup>ひしかんちゆう</sup>（前三世紀～前二世紀）の銅鐸が出土していないものの、和歌山平野も銅鐸祭祀圏の一角にあったことを示しており、それは弥生中期前半ごろから始まったとされています（和歌山市史より）。

銅鐸の年代判定は、吊り下げたり、引っかけたりするための鈕<sup>ちゆう</sup>の形で行われています。

**最古段階**のものを、断面形が菱形に見えるところから菱環鈕式（前三世紀～前二世紀）と言ひ、高さ二〇センチぐらいのものが主流です。和歌山県からは見つかりません。

次ぎの**古段階**とされるものが外縁付鈕式<sup>がいえんつきちゆう</sup>（前二世紀～前一世紀）で、菱環鈕の外側に扁平な部分を付け加え、高さも四〇～五〇センチぐらいになり、徐々に装飾化が始まります。和歌山平野でも早くから陸地化が進んだとされる太田黒田遺跡から出土していますから、和歌山平野では前二世紀ごろから銅鐸祭祀が始まったと思われるのです。

**中段階**になると菱環鈕の外側だけでなく内側にも扁平な部分を付け加えており、扁平鈕式<sup>へんぺいちゆう</sup>（前一世紀～一世紀）と言われています。横から見るとかなり薄くなって、ますます装飾化が進みます。和歌山平野では六個のうち三個がこの型式のもので、神武が和歌山平野に上陸したころのものではないかと思われるます。

**新段階**の突線鈕式<sup>とっせんちゆう</sup>（一世紀～三世紀）になると、吊り手本来の機能が失われてしまい、大きさは六〇センチ以上になり、中には一センチを超えるものもあります。和歌山平野では宇田森遺跡と紀伊砂山遺跡から見つかり、後期に入ってから銅鐸祭祀が行われていたとされています。なお、宇田森遺跡出土の銅鐸については、個人の間を転々としたため拓本によって判断されたそうです。

また紀南では、高地性集落にともなう突線鈕式の銅鐸が卓越しており、和歌山平野より遅く銅鐸が使われだしたことを示しています。

以上の銅鐸の年代観は、佐原眞氏の見解によるもの（『銅鐸を造る一大岩山銅鐸とその時代―』銅鐸博物館・野洲町立歴史民俗資料館図録）で、各段階、各型式がさらに細かく分類されていますが、煩雑になる恐れがありますので要約だけを紹介しました。

神武が和歌山平野に侵入する前から使われているものもあれば、それ以後のものもあるので、神武が銅

鐸祭祀に直接、影響を与えた形跡は残っていないのではないかと思います。

なお、和歌山県からは、現在までのところ銅鐸の鋳型は発見されていません。

## 5、紀伊半島西南部沿岸

和歌山平野に上陸した神武とその武装勢力は、ここを拠点として紀ノ川ルートを進軍し、再び奈良盆地を目指そうとしたのではないかと思います。弥生社会の手痛い抵抗と反撃にあつて紀ノ川流域を進軍するどころか、和歌山平野にさえとどまることができず、再び海に浮かんで紀伊半島沿いに南下するしかなかったのでしょう。残された道は、沿岸を航行しながら適当な地を見つけて上陸し、そこから再び奈良盆地を目指すしかありません。

しかし、神武とその武装船団は、紀伊半島南端を廻って熊野地域に至るまで上陸することができませんでした。何故なら紀伊半島西南部沿岸の平地には、和歌山平野や紀ノ川流域と同じように、すでに多くの弥生集落が営まれており、弥生社会が形成されていたからです。

御坊市には環濠集落の堅田遺跡があり、ここからは弥生前期とされる青銅器の鋳型（鉦の石製鋳型）や朝鮮系松菊里型住居跡などが発見されています（平成十一年五月十一日・朝日新聞）。御坊市から海岸沿いに南東へ進んだところにある日高郡南部町の気佐藤徳山地区からも弥生前期の灌漑用と思われる大規模な堰が見つかっています（平成十四年三月二十四日・朝日新聞）。これらの弥生集落を前にしたとき、予想される激しい抵抗を考えると、とても上陸する気になれなかったのでしょう。

さらに、和歌山平野から西牟婁郡白浜町にかけて数多くの高地性集落が見つかっており、主要なものだけでも五十数カ所もあります（和歌山市史）。特に、半島西南部に四十あまりが密集しており、高地性集落の「逃げ城」的機能を考えると、これらは近隣集落同士や豪族同士の紛争に備えたものであると同時に、海からの侵入・襲撃にも備えたものでしょう。

以上のことから神武の時代には、紀伊半島西南部に点在する平地にも早くから弥生社会が形成されており、神武とその武装船団は激しい抵抗と反撃なしには停泊・上陸できなかつたであろうことがわかりただけだと思います。（資料2②参照）

## 6、熊野上陸（資料2②参照）

神武率いる武装船団は、やむなく紀伊半島南端の潮岬を廻って船先を北に向けざるを得なかつたわけで、古事記は「其地（竈山）より廻り幸でまして、熊野村に到りましし時」とし、日本書紀は紀国で名草戸畔を誅したあと「遂に狭野を越えて、熊野の神邑に到り、則ち天磐盾に登る」とし、両書とも和歌山平野から熊野までの途中経過について何も触れていません。和歌山平野からいきなり熊野へ来ているのですが、紀伊半島西南部沿岸に上陸できなかつたのですから、途中経過地について記述がなくとも別段不審とするにはおよばないでしょう。

潮岬の先端に立つまでもなく、紀伊半島の沿岸から太平洋を眺望するとき、はるか遠くに霞む水平線や、岩礁を打ち砕くかと思われる怒濤を目の当たりにして、この広い荒海を丸木船やそれを少し改造したような船で、しかも船団を組みながら乗り切れるだろうか、という思いにとらわれてしまいます。瀬戸内海や大阪湾とは比較にならない広大な海原を眼前にしたとき、誰でもとらわれる思いでしょう。しかし、その疑問はすぐうち消すことができました。瀬戸内海にせよ大阪湾にせよ、当時もっとも安全な航海方法は、陸地に沿って山などの地形を見ながら危険な岩礁を避けつつ進む沿岸航法だったと思われますから、その航法に長けた者が船を導くことによって紀伊半島沿岸を周航することは可能なはず。「神武東征」の第二の出発地は吉備であり、吉備の支援なくして東征は考えられませんから、神武の武装船団の中には沿岸航法に長けた兵士も居たはず。彼らが沿岸航法の技術を駆使して船団を導いたであろうことは十分考えられます。

さらに神武の出身地である北九州は、地図を見るまでもなく朝鮮半島とは一衣帯水の間にあつて、その

交流は縄文の昔から盛んに行われていました。北九州への水田稲作もこのルートから入ってきたとされています。北九州から朝鮮半島へ行くには玄界灘と朝鮮海峡を漕ぎ渡らなければなりません。その逆も同じです。つまり、玄界灘と朝鮮海峡を航海できる船と航海技術を持っていなければ交流はできなかった、逆に、持っていたからこそ交流が盛んだったということです。神武の出身地を考えると、神武とともに東征に従った将兵の中には、玄界灘や朝鮮海峡を漕ぎ渡った航海の練達者がいたとしても何の不思議もないばかりか、神武自身が朝鮮半島へ渡った経験者だったかも知れないのです。このように考えると、神武とその武装船団が紀伊半島を熊野まで周航できた可能性は、むしろ大きくなります。

熊野（現在の新宮市近辺）に上陸した神武はここで力尽き、絶体絶命のピンチに陥ります。この間の経過について古事記は、「大熊髪かに出で入りて即ち失せき。爾に神倭伊波禮毘古命、倏忽かに遠延為し、及御軍も皆遠延て伏しき」と記すのみで、遠延（病み疲れる）た原因を大熊のせいにしてあります。日本書紀は、狭野を越えた後「熊野の神邑に至って天磐盾に登り、再び海に浮かんで暴風に遭い、二人の兄（稲飯命と三毛入野命）を失う」という不可解な行動の後、「熊野の荒坂津（亦の名を丹敷浦）に至って丹敷戸畔という者を誅した」としてあります。おそらく丹敷戸畔という地元勢力の抵抗に合い「時に神、毒気を吐きて、人物咸に瘁えぬ。是に由りて、皇軍復振ること能はず」とやはり力尽きた様子を描いています。

神武とその武装集団が上陸したとされている熊野地域には、当時どのような社会が形成されていたのでしょうか。和歌山平野や紀ノ川流域、紀伊半島西南部沿岸地域と同じように弥生前期から弥生集落が営まれ、弥生社会が形成されていたのでしょうか。この地域に住む人々がどのような暮らしを営み、どのような社会を形成していたかを調べてみるにより、神武とその武装船団がこの地域に停泊・上陸した理由を探してみたいと思います。

以下は、「新宮市史」に基づく熊野地域の縄文・弥生時代の遺跡、出土遺物の状況です。

熊野速玉大社遺跡からは、縄文前期から晩期にかけての土器のほか、サヌカイトの打製石斧なども出土しており、縄文人の生活の跡がうかがわれます。この遺跡からは弥生土器が出土しておらず、縄文人の生活エリアだったようです。

神倉神社の御神体とされているゴトビキ岩（天磐盾）の側下に営まれた経塚の最下層から大小二十二個の銅鐸片が、昭和三十五年に発見されました。原型は高さ六〇釐の袈裟襷文の入った銅鐸で、その大きさや文様から弥生中期後半以後のものとされています。破片は約一釐の円形に散乱しているところから見て、中世の経塚築造に際して破壊されたものとされており、もともとどこにあったものか不明です。

阿須賀神社境内にある阿須賀遺跡は、新宮川河口から約一キロ西に位置し、徐福伝説の残る高さ約四〇釐の蓬萊山（円錐形）南麓にあります。弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が一〇軒確認されており、出土土器もそのほとんどが弥生時代終末期から古墳時代にかけてのもので占められています。弥生時代末期から古墳時代にかけて継続して人々が生活を営んだ遺跡だと思われます。徐福伝説にまつわる遺跡や遺物が全く見つからないばかりか、その当時（前三世紀末・弥生前期末）の遺跡・遺物も発見されていません。

日本書紀に「遂に狭野を越えて」とある狭野ではないかとされている佐野遺跡（未調査）は、JR佐野駅前から西北部の山麓に至る水田地帯にあり、根地原・久保・八反田地区から土器片が多数発見されています。ただそのほとんどが弥生土器、土師器、須恵器の破片で、全体的に阿須賀遺跡の出土品と類似しており、弥生土器のほとんどが弥生終末期のものとされています。

その他、宮井戸遺跡、明神山遺跡などからも弥生土器の破片が多数見ついているもののそのいずれもが阿須賀遺跡と同様、弥生時代終末期のものとされています。

以上のように熊野地域に点在するどの遺跡からも、弥生時代の初めから後期までの形跡が発見されていないのです。前述のゴトビキ岩側下の銅鐸については弥生中期後半以後のものだろうという以外、どこから、いつ、熊野へ持ち込まれたものか不明です。

これらの遺跡や出土土器などから、熊野地域に弥生時代が始まったのは弥生時代終末期ごろからではないか、という推測が成り立ちます。弥生時代前期から弥生社会が形成され始めた和歌山平野や紀ノ川流域、紀伊半島西南部沿岸地域と異なり、熊野地域は弥生時代の早い時期、前期あるいは中期にはまだ弥生時代に入っておらず、弥生後期以後、それも終末期に近いころから弥生時代が始まったのではないかと考えざるを得ないのです。

「神武東征」の時期を弥生時代後期初めごろ（一世紀初めごろ）と考えるとき、神武が熊野に上陸したころには、遺跡や出土遺物から推測して、この地域にはまだ弥生社会が形成されるにいたっておらず、例え弥生集落が存在していたとしても極めて希薄な状態で、弥生社会を形成する段階に至っていなかったと考えざるを得ません。しかし、古事記・日本書紀に「高倉下」や「丹敷戸畔」など熊野に在住していたと思われる人物の名前が出てくるということは、熊野にもそこに住む人々の生活があったわけで、当然集落もあり、何らかの社会があったこととなります。遺跡や遺物などから見る限りでは、「神武東征」のころにはまだ弥生社会が営まれていた様子もなく、弥生社会が形成されていた形跡が見られないところから、熊野地域に住んでいたのは弥生以前の人々、すなわち縄文人ではなかったかと思われるのです。

熊野地域に弥生時代が訪れるのは弥生後期の終わりごろのことと推測されるところから、神武が上陸したころは、この地域ではまだ縄文晩期の社会が存続していて、縄文集落が点在していたと考えられます。

神武とその武装集団は激しい抵抗と反撃が予想される、成熟した弥生社会の形成されている地域を避けつつ紀伊半島を周航して、未だ縄文時代から抜け出していない熊野に上陸したのです。そこには、成熟した弥生社会に比して人数が少なく、社会全体としての組織的行動に劣る縄文集落が点在しています。主に狩猟用の弓矢や石棒・石斧程度の、人間同士の組織的戦闘には不向きで殺傷力の弱い武器類しか所持しておらず、防御用の武器や盾なども備えていない人々の集落です。負傷兵を抱え、食料や水にも事欠き、疲労困憊状態にあった神武とその武装集団は、ここしにしか上陸できなかったのではないのでしょうか。

しかし、神武はここでも抵抗を受けたものと思われ、日本書紀では「神武は再び海に浮かんで二人の兄を失った」としており、熊野の荒坂津で「丹敷戸畔」を誅しています。これなど、縄文集落からも以外と手強い抵抗を受けたことを意味しています。神武とその武装集団は遂に力尽きて、「毒気を吐きて、人物咸に瘞えぬ。是に由りて、皇軍復振ること能はず」となっていました。

この絶体絶命のピンチを救ったのが熊野の高倉下です。高倉下は「師霊」という神剣（古事記では横刀）を神武に献上しました。古事記では「其の横刀を受け取りたまひしとき、其の熊野の荒ぶる神、自ら皆切り付きえき」とあって、神武と武装集団がこの横刀によって息を吹き返し、周辺の集落を征伐しています。

ここで気になるのが高倉下が献上した「師霊」です。古事記ではこれを「横刀」としており、太刀だとしています。腰に横たえる刀、佩刀のことです。短刀ならいざ知らず、腰に横たえる石製の太刀などありませんから、これは明らかに金属製です。弥生時代の金属製武器には銅製と鉄製のものがあり、銅製武器として銅矛・銅剣・銅戈・銅鏃などはよく耳にし目にもしますが、銅刀というのはあまり聞いたことがありません。銅はその性質上、刺突型の武器としては使えるものの、振り下ろして斬るのには向いていないのです。この「横刀」が太刀、振り下ろして斬る刀だとすると、それは鉄製の武器であることを意味します。金属器が使用されるようになったのは弥生前期からだと言われているのに、金属器、それも鉄製の太刀が縄文の世界に登場するのはおかしいのです。しかし、紀伊半島の南に広がる太平洋の荒波を目にしたとき、その気持ちは単なる杞憂であることがわかりました。

紀伊半島西南部沿岸に点在する弥生集落は、初めは何らかの事情で故郷を離れた弥生人が新天地を求めてたどり着き、開拓してできた村です。こうした、新天地を求めて故郷を離れた集団は、弥生時代を通じて日本列島内にあるいは陸伝いに、あるいは船で沿岸伝いに、弥生文化を広めていきました。熊野の沖合も東へ流れる黒潮に乗って開拓者たちの船団が幾たびも通り過ぎたに違いありません。そのうち運悪く難破した船が熊野の浜にうち寄せられたとしても何の不思議もなく、難破した船から鉄製の太刀を手に入れたりするのをごく自然の成り行きでしょう。

高倉下<sup>たかくらじ</sup>に救われた神武は、この地から奈良盆地へ通じる道のあることを知り、ヤタガラスという道案内を得て紀伊山地横断の途につきました。

和歌山平野から紀ノ川流域を通らずに熊野へ迂回した「よほどの理由」を、弥生社会で手痛い反撃を受けた神武が弥生社会の形成されている地域を避けて、未だ縄文社会の生活から抜け出していない地域に上陸したのだ、と考えたとき、「神武東征」説話は架空の作り話ではなく、事実を反映した伝承が伝えられたものとの感を強くするのです。

## 【追記】

① 日本書紀に出てくる名草<sup>むら</sup>邑や名草<sup>とべ</sup>戸畔の「名草」は後に郡名になっており、その範囲は、今の和歌山市の東半分にもなるほどの広さで、北は和泉山脈で大阪府と接し、南は海南市に接しており、名草山麓で和歌浦湾に面しています。

② また、和歌山市の西半分、名草郡の西側、紀伊水道に面したところに「海部郡<sup>あま</sup>」があり、北は加太<sup>かた</sup>から南は海南市を含みます。名草郡と海部郡の境界は和歌川流域のあたりですが、これは奈良時代のころには紀ノ川の本流が和歌山城の東側を流れる和歌川流域と重なっており、その河口が和歌浦湾にあったからではないかとされています。

③ 古事記・日本書紀ともに、「那智の滝」について何も触れていないので不思議に思い、沿岸の海上からこの雄大な滝が見えるかどうか調べてみました。

那智勝浦町商工観光課に訊ねたところ、「わからない」という返事で、海岸近くにある温泉旅館に「滝の湯」というのがあり、そこに問い合わせてもらったところ、はるか木々の間から「涙ていどに見える」とのことでした。勝浦漁協に訊ねても「わからない」という返事で、最後に那智勝浦観光船会社に問い合わせたら、海上からは「天候の具合で見えないこともある。見える場合でも涙ていどである。あの雄大な自然の姿が見えるわけではない」とのことでした。海上を通過しても、伝承に残すほどの雄大な姿が目に入らなかったのでしょうか。地図で見ると、那智の滝は海岸から五<sup>き</sup>分ほど入った山奥にあります。

④ 神武がオノミナトから船で竈山近くまで航行し上陸した、との記述に關しまして、拙論脱稿後に、一九八一年四月発行の「市民の古代」第三集に、当時編集委員をしておられた義本満氏が述べておられる旨、古田武彦氏からご指摘を受けました。不勉強の致すところとは申せ、脱稿するまで気がつかなかった不明を深く反省するとともに、同じ考えをお持ちの先達がおられたことに喜びを感じる次第です。尚、「市民の古代」第三集は水野孝夫氏に貸していただき、初めて目にすることができました。

私は、「神武東侵」のテーマの重要な要素の一つは船であると捉えて、吉備の高島から熊野までの行程はすべて船で行われたのではないかと考え、主に和歌山市史を中心に弥生時代の和歌山平野の地形を考究致しました。したがって、弥生時代の和歌山平野の概略図も義本満氏のそれとは若干異なっております。

義本満氏は、神武が何故、竈山へ上陸したのか、という疑問から出発されたようです。和歌山平野の地形図も和歌山市史に載っている奈良・平安時代のものを参考にされたようです。

尚、和歌山市史には、弥生時代の地形の詳細な説明はありますが、弥生時代の地形図そのものは載っていません。



### 三、熊野から吉野へ

#### 1、紀伊山地横断（紀伊半島縦断）

熊野から奈良盆地を目指すには、言うまでもなく峻しい山々が連なる紀伊山地を横断しなければなりません。現在では、熊野川・十津川・北山川・吉野川などに沿って国道や県道が走り、車なら熊野を朝早く発てば夕刻には五條市や吉野に着くことができます。五條市までは十津川ルートで約一三五キロメートル、吉野町までは吉野川ルートで約一七五キロメートルほどの行程です。しかし、車で走ってもその道のりは峻しく、うんざりするぐらい急なカーブと登り降りが連続し、道路脇や眼前に迫る断崖絶壁に肝を冷やさなければなりません。深い溪谷と緑に覆われた山々が織りなす景観を愛でながらドライブを楽しむ余裕などほとんどありません。車で走りながらも、この峻しい紀伊山地を弥生時代に徒歩で横断できたのだろうかという思いに、ついとらわれてしまいます。ましてや神武とその一行は、おそらく一〇〇人を超す集団と思われるから、食料や水などの補給ができたのだろうか、あるいは重たい武器や荷物を携帯してこの峻しい山道を行軍できたのだろうか、道に迷わなかったのだろうか、などと考え込まれてしまうほどの難路なのです。

この難問を解いてくれたのが奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の常設展示室に展示されている縄文晩期遺跡（橿原遺跡など）からの出土遺物でした。出土遺物の中には、翡翠の玉類、御物石器、黒曜石、各地の文様のある土器、海生動物の骨、緑泥片岩りよくでいへんがんなど本来奈良盆地に産出しない原材料で作ったものや生息しない生物の骨、独自に作れないもの、よその土地で作ったものが数多くあります。

翡翠は新潟県と富山県にまたがる地域からしか出土しませんし、皇室に献上されたことからその名のついた奇妙な形の御物石器（奈良市大森町出土）は、岐阜県北部の飛騨地方を中心に作られたものです。黒曜石には長野県和田峠産のものも含まれており、土器の文様に至っては遙か彼方の東北系のものが多数あります。主に穴掘り用の道具に使われたと思われる緑泥片岩は吉野川や紀ノ川水系のものであり、海生動物の骨にはタイ・フグ・スズキなどに混じって鯨もあります。鯨はおそらく紀伊半島沿岸で獲れたものでしょう。また逆に、金剛山地北端の二上山周辺で産出するサヌカイト（讃岐からも産出＝名前の由来）は、近畿各地のほか愛知県、岐阜県、石川県南部の広い範囲に分布しています。

奈良盆地の縄文晩期遺跡から出土するこれらの遺物から言えることは、縄文時代晩期には日本列島内の広い範囲で人々の交流が行われており、人々が往来するルートが存在したことを物語っているということであって、奈良盆地の遺跡から出土する遺物はその一部を示しているに過ぎないのです。はるか東北から、あるいは北陸・中央高地の山奥からどのようなルートで奈良盆地に伝わり持ち込まれたか、現在では知る由もありませんが、奈良盆地と遠隔地の人々との間に交流のあったことは間違いのない事実であり、人々が往来したということは、それが直接持ち込まれたか、あるいはいくつかの中継を経て持ち込まれたかは別として、人々が往来したルートが存在したことを事実として物語っています。

縄文時代晩期における奈良盆地と遠隔地との交易やそのルートの存在を考えると、紀伊半島南部の熊野地域と奈良盆地の間にも、鯨がどこから持ち込まれたかを論ずるまでもなく、人々の交流とそのルートがあったと考えるのが自然でしょう。

熊野から紀伊半島を南北に縦断する途中は確かに道無き道の険路です。しかし先述した奈良盆地と遠隔地との広い交流範囲とそのルートの存在に想いを致すとき、縄文時代晩期には、奈良盆地と熊野地域の間にも人と物の交流とそのルートが存在していたと考えざるを得ないのです。

しかし、紀伊山地を横断する縄文時代からの交易ルートがあったとしても、あの峻しい山々の連なった山地を神武と武装集団だけで横断するのは極めて困難どころか不可能だったのではないのでしょうか。「ヤタガラス」（八咫鳥・頭八咫鳥）という道案内がいたればこそ峻しい峰伝い、尾根伝い、谷・川伝いの道を踏破できたものと思われます。

「道」という字をしましたが、おそらく獣道けものみち程度のものだろうと思われ、そんな程度の道を武装した

大勢の集団が隊伍を組んで通れるだろうか、という疑問も湧いてきます。もちろん、隊伍を組んで旗鼓堂々として行進することなど不可能なことは言うまでもありません。武器武具類だけでもかなりの荷物になるでしょうし、食料や水、炊飯道具（土器類）なども携帯したでしょうから、そんな荷物を持って峻しい山道を登り降りするのも大変です。それも一日や二日の行程ではありません。

縄文時代晩期、紀伊山地を往復した人々は、何千年も自然のままの樹林や倒木に遮られた草深き獣道を、難渋しながらただひたすら歩いたことでしょう。交易するにはそれなりの「物」を持って行かなければならないし、往復期間の食料も必要です。途中の集落で食料を手に入れるにしても、食料と交換する「物」が必要でしょうから、どうしても一人では持ちきれない荷物になってしまい、複数のあるいは十数人の集団で行動したものと思われまゝ。また、獣に襲われる危険や途中の集落でせつかくの交易品を奪われる恐れもあったでしょうから人数は多いほど安全だったと思われまゝ。重いかさばる荷物を背負いあるいは抱えて、谷・川沿いに、峰・尾根伝いに峻しい道をたどって紀伊山地を横断したのです。熊野から吉野までの「神武が来た道」もこのような獣道だったに違いありません。もちろん旗鼓堂々たる行進などできるわけがありません。峻しい山道を踏破するにはそれに適した隊形があったはずであり、また、武器武具、食料や水、その他の道具を携帯して山川を跋渉できないようでは軍隊として現在でも通用しないでしょう。いつの時代でも、道無き道を迂回して敵の背後に回ったり、奇襲攻撃できないようでは軍隊として物の役に立たないでしょう。

神武とその武装集団が紀伊半島を縦断するについては、欠かすことのできない条件が一つあります。経験豊かな道案内が必要だということです。日本書紀では、神武は生駒山を越えて奈良盆地の竜田へ抜けようとして道に迷い、もとの上陸地点に戻らざるを得なかったとあります。生駒山系でさえ道案内なくしては越えられなかったのですから、比較にならないほど峻しく道のりも長い紀伊山地を道案内なしに踏破することは不可能だったと思われまゝ。

古事記は「其の教へ覚しの隨に、其の八咫鳥の後より幸行でませば」と道案内に八咫鳥を登場させ、日本書紀も「而るを山の中峻絶しくして、復行くべき路無し。乃ち棲違ひて其の跋み渉かむ所を知らず」と道に迷って難渋したとし、「頭八咫鳥」という道案内を得て「山を踏み啓け行きて、乃ち鳥の向かひの尋に、仰ぎ視て追う。遂に菟田下県に達る」と紀伊山地を無事横断したとしています。

奈良盆地の縄文晩期遺跡（橿原遺跡）からは海生動物の骨が出土しており、その中に紀伊半島沿岸から持ち込まれたのではないかと思われるものに「鯨の骨」があります。この鯨の骨付き肉がどのようなルートをとって奈良盆地に持ち込まれたかを特定することはできません。紀伊半島を縦断して持ち込まれたか、あるいは船で紀伊半島西南岸から茅渟海（大阪湾）へ出て北上し、さらに河内湖（湾）に入り生駒山を越えて持ち込まれたかも知れません。どのようなルートで持ち込まれたにせよ、鯨の肉が腐らないうちに奈良盆地に着かなければなりません。腐ってしまつては交易品としての価値が無くなってしまふからです。紀伊山地を通って持ち込まれたとすると、季節や気候によって違いがありますから一概に何日ぐらいとは言ひ難いのですが、鯨の肉が腐ってしまわぬ日数で紀伊半島を縦断したと考えられます。神武とその武装集団が紀伊山地を横断するのに要した日数の目安になるのではないのでしょうか。

## 2、吉野川の河尻

『古事記』によると紀伊山地を横断してきた神武は、吉野河の河尻で釜（梁と思われる）を伏せて魚を取っている「贅持之子（阿陀の鵜養の祖）」という国つ神に（在地の支配者）出会い、その後「井氷鹿（吉野首等の祖）」「石押分之子（吉野の国巢の祖）」の順に土地の国つ神に出会っています。

問題は古事記に言う「吉野河の河尻」です。「河尻」は言うまでもなく川の下流域や河口付近を指す語です。この意味どおりだとすると「吉野河の河尻」は「紀ノ川」の下流域・河口付近ということになってしまい、地理的適合性を求めることのできない位置関係になってしまいます。

熊野から紀伊山地を横断して、和歌山平野を流れる紀ノ川河口付近で贅持之子に出会ったことになり、

和歌山平野に逆戻りしたことになります。江戸時代の国学者、本居宣長<sup>もとりのりなが</sup>が理解に苦しみ、その著書「古事記伝」で「河尻」は吉野川上流域に川上村があるところから「川上」の書き間違いだとしています。

『日本書紀』編纂担当の史官たちも理解に苦しんだものと思われます。贄持<sup>にへもつ</sup>之子<sup>のこ</sup>の後で出会った井水鹿<sup>いひか</sup>も石押分<sup>いわおしわくのこ</sup>之子も吉野地域と関係の深い国つ神ですから、贄持之子だけ和歌山平野の紀ノ川河口付近で出会うはずがありません。そこで日本書紀編纂担当史官たちは、熊野から宇陀までの途中経過から三人の国つ神をすっぱり削除し、熊野からいきなり菟田<sup>うたのしもつあがた</sup>下県<sup>うたのちよう</sup>（奈良県宇陀郡菟田野町）に神武を出現させざるを得なかったのでしょう。日本書紀では、神武は菟田下県に入って反抗する兄猾<sup>えうかし</sup>を殺した後、菟田の穿邑<sup>うかちのむら</sup>から吉野地域へ初めて巡幸したことにしており、その時、三人の国神<sup>くにつかみ</sup>に出会ったとしています。出会った順番も古事記とは異なり、「井光<sup>いひか</sup>（吉野首部の始祖）」、「磐排別<sup>いわおしわく</sup>が子（吉野の国櫛部の始祖）」、「苞苴担<sup>あだ</sup>が子<sup>うかひら</sup>（阿太の養鷗部の始祖）」の順となっています。

意味不明のまま「吉野河の河尻」と記述した古事記と、意味不明の部分をカットして書き直した日本書紀を比べると、古事記は何故、意味のわからないことをわざわざ記述したのか、という疑問に突き当たります。両書とも造作された架空の作り話なら、古事記もこんな地理的適合性を欠くことを記す必要はなく、日本書紀と同じように理屈に合う話に作り替えればすむはずです。では何故？ 古事記は古くから伝わる伝承に基づいて、理解不明なところもそのまま記述した、と考えるしかありません。ここでも「神武東征」説話は架空の作り話ではなく、古くから伝わる伝承に基づいて語られているのではないかという思いを強くするのです。

では「吉野河の河尻」とはどういう意味なのでしょう。吉野川上流域とおぼしきところで「河尻」という語を使っている以上、吉野川上流域のどこかに河尻と呼ばれてしかるべき所があったのではないかと考えざるを得ないのです。すなわち、熊野から紀伊山地を横断してきたという地理的適合性の位置関係から見て、「吉野河の河尻」は紀ノ川河口付近を指す語としてではなく、別の意味で使われていると考えられます。

「河尻」を河口付近の意味以外に使うとすれば、どういう地域が考えられるのでしょうか。支流が本流に流れ込むあたりを河尻と呼ぶまいでしょうか。こういう地域を河尻と呼ぶとすれば、吉野川にはたくさんの支流が流れ込んでいますから、その一つぐらいに河尻という地名が残っているかも知れないと思ひ現地の聞き込みや地図、村史・町史・市史などで調べてみたところ、吉野川流域に河尻という地名は存在しませんでした。全国的にはどうかと思ひ全国地名辞典（小学館）を調べたところ、河尻が一ヶ所、川尻が六ヶ所見つかりました。兵庫県尼崎市にあった<sup>かわじりのとまり</sup>「河尻泊」は文字どおり河尻（摂津国三国川、現：神崎川）にあった古代の港で、摂津・播磨の五泊の一つだったそうです。土砂の堆積で河口が南に移動し、江戸時代には港の機能を失ったとありました。川尻も文字どおり河口付近にあるのが大井川（静岡県吉田町）、梁津川（茨城県日立市北部の漁港）の二ヶ所で、残りの川尻のうち、川尻温泉（鹿児島県揖宿郡開聞町大字川尻）、川尻町（広島県豊田郡の漁港）、川尻岬（山口県飽託郡川尻町）の三ヶ所は海岸沿いにあるもののその近くに川を確認できませんでした。川尻で唯一海岸沿いになかったのは熊本県熊本市南端（旧：飽託郡川尻町）を流れる緑川支流の加勢川に沿う旧河港町だけで、米・木材・酒などの積出港として栄えたが、鉄道開通後は港の機能を失ったそうです。結局、河川の上流域、山深き源流域の支流が本流に流れ込むあたりには河尻・川尻の地名が見あたりませんでした。

次に一つの川の名前が流れている場所によって異なっている場合、名前が変わるあたりを川尻と言わないだろうか、と考えてみました。奈良県の山奥から流れてきた吉野川は、奈良県五條市と和歌山県橋本市の境界付近から紀ノ川に名前が変わります。つまり上流から流れてきた川の名前が変わるあたりをその川の河尻と言ったのではないかと考えてみました。しかし、木津川や宇治川が淀川に変わるあたりを河尻とは言わないし、そんな地名も残っていません。前述した全国の河尻・川尻も、そういうところについた地名ではありません。吉野川が紀ノ川と呼び名の変わる五條市（奈良県）・橋本市（和歌山県）あたりも河尻と呼んだ形跡も地名も残っていませんでした。

古事記のいう「吉野河の河尻」は、一般的な意味での吉野河の河尻ではなく、吉野川の上流域に「河尻」と呼ばれる地名があったのではないかと考えてみました。この場合、名前の中心をなすのは言うまでもなく「尻」です。吉野川の上流域に「尻」と称される地域・地形があり、それが河と結びついて「河尻」と呼ばれるようになったのではないかと考えられるからです。現に塩尻や野尻湖（長野県）などのほかに江尻（静岡県巴川下流域）、田尻（奈良県香芝市、同山辺郡、大阪府泉南郡、宮城県遠田郡）、谷尻（奈良県吉野村）など、尻がつく地名は川の下流域に限らず、内陸部や盆地内にもあり、後述するように吉野川の上流域にも小字名として多数の「尻」のついた地名が現存しています。このような「尻」と称される地域・地形が河と結びついて「河尻」と呼ばれる地名になった可能性が高いと考えていたところ、過日、古田武彦氏から「カワ」の縄文語の意味について、次のような貴重なご教示をいただきました。

「古事記の原文では吉野河の河尻ではなく、『吉野河之河尻』になっている。『吉野河之』は吉野川流域の意味で、河尻の『カワ』は、神聖な水を祭る場所、という意味ではないか。『カ』は神聖な水を意味し、『ワ』は祭りの場の意味である。巨石信仰遺跡の残る静岡県南伊豆町にある『大川』は大きな川の意ではなく、今もきれいな水の湧き出ている泉であり、大きな川など流れていない。神聖な水とそれを祭る場所という意味の地名ではないかと思われる（オオは接頭語）。また、吉野で神武が遭ったとされる『井氷鹿（吉野の首等の祖）』の『井』は井戸をあらわす接頭語（音韻が違うので猪などのイではない）で、『ヒ』は日、『カ』は神聖な水を意味していると思われる、関東地方のあちこちにある『氷川神社』も『ヒ』は日、『カ』は神聖な水、『ワ』は祭りの場、と見ることによってその意味がはっきりしてくる。『尻』は尖石の『ガリ（ト+ガリ）』や曲の『ガリ』などと同じく神聖な場所を意味する語で、人々が帰っていくところ、というような意味ではないだろうか」

古田武彦氏のご教示のように理解すると、従来から意味不明として悩まされてきた「河尻」も、縄文人の生活の一端を現す生きた言葉に生まれ変わるような気がします。

### 3、大字井光、井光神社、井光川（資料3参照）

吉野川上流域の川上村に、井光川という吉野川東岸に流れ込む支流があり、人里離れた狭い溪谷に沿って深い山に入っていくと、急な斜面にへばりついているような井光集落に出ます。谷に沿った道からさらに急な脇道に入るので、川筋からさえ見えない山奥の神秘的な集落です。「井光」の字は、日本書紀に出てくる「井光」にちなんで当てられたものであることは言うまでもありません。

日本書紀によると「天皇、吉野の地を省たまはむと欲して、乃ち菟田の穿邑より、親ら輕兵を率いて、巡り幸す。吉野に至る時に、人有りて井の中より出でたり。光りて尾有り。天皇門ひて日はく、汝は何人ぞ、とのたまふ。対へて日さく、臣は是国神なり。名を井光と為ふ、ともうす。此則ち吉野首部が始祖なり」となっています。

神武が菟田の穿邑から吉野へ巡幸したとき、最初に出会ったのが「井光」で、現在の「井光」はこれにちなんで川や集落（大字）に当てられた漢字です。山肌の狭い平地に井光神社もあり、少し離れたところに井光が出てきたという井戸もあります。さらに、井光川が合流するあたりの吉野川西岸部に大字井戸があり、ここに「イ尻谷」「井尻谷奥」「イ尻谷奥」「イジリ谷奥」「井尻谷」「イシリ谷奥」など「尻」をとともなう小字が点在しています。大字井光にも「野尻」という小字があり、このあたりが「尻」と呼ばれていた地域であることがわかります。今は残っていませんが、「河尻」の地名（神聖な水を祭る場所）のあった可能性が高い地域です。

大字井光や井光川は日本書紀の「井光」にちなんで当てられた漢字ですが、実は、明治三十四年に、それまで「碓」村と書いていたものを「井光」に改めたもので、ともに「イカリ」と読み、「井光」にちなんで漢字だけを変えたものです。「碓」は、古くは「イカヒ（猪養）」であったものが語尾のヒがりに転訛したものだろとうという説もあり、このあたりは今も猪が数多く棲息しているそうです。

井光集落に鎮座する井光神社（祭神は井光・井氷鹿）について『川上村史』は、『新選姓氏録』大和神

別吉野連の条に「吉野連、加弥比加尼の後なり。神武天皇、吉野に幸し、神瀬に到り、人を遣わして水を汲ましむ。使者還りて曰く、井光女というものあり。天皇これを召し、問う。汝は何人ぞ。答えて曰く、臣はこれ天より降来る白雲別の女なり。名は豊御富と曰う。すなわち水光姫と名づく。今、吉野連祭る所の、水光神是也」とある記述を載せており、この古くからの伝承との関わりからこの地で神武が井光に出会ったとし、「碓」を「井光」に改字したものと思われまふ。この地の豪族であり、井光を祖とする吉野連は、天武天皇十二年（六八四）十月に、連の姓を賜わっており（日本書紀）、和銅三年（七一〇）正月には、吉野連久治良が外従五位下に昇進（続日本紀）、さらに嘉祥元年（八四八）十一月には、大和国吉野郡大領吉野連豊益が外従五位下を授けられています（続日本後紀）。また、中世の吉野の豪族、井・井戸・伊藤などの各氏も吉野首を祖とし、井光と水光神姫を始祖とする系譜を伝えており、大字井戸などの地名もあって、井戸氏の後継とされる伊藤氏を姓とする家が多いそうです（川上村教育委員会）。「碓」を「井光」に改字したのもわかる気がします。

#### 4、吉野山の「井光神社」と「井光の井戸」

井光の伝承は、吉野川水系を中心とする川上村だけでなく、吉野山にもありました。

本居宣長はその著書『古事記伝』で、井光の地を吉野町にある大字飯貝に比定しています。「イヒカリ」が転訛して「イヒカイ」（旧読み）になったのではないかと見たのでしょうか。川上村の「井光」と同じように、吉野町飯貝にも井光・井氷鹿にまつわる伝承が伝わっているのだろうかと思ひ、吉野町役場を訊ねてみましたが、いとも簡単に否定されてしまいました。その代わり「井光の伝承なら吉野山にもあります」と話が続き、井光神社と井光の井戸の所在地を詳しく教えてくれました。あらかじめ吉野町の地図や案内書を調べていたにもかかわらず、井光の伝承に関する神社も遺跡も全く載っていなかったのは「神武東征」説話を架空の作り話とする常識・定説を気にしているからでしょうか。なお、吉野町では「井光」を「イヒカリ」と言っていました。

「井光神社」は、明治の廃仏毀釈政策が実施されるまで存在した桜本坊という寺院の旧境内、今は角川文庫の別邸「井光山荘」になっているところにありました。昔は町を挙げてお祭りが行われていたとのことでしたが、今は井光山荘の瀟洒な門構えの脇に古色蒼然たる小さな祠を残すのみで、近所の人々が守っているに過ぎません。蔵王堂から南へ、徒歩十分ぐらいのところ、そのすぐ近くまで人家が続いているのに人影がほとんどありません。朽ちかけた祠が時代の変遷を語りかけているようでした。

さらに南へ、上千本の入り口あたりに移築された桜本坊があり、向かいに細い尾根道が分かれていて、その奥に「井光山善福寺」なる真言宗の小さな寺院があります。「井光の井戸」は、狭い尾根の上に立つ善福寺の建物の裏、北に降る谷の、木々や雑草に覆われた急斜面の中ほどにありました。直径五〇センチぐらい、深さも同じぐらいの小さなもので、水など湛えておらず底の土が見えています。四本の棒で囲んで注連縄が張ってなかったら、それとはわからないでしょう。横に「井光の宮伝承…」と書かれた古びた杭が立ってあります。それらしく見せるような細工を施した跡もなく、昔から伝えられたままの姿で保存されてきたようです。このあたりを昔は「井光山」と呼んだらしいのですが、今は寺院の山号に名残をとどめているに過ぎません。

余談ですが、廃仏毀釈で桜本坊が毀されたとき、井光神社に保存されていた古い長持を川上村の人たちが持ち去った、という言い伝えが吉野町では語り継がれているそうです。

古事記によると、神武が「吉野河の河尻」で出会ったのは井氷鹿ではなく「贅持之子」です。「河尻」を一般的な意味である河口付近と解した日本書紀編纂担当史官は、この地理的適合性を無視した語を削除して、「水に縁ひて西に行きたまふに及びて、亦梁を作ちて取魚する者あり」とし、「苞直担が子」と出会った場所を、和歌山県と接する五條市の阿田に想定しています。この一事からも、古事記が古くから伝わる伝承に基づいて書かれていることがわかりますが、順番こそ違つてはいるものの、神武は「ニヘモツ」と吉野川で出会っています。

吉野川上流域（大滝ダムが完成して、上流域には吉野川が無くなりました）、大字井光や井戸に「野尻」<sup>いかり</sup>「井尻」などの「尻」を名前とする多くの小字が残る地域から少し下流に降ったところに川上村役場があり、その東側を流れる吉野川沿いに形成された河岸段丘に「丹生川上神社上社」という神社があります（河岸段丘とともに水没）。昔から縄文土器の破片などが出土することで知られた川上村大字大迫の「宮の平遺跡」です。ダムが造られ神社も遺跡も水没するので、橿原考古学研究所による発掘調査が数次にわたって行われていましたが、平成十二年十一月に近畿初の「環状列石」遺跡が発見されたとしてマスコミに大きく取り上げられました。（資料3参照）

縄文早期から晩期にかけての土器片や石器類が数多く出土し、その中に色鮮やかな朱塗りの土器片が混じっていました。念のためベンガラではないかと訊ねてみたら「朱」に間違いなしとの返事でした。「朱」とは「丹」<sup>に</sup>のことですから「丹生川上神社」と合致し、このあたりが「丹（朱）」と関係の深い土地であることが出土遺物によって証明されたこととなります。

「ニヘモツ」は本来、「ニヘモチ」ではないか。そして「ニ」は丹、「ヘ」は辺（あたり）、「モ」は集落、「チ」は神（神聖）、を意味する縄文語ではないか、とのご教示を古田武彦氏から受けて、目から鱗の落ちる思いがしました。語尾をそのまま「ツ」と読んでも吉野川上流域の「津」を意味することになります。ご教示どおりだとすると、「丹の産出するあたりの集落の神」となり、このあたりの縄文集落の支配者だったこととなります。このように理解すると、神武の紀伊半島縦断行程には極めて臨地性に富んだ遺跡・遺物も存在していることになり、神武がこのあたりで出会ったのは井氷鹿ではなく、贅持之子ではないかと考えられるのです。井氷鹿や石押分之子<sup>いひわか</sup>と出会ったところに吉野川は出てきませんから、二人と出会ったところを吉野川流域に限定して考える必然性はなく、「吉野河の河尻」で出会ったのは「丹」と関係の深い名を持つ「贅持之子」<sup>いへもつの子</sup>である可能性が極めて高いのです。

吉野には吉野川もあれば吉野山もあり、十津川水系にさえその一部に吉野があるくらいですから、吉野と呼ばれる地域はかなり広く、吉野河水系以外に井氷鹿の伝承や足跡があっても何の不思議もないのであり、むしろ川とは直接関係はないが、「井（井戸）」と強い結びつきを持つ地で出会ったと考えるほうが古事記の記述に適合します。

紀伊山地を横断してきた神武が次ぎに目指したのは宇陀<sup>うだ</sup>です。宇陀に侵入するにあたって後方の安全を図り、兵站基地<sup>へいたん</sup>を確保する必要から吉野地域の一部を平定したとしても不思議ではなく、吉野山に「井光神社」<sup>いひかり</sup>や「井光の井戸」があってもおかしくありません。

神武が吉野河の河尻で贅持之子と出会ったころ、吉野川上流域にはどのような人々が住んでいたのでしょうか。この地域に、和歌山平野や紀ノ川流域、紀伊半島西南部沿岸と同じように多くの弥生集落が営まれ、弥生社会が形成されていたとしたら、神武とその武装集団はその抵抗と反撃にあって峻しい紀伊山地の中で立ち往生し、進退窮まっていたでしょう。

ところが、吉野地域では神武とその武装集団が抵抗や反撃を受けた様子はなく、神武と出会った三人の国神も揃って恭順な態度で出迎えています。古事記では、最後に出会った石押分之子<sup>いひわか</sup>に「今、天つ神の御子幸でましつと聞けり。故、参向へつるにこそ」とまで言わせています。しかし、神武とその武装集団は、吉野地域に住む人々にとっては外の世界からやって来て食料や協力を否応なしに提供させられる侵略者であり、略奪者だったはず。何故、抵抗もせず恭順の意を表して迎えたのでしょうか。

上流域の吉野川は見渡す限り、連なり重なり合う山また山の深い谷底を流れています（今はその景色もなくなりました）。川に沿う国道一六九号線を走ると、ところどころで行われているダムや橋・道路の工事は目に入っても、切り立った急な断崖の端に立たないと見ることができないほど深い谷を流れていました。この自然がつくりだした大景観や地形は、今やダムの底に沈み、満々たる水が山腹を浸しています。

「高原郷、二十河郷、檜垣本郷水田五段」、これは建武元年二月の「吉水院真遍坊紛失状」の記録です（川上村史）。すなわち川上村での水田の存在を証明する最初の資料で、建武元年といえ一三三四年のことです。これがこのあたりの水田の存在を示す最初の記録だからといって、このころから水田稲作が行われ

始めたとは考えられませんが、奈良盆地や宇陀地域に比べるとかなり遅れて稲作が始まったであろうことは、吉野川上流域の自然地形から見て理解できます。

神武とその武装集団がやってきたころ、この地域は水の豊かな地ではあっても、奈良盆地のように水田稲作に適した平地がなく、弥生集落はまだ営まれていませんでした。そこには、自然の恵みを生活の糧としながらも、集落を形成して定住することがより生活を安定させるだろうことを知っていた人々、縄文晩期の人々によって集落が営まれていたのではないのでしょうか。吉野川上流域ばかりでなく、井光神社や井光の井戸の伝承が残る吉野山も、水田稲作のみか農耕そのものに向いていない地域であることは言を待つまでもありません。やはり縄文晩期の人々が集落を営んでいた地域だったと考えられます。

吉野川上流域にも吉野山にも、弥生時代中期末から後期初めごろにはまだ、水田稲作を中心とする弥生集落が生まれておらず、弥生社会は形成されていなかったと考えるのが至当でしょう。

縄文晩期の集落に生活していた人々の目には、金属製の武器や楯・鞍などの武具で武装した神武率いる武装集団は神の国から舞い降りた軍勢のように映ったことでしょう。奈良盆地の弥生社会とも交易を通じて多少の交流があったと思われませんが、集落全体が弥生社会と常に接していたわけではありませんから、弥生人が集落を形成し始めた宇陀地域の縄文集落（詳細は後述）とはかなり違った社会を形成していたものと思われまゝ。激しい抵抗を示した宇陀地域の縄文集落と異なり、神武とその武装集団に恭順の意を表して協力的になったのも社会構成の違いが大きな理由の一つだったに違いありません。

吉野川流域や吉野山に住む人々は、神武とその武装集団を目の当たりにして、圧倒的な武力の差の前に抵抗を諦め、恭順の意を表さざるを得ませんでした。神武が次ぎに目指した宇陀地域では、足を踏み入れた途端に激しい抵抗に直面しなければなりません。

## 四、宇陀から奈良盆地へ

### 1、宇陀（資料4参照）

古事記によると、神武とその武装集団は三人の国つ神に出会ったあと、吉野川流域沿いに進まずに吉野町国栖のあたりから東吉野村の山中を北上し、「其の地より踏み穿ち越えて、宇陀に幸でましき。故、宇陀の穿と日ふ」というように、吉野から宇陀に入っています。日本書紀では三人の国神に出会う前に、「山を踏み啓け行きて、乃ち鳥の向かひの尋に、仰ぎ視て追う。遂に菟田下県に達る」と熊野から吉野を素通りして菟田に到着しています。

吉野川沿いに進めば、吉野町や大淀町から山越えて直接奈良盆地に入れるいくつかのルートがありますが、吉野川中流域南岸の河岸段丘にはすでにいくつかの弥生集落が営まれており（宮滝遺跡など）、予想される抵抗を避けて宇陀地域へ進んだのでしょう。

奈良盆地の東側に位置する宇陀地域は、高原状の台地に山が屹立し連なっているようなところで、農耕に適した平地もかなりあります。しかし、山と山、尾根と尾根の間の平地ですから広い湿地帯などはなく、水田稲作を営むには、奈良盆地とは比較にならないほどの難しさがともなったと思われ、また多くの労力も必要としたに違いありません。この地に水田稲作が営まれるようになったのは奈良盆地よりもかなり遅れたであろうことが、その地理的条件から理解できます。

神武が足跡を残したとされる宇陀地域は、主に現在の宇陀郡菟田野町・大宇陀町・榛原町の三町です。神武とその武装集団がこの地域に侵入してきたころ、ここではどのような人々が、どのような生活をし、どのような社会を形成していたのでしょうか。

先述したようにこの地では、奈良盆地よりもかなり遅れて水田稲作が始まったことが、地理的条件からの推測だけでなく、遺跡からの出土遺物によっても判明しています。宇陀地域の弥生遺跡から出土する土器片の多くは弥生後期のものが中心で、中期のものはごくわずかしかなかった。弥生前期のものはほとんど見つかりません（菟田野・大宇陀・榛原町史）。つまり、縄文土器片に続く弥生時代の土器片は弥生後期のものが中心なのです。このことが意味することは、この地域に水田稲作を中心とする弥生集落が営まれるようになったのは弥生時代後期からで、それまでは縄文晩期の時代であったということです。神武とその武装集団が宇陀地域に侵入した弥生中期末～後期初めごろはこの地域に水田稲作が始まったころで、縄文晩期の生活をする人々の集落がまだまだ多かったと思われ。神武が奈良盆地に侵入する前に通ったルートは、侵入者に対する激しい抵抗が予想される地域をできるだけ避けた、まだ縄文晩期の生活、集落の営まれていた地域なのです。最終目的地である奈良盆地に突入する前に、激しい戦いを繰り返して戦力が消耗することを極力避けたかったのと同時に、生駒山麓での手痛い敗北に対する恐怖感が常に意識されていたに違いありません。

しかし、宇陀の地（菟田野町）へ一歩足を踏み入れた途端、この地域と吉野に住む人々の違いを思い知らされます。兄宇迦斯（兄猾）の抵抗です。幸い大きな戦いになる前に兄宇迦斯を殺すことができましたが、それも神武とその武装勢力の力と言うよりは、宇迦斯（菟田野町大字宇賀志）という地域に住む二人の支配者（兄宇迦斯と弟宇迦斯）の内紛に助けられた、あるいは内紛を利用した、と言った方が当たっているかも知れません。兄宇迦斯を殺したあと、死体を引きずり出して切り刻んだとあります。この点は古事記も日本書紀も同じです。ところが古事記と日本書紀ではこの部分の順番が逆になっていて、古事記では吉野地域で三人の国つ神に出会ったあとで宇陀に入り、兄宇迦斯を殺しているのに、日本書紀では、兄猾を殺したあとで吉野に巡幸して三人の国神に出会ったことになっています。神武の奈良盆地侵入にとってこんな順番の違いなどどうでもよさそうですが、すでに述べたように、ここには重要な問題が含まれていますので、もう一度振り返ってみたいと思います。

古事記によると、熊野から紀伊山地を横断してきた神武が最初に出会った国つ神は贄持之子であり、出



会った場所は「吉野河の河尻」です。「河尻」の一般的な意味からすると、神武は紀伊半島南東部の太平洋岸から紀伊山地を横断して、和歌山平野の「紀ノ川」河口付近で贄持之子に出会ったことになってしまい、地理的適合性の全く理解できないところへ出てしまったこととなります。その後「其の地より幸行で」て井水鹿に遭い、「即ちその山に入り」石押分之子に出会って、そして「其の地より踏み穿ち越えて、宇陀に幸で」たことになっています。これの神武の行程を見ても、紀ノ川河口付近から紀ノ川・吉野川を通過して宇陀へ入ったとはとても思えないのです。古事記編纂にたずさわった太安万侶も、こんな地理的適合性の全く理解できない場所をわざわざ造作するはずがないではありませんか。造作するなら、誰が読んでも納得できる行程を並べればよいはずで。では何故、このような地理的適合性が全く理解できないような「吉野河の河尻」を行程に入れたのでしょうか。先述した如く、太安万侶以下古事記編纂担当史官たちは、古くから伝わる「神武東征伝承」を、意味がわからないからと言って削除したり、恣意的な解釈をもとに書き替えたりしないで、そのまま記述したとしか思えないのです。

ところが日本書紀には、「吉野河の河尻」がないばかりか、神武が熊野から紀伊半島を縦断して「菟田下県」へ入るまでの間に、その通過地であるはずの吉野が何故かすっぱり抜け落ちていて出てこないのです。吉野が出てくるのは、先述したように菟田の兄狛を殺したあとになっています。つまり古事記とは、吉野やそこで出会った国神の順番が違っているのです。何故でしょう？ それは、日本書紀編纂担当史官たちも「吉野河の河尻」を理解できなかったから、としか言いようがありません。ただ、古事記編纂担当史官たちと違うところは、意味のわからないところは、意味がわかるように書き替え・削除を行ったということです。地理的適合性が全く理解できない「吉野河の河尻」を削除し、順番をあれこれ入れ替えて意味のわかる物語に作り替えたのです。

このような手法は日本書紀の中のところどころ見かけます。生駒山麓の戦いに敗れ、河内湖から撤退するときの「自南方廻幸之時」の意味を、編纂当時の地形から理解することができずに「削除」してしまったのもその一例です。これらをもってしても古事記・日本書紀の記す「神武東征」説話が、古くから伝わる「神武東征伝承」に基づいて書かれたものであって、その編纂担当史官たちによって作り出された架空の物語ではない、ということがわかりいただけるのではないのでしょうか。

宇陀郡菟田野町に大字宇賀志があります。吉野町国栖から高見川（吉野川の支流）に沿う県道一六号線を行くと、東吉野村役場のある小川集落を経て、やがて鷺家集落で国道一六六号線と出会います。一六六号線を北上すると佐倉峠に到り、峠を越えると菟田野町大字佐倉です。鷺家集落近くの林道を右へ入って山道を行くと大字宇賀志に出ます。宇賀志は「ウカシ」と読み、ここには宇迦斯兄弟を祀る「宇賀神社」や、兄宇迦斯を切り刻んだところとされる「血原」橋など、宇迦斯にまつわる地名や伝承が伝わっています。神武が足を踏み入れた宇陀（菟田）の地は「穿」であってウカシではなく、宇賀志やその西隣の佐倉にも「穿」という地名は残っていませんが、「ウカ」が本来の地名で「チ」は神聖・神を意味する接尾語だとすれば、宇賀志やその西隣の佐倉のあたりを指す地名だった可能性が高く、宇賀志はやはり「穿」からきた地名だと考えられます。

大字宇賀志のほぼ中央を細い宇賀志川が北流し、東岸の山の斜面に集落が営まれており、西岸の低地に水田が拓かれているものの、川の上流は低地もなく、源流近くの山奥に中将姫ゆかりの青蓮寺がありました。

菟田野町史によると、宇賀志に残る神武伝承にかかわる地名には次のようなものがあります。

\* 宇賀神社…神武が八咫鳥の先導によりたどりついた穿の邑で、宇賀志の地名の起こったのがこのあたりとされています。

\* 血原橋…神武が兄宇迦斯を誅殺したとき流れた血で赤く染まったところとされており、宇賀神社の東南角を流れる宇賀志川にかかっている石橋。

\* アチラ埼…兄宇迦斯が八咫鳥を射た鳴鏑の落ちたところ。訶夫羅前がアチラ埼になったという。

\* アガタ…日本書紀の菟田下県の地とされている。

\*湯矢谷…イヤノタニ（射矢の谷）とも言われており、神武が矢を射たところ。

\*オドノ…兄狛の邸宅のあったところで、兄狛が自分の仕掛けた押機にかかって圧死したという伝説の地。

\*キド・キドグチ…木戸（城戸）・木戸口（城戸口）

以上はその全てではありませんが、大字宇賀志に残るいくつかの地名と神武にまつわる伝承です。

ところが、似たような伝承の残る地名は宇賀志だけでなく、隣接する大字佐倉にもあります。兄宇迦斯を殺したあと、弟宇迦斯が奉った饗宴の席で神武が歌った歌の出だしに「宇陀の高城に鳴罫張る」とある「タカギ」という地名が桜実神社の近くにあり、この地名と神武にまつわる伝承が伝わっています。

桜実神社は、東吉野村から佐倉峠（分水嶺）を右へ越え、北流する佐倉川に沿って六〇〇メートルぐらい行ったところで川を西側へ渡った山奥にあり、川の東側の丘陵を超えれば宇賀志で、曲がりくねった幅の狭い舗装路を行くと血原橋に到り、宇賀神社の前に出ます。

桜実神社の西北に「高城」、東北に「たかがき」という地名があり、この地に神武が本営を設けて兄宇迦斯と対峙したというのです。弟宇迦斯が参向したのもこの本営だと語り伝えられています。桜実神社には天然記念物の「八房の杉」が八方に幹を伸ばしており、訪れる人としてないわりには手入れの行き届いた神社です。

神武と結びつくのは、神武の歌に出てくる「高城」や「たかがき」という地名であることは言うまでもありません。戦場に臨んだ歌にしては、何となく臨場感にかけるのですが、「宇陀の高城に鳴罫を仕掛けて待っていたら、鳴はかからず鯨がかかった」という出だしの歌で、鯨は原文では「久治良」となっており、これを海生哺乳類の鯨だとするとわけのわからない歌になってしまいます。「高城」を出すまでもなく、宇陀地域そのものが高原状の山地だから間違っても海に棲む鯨が罫にかかるはずがありません。昔から「久治良」をめぐる色々議論されてきた所以です。

「神武東征」説話は、造作された架空の物語だとする定説が、この理屈に全く合わない「久治良」をその理由の一つに挙げているのもわからないではありません。しかし、「神武東征」説話を造作しようとする者が、こんな見え透いたわけのわからない歌をまことしやかに造作するだろうか、という疑問も同時に湧いてきます。

この疑問が氷解できたのは、古田武彦氏が平成十年六月二十八日に大阪天満研修センターでこの歌について話された講演を聴いたときで、その要約を紹介させていただきます。

「この歌を神武とその武装集団の故郷の歌ではないかとするとどうだろう。筑紫の日向近くの糸島半島周辺に宇田川原という地名があり、干潟などの海辺を餌場としている鳴の罫を仕掛けたら、鳴ではなく鯨がかかってきたとしても別に不思議ではない。鯨が集団で浜に打ち上げられるのはよくあることである。宇陀での緒戦の勝利を祝って、同じ発音の故郷‘ウダ’を偲び、その歌を将兵とともに歌ったのではないだろうか。このあとの戦いに勝利したときの歌にも‘神風の 伊勢の海の 大石に・・・撃ちてし止まむ’というのがあり、即興の歌だとすると意味が全く不明になってしまうが、故郷を偲んで歌ったものだとすると辻褃が合ってくる。先の歌に宇田川原の地名があったように、糸島半島付近には‘伊勢浦’‘大石’の地名もある（講演会資料の中に福岡県糸島半島の略地図が掲載されており、‘宇田川原’‘伊勢浦’‘大石’などの場所が明示されていました）。これら神武の故郷にまつわると思われる歌が、‘神武東征’伝承の一部として伝わっていても何の不思議でもなく、むしろ当然のことではなからうか」（資料5参照）

宇陀郡大宇陀町や榛原町にも「神武東征」説話にまつわる地名や伝承が残っています。大宇陀町大字守道には、日本書紀に「彼の菟田の高倉山の巔に陟りて、域の中を瞻望りたまふ」と記す「高倉山」があり、頂上に式内社の高角社二座とする高椋下を祀る神社が鎮座しています。江戸時代の元禄検地帳に高倉・高倉口などの地名が載っており、今日でも小字名として高倉があります。頂上には江戸時代の寛政十一年（一七九九）に建てられた「神武天皇望軍之旧蹟」と刻んだ石碑が小さな祠の横に残っています。しかし「高倉山宇陀郡に二、三箇所あり」（延宝九年、和州旧跡幽考）とされたりしていて、高倉山についての定説はありません。その他、国見丘や男坂・女坂などの伝承地も語り伝えられています。

榛原町には、日本書紀に「墨坂すみさかにおこしづみ炭を置けり」と記された墨坂の伝承を伝える墨坂神社が、大字萩の里を西流する宇陀川の右岸に春日造の堂々たる風格を見せています。古事記・日本書紀に、第十代崇神天皇が朱色の盾・矛を祀らせたとする墨坂神社です。墨坂神社はもともとこの地ではなく、今も墨坂の伝承地とされている大字西峠にあったものを、文安六年（一四五〇）九月に現在地に遷座したとあります（由緒書き）。榛原町にはほかに、椋下神社くらし（高倉下たかくらしを祀る）、八咫鳥神社やたがらすなど歴史の古い神社もあります。ただ、大字陀町の高倉山からは、それほど高い山ではないので、日本書紀の言うように男坂・女坂・墨坂などの伝承地を一望できそうもありません。

以上の「神武東征」説話にまつわる宇陀地域に残る地名や伝説が、どれだけ歴史事実を反映したものか、ということを実証することはおよそ困難です。この地域に、古事記・日本書紀の記す「神武東征」説話にまつわる数多くの地名・旧跡があり、それぞれに伝説が語り伝えられているにもかかわらず、その一部を紹介するにとどめておくしかないのが心残りでなりません。

## 2、奈良盆地に入るまでの戦い

宇陀地域から奈良盆地の平野部（桜井市）に出るには、曲がりくねった長い坂を延々と下り、桜井市側（途中に舒明天皇の忍坂陵がある）の、「OSSAKA」と道路標識のかかる「忍坂」を通ります。宇陀の山地帯から奈良盆地の平地部へはいる入り口にあたります。

古事記では、神武とその武装集団が奈良盆地に入るまでに倒した敵は、宇陀では兄宇迦斯えうかしだけで、その次ぎに「忍坂のおさか大室おおむろ」で尾のある土雲つちぐもの八十建やそたけるを饗応して、その席で一時に打ち殺しています。いわば騙し討ちの皆殺しです。宇陀で兄宇迦斯を切り刻んだことといい、かなり残忍・残虐な方法を用いて敵を倒しています。

日本書紀でも、菟田うだで兄えうかし猯やそたけるを切り刻んだあと、国見丘こくみかみに陣取っていた八十梟帥やそたけるを撃ち破り、さらにその余輩あまのこを忍坂邑おさかのむらに作った大室おおむろに集めて饗宴を開き、宴あそびたけなわのころを示し合わせて一時に皆殺しにしたとあります。古事記よりもかなり詳しく戦いの様子を描いていますが、基本的には同じように残忍な方法で敵を倒しています。

古事記・日本書紀は、神武に敵対する者やその恐れのある者を切り刻んだり、騙し討ちで皆殺しにしたりと、今日でも残忍・残虐と思われる方法で敵を倒したことを、わざわざ語っています。目指す奈良盆地へ突入するにあたり、その背後の地である宇陀と進軍路にあたる忍坂が、向背の定まらない不安定なままでは進むに進まれなかったのではないのでしょうか。後顧の憂いを完全に取り除くためには、残忍・残虐・卑怯な方法を用いることにいちいち躊躇ちゆうちよしているわけにはいかなかったのでしょうか。遙か彼方、筑紫から海を渡ってやって来た神武とその武装集団は、逃げ帰るところとてない孤立無援の軍団です。敗北はすなわち全滅を意味します。敵地に深く侵入したまま、その真っ直中でひとたび敗れば陣容を立て直す場所も余裕ありません。そんな神武にとって後顧の憂いを残したまま奈良盆地に侵入することが如何に危険なことか、だからこそその危険を少しでも取り除いておくためには、騙し討ちの皆殺しも決して非難さるべき作戦行動とは言えないでしょう。神武に従う将兵たちはその一人一人が、負け戦すなわち死、という悲壮な覚悟のもとに奈良盆地を目指して戦ったに違いありません。その彼らに、戦いに臨んで躊躇するようなものは何一つなかったでしょう。それを見事に伝えているのが「神武東征」説話であって、これを編纂担当史官が「造作した物語」とはとても思えないのです。造作するなら「言ことむけ和やわした」と書けば済むことであって、平和的な手段で敵対勢力を従わせたとした方が、神武の徳と権威をより高めると思われるからです。

古事記は、奈良盆地での戦いについては、おさか忍坂の騙し討ちのあと、「然さて後、登美とみ毘古びこを撃たむとしたまひし時、歌日うたひけらく」として「撃ちてし止まむ」の歌を三首上げ、「又また、兄師えしき木おとしき、弟師おとしき木えしきを撃ちたまひし時、御軍みいくさ暫みいかいし疲ともれき」として「鵜養うかいが伴とも 今す助けに来すね」と救援を求める歌を載せるのみで、結果がどうなったのか不明のままで終わっています。このあとは、にぎはやひのみこと邇藝速日命あまが「天あまつ神みの御子こ天降あまくだり坐ましつと

聞けり。故、追ひて参降り来つ」と降伏してきたのを最後に戦いは終わり、あとは畝傍の白檮原宮で「天の下治らしめしき」として、奈良盆地はおろか、天下を治めるに至っています。登美毘古がどうなったのかさえわかりません。

これに対して日本書紀は、「今魁なる賊己に滅びて、同じく悪くありし者、匈匈りつつ十数群あり。其の情知るべからず。如何にぞ久しく一処に居て、制変すること無けむ」と、奈良盆地における戦いを詳しく描いて、あたかも奈良盆地を平定したかの如く装っています。

神武は、忍坂に作った大室で敵の残党を騙し討ちしたあと、奈良盆地に入るのを妨げようとする磯城の豪族と一戦を交えます。神武はここでも、菟田下県で兄猾を討ったときと同じように磯城の豪族を二分し、その一方を味方に付けることに成功しました。というよりも兄磯城、弟磯城という勢力を競い合う磯城の豪族同士が、「負ければ全滅」と死を覚悟して形振り構わず戦う凶暴な神武軍を味方に付けて一方を倒そうとしたのかも知れません。その結果、弟磯城が神武側につき、激戦の末、兄磯城が滅ぼされました。磯城郡と言えば奈良盆地の中央部を占める地域ですから、磯城彦というのは奈良盆地最有力の豪族だったと思われる。弟磯城は兄磯城を裏切り、排除することによってその地位を独り占めしたかったのでしょう。

### 3、奈良盆地での戦い

次が長髓彦（登美毘古）との戦いです。長髓彦とはすでに生駒山の西麓で戦っており、その時は神武軍の総帥とも言うべき神武の兄、五瀬命が重傷を負わされて敗北しています。その傷がもとで五瀬命が落命していますから、奈良盆地に侵入した以上、長髓彦と決着をつけなければなりません。

先述したように古事記では、忍坂の大室で土雲の八十建を騙し討ちにしたあと、「然て後、登美毘古（長髓彦）を撃たむとしたまひし時、歌日ひけらく」として三首の「撃ちてし止まむ」の歌を載せているのみで、どこでどのように戦い、どんな結果になったのかについては、歌のあと「又、兄師木、弟師木を撃たまひし時」と続けているのでわかりません。

日本書紀では、長髓彦との戦いは、兄磯城との戦いに勝利したあとのことになっています。「其の鷄光り暉燿きて状流電の如し」という「黄金の怪しき鷄」が神武の弓弭に止まり、それまで負け続けていた戦いを勝利に導いてくれました。この瑞祥により、長髓彦の名前の由来であった「長髓邑」という邑は「鷄邑」と名づけられ、それが訛って「鳥見」となったという地名説話を伝えています。「鳥見」は現在の奈良市富雄から生駒市北部あたりだろうとされていて、このあたりは奈良時代には富美郷と呼ばれ、その後も鳥見庄・鳥見谷などの名を伝え、富雄川ももとは富川・鳥見川などの字が使われていました。ここに金の鷄が現れたのか、あるいは戦場は別の場所だったものが、金の鷄の伝承からこの地が選ばれたのかはわかりません（富雄川流域に登弥神社があり、長髓彦を祀っています）。

結局、長髓彦は饒速日命に殺され、その軍勢も神武に帰順してしまいます。長髓彦を殺した饒速日命は、「天の磐船」に乗って天から降ってきた天神の子とあり、長髓彦の妹を妻にして子供（物部氏の遠祖）までもうけていましたから、二人は強い信頼関係と太い絆で結ばれていたはず。さらに長髓彦は、天神の子である饒速日命を「君として奉へまつ」と言っていますから主君として奉仕していたことになり。そんな長髓彦の目から見れば、神武は「奈何ぞ天神の子と称て、人の地を奪はむ」とする侵略者と映って当然です。いわば、どちらが正当な天神の子であるかをかけて戦っている最中に、最も信頼していた饒速日命に裏切られ、殺されてしまった長髓彦は気の毒を絵に描いたような男です。

長髓彦との決着が付いたあと、神武はさらに軍を進め、盆地北部の層富県や和珥、盆地南西部の躰見の長柄丘岬（葛城地域に長柄神社・名柄遺跡があります）や高尾張邑（葛城邑と名づける）に蟠踞する土蜘蛛を皆殺しにしてしまいます。かくて「辺の土未だ清らず、余の妖尚梗れたり」と雖も、中洲之地、またさわざ復風塵無し」となったので、畝傍山の東南の櫃原に帝宅を造り、事代主神の娘を正妃に迎えて「櫃原宮に即帝位」しました。そこで神武を「始馭天下之天皇」と呼び、「神倭磐余彦火火出見天皇」の名を奉っています。

以上、日本書紀によると、神武は奈良盆地をほぼ制圧・平定したように語られています。本当でしょうか。奈良盆地はもちろんのこと、宇陀地域や葛城地域などにも昔から住んでいた在地の豪族が大勢いたはずで、それらを土蜘蛛と呼んで討ち滅ぼした話はいくつも出てきますが、生駒山の西麓の緒戦で敗北し、はるばる熊野へ迂回して紀伊山地を横断するルートを通らなければならなかった神武とその武装集団に、奈良盆地の豪族を攻め滅ぼし、あるいは従属させて盆地全体を支配下に取るだけの実力があつたとは思えません。古事記では登美能那賀須泥毘古（長髓彦）との決着がどうなったのかわからないのに、日本書紀で殺されてしまっているのは何故でしょうか。奈良盆地征服戦も古事記に比べ日本書紀は、あまりにも詳述過ぎます。また、二代綏靖から九代開化までの天皇に説話がないのは何故でしょうか。などなど、神武の奈良盆地征服についての疑問が湧き起こってきました。

古事記・日本書紀編纂当時の天皇家が、唯一正統な日本列島の支配者であるためには、神武が支配した日本を継承していなければならないから、神武は「天の下を治らしめ」ている必要があり、「始馭天下之天皇」でなければなりません。その神武の血筋を引くが故に天皇家は日本列島の正統な支配者たり得るわけで、古事記・日本書紀が、この大義名分のもとに編纂されていることは言うまでもありません。

「神武東征」説話は、もともと天皇家の正統性を主張する大義名分とは無関係に古くから伝わってきた「神武東征」伝承を、天皇家の大義名分に基づいて「神武東征」説話として編纂したものであることに留意して理解する必要があります。

「負ければ全滅。死あるのみ」という悲壮な覚悟のもとに、文字どおり死にものぐるいで戦う神武率いる武装集団は、奈良盆地の在り豪族を手こずらせ、多くの死傷者を出したことでしょう。そのあまりに熾烈な戦闘力を目の当たりにして恐怖・辟易した豪族の中には、自分の勢力を拡大維持するために神武軍と手を結んでこれを利用しようと考えた者もいたでしょう。兄磯城を裏切って神武と手を結んだ弟磯城や、長髓彦を裏切って殺した饒速日命などです。あるいはまた、あまりの被害の大きさに耐えかねて当面の和睦をはかろうとした者もいたでしょう。もちろん徹底抗戦して運悪く滅ぼされた豪族もいたでしょう。あまりに凄惨な戦闘に恐怖を抱き、犠牲の大きさに恐れをなし、辟易した奈良盆地の在り豪族たちは、荒れ狂う神武とその武装集団を取りあえず鎮めるために、奈良盆地の一隅に土地を与え、居住することを認めただのではないのでしょうか。それが「磐余」と呼ばれた土地であり、畝傍山麓の白檮原宮（櫃原宮）だったのではないかと考えられます。

## 4、磐余

神武の名は「神倭伊波禮毘古命（紀：神日本磐余彦尊）」で、名前を飾る文字を除くと「イワレヒコ」です。つまり「イワレ」と呼ばれる地域の全部又は一部の支配者という意味になります。「磐余」は大和の地名で、奈良県桜井市の大字谷・安倍あたりから櫃原市の香具山あたりまでを含む地域とされており、奈良盆地の平野部から宇陀の山地部に入る咽喉の位置にあります。ところが、神武が居を定めたのは畝傍山の麓ですから「磐余」と呼ばれているところからはかなり離れていて、その西端とされている香具山周辺からも直線距離で約三キロあまり西になります。支配領域の要地に本拠を定めたが故にその地名を自分の名に冠して支配者であることを示したと思われるのに、名前と本拠地が一致しないのです。にもかかわらず「磐余」を名乗ったのは何故でしょうか。いろいろな可能性が考えられますが、まず、「イワレ」と呼ばれていた地域が、従来伝えられていた範囲よりも広いのではないかと考えて『櫃原市史』を調べてみたところ、次のような記述に出会いました。

「天文十二年（一五五三）二月に、京都を出て吉野に向かった『吉野詣記』の筆者、三条西公条は、二十九日、橋寺から安倍の文殊院に詣で、耳なし野の山陰を経て、高田に至っているが、途中、そが川を渡って間もなく「いはれ野」に入ったと記していて、一六世紀の中ごろまで「いはれ」という地名が残っていたことを知るのである。その『いはれ野』というのは、公条自ら、『蘇我と書ては、いはれとよめるにやと覚え

侍りし』、といているところからすれば曾我の村里近く、曾我川を西へ渡って、高田方面へ行く路にある野原でもあろうか」

「曾我の西一kmばかりのところにある磐余神社も、一応この『いはれ野』の地域にあるといえるようであるから、この神社名も‘いはれ’という地名からきた名ではないかと考えられる」

「櫃原神宮を設立する際に、畝傍山の東南麓タカハタケ（高島）の付近に『イハレ』という小字の名があることが指摘せられているが、このことのみで、広い『いはれ』の地方名を考えるのは少し不自然である。こういうようなことから、‘磐余’の中心的部分は安倍付近から、香具山の北隣地域でもあろうが、広い意味ではさらに西に延びて、畝傍山麓から曾我にかけての称であっても差し支えないのである」

一六世紀中ごろまでは、このころの曾我川西側も曾我の地であり、そこに「いはれ野」という地名があった、との記録であり、また、「かむやまといわれびこのみこと神日本磐余彦尊」を祭神とするいわれ磐余神社は、現在の曾我川の東側（櫃原市中曾司町）にあります。すぐ近くを流れている曾我川に架かっている橋を磐余橋と言ひ、橋を西へ渡れば大和高田市です。

櫃原市役所総務課で調べてもらったところによると、「タカハタケ（高島）」は、現在の櫃原神宮拜殿が建っているあたりの地名で、昔はまわりよりも一段高い長方形の畠があったとのことでしたが、その付近にある『櫃原市史』に指摘されているという小字名の「イハレ」は現在存在せず、地番図にも条里図にも載っていないので、過去に存在したかどうか不明で、どのような資料で指摘していたかも残念ながら判明しないとのことでした。『櫃原市史』が指摘するように、「磐余」の中心地は現在の桜井市谷・安倍あたりから香具山北麓にかけてのあたりだったと思われませんが、現在の櫃原市の東北部（かつての十市郡）を除く櫃原市の大部分も広くいわれ磐余と呼ばれていた可能性があります。そう考えれば神武の名前に「磐余」の地名が冠せられていてもおかしくないのです。

神武は、天下はおろか奈良盆地すら制圧できていなかったわけで、「イワレ」と呼ばれている地域の一角を与えられて矛を取めたのではないのでしょうか。「磐余」の中心地である桜井市の中部は、奈良盆地の古くからの豪族、とおちのあがたぬし十市県主の領域だった可能性があり、畝傍山の麓に居を構えた神武は、その周りを在り豪族に取り囲まれていたこととなります。このことは神武が臣下たちに行った論功行賞を見ても、そのほとんどが畝傍山周辺と櫃原市内に限られていることからわかります。

もう一つ別の観点から「イワレ」の意味を検討してみます。

「イワレ（イハレ）」という言葉は、もともと「イワ」は岩、「レ」は多数・むれ群などの意ですから、たくさんの岩がある神聖な場所、というような意味に理解することもできます（古田武彦氏）。

「イワレ」を古い時代から伝わる地名としてではなく「たくさんの岩のある神聖な場所」というように理解すると、神武の名前の一部である「イワレ」は当然ながら全く別の意味を持ってきます。

神武が宮居を定めたところは古事記ではうねび かしはらのみや「畝火の白檮原宮」、日本書紀ではたつみのすみ かしはら ところ「畝傍山の東南の櫃原の地」となっていて、ともに「カシハラ」と読んでいます。現在の櫃原神宮のあたりかと思われます。

櫃原神宮はいうまでもなく畝傍山の麓にあり、その東南地域に今は文化施設やスポーツ施設・神宮神苑などに開発整備されて姿を消していますが、かなり広い縄文時代晩期の遺跡がありました。末永雅雄博士らによって昭和十三年～同十五年にかけて発掘調査され、その存在が明らかになった櫃原遺跡です。

畝傍山の麓ですからそこに住んでいた縄文時代の人々にとっては、畝傍山はアニミズム（自然崇拜）の対象であったに違なく、朝な夕べに敬虔な祈りを込めて眺めていたことでしょう。櫃原遺跡にはカシハラの地名のもとになったと思われるカシの巨木が群生し、森を形成していたであろうことが、発掘調査で数本の巨大なイチイガシの根株が出土したことによって証明されています。

ところがこの近辺には「イワレ」と呼ばれるような「たくさんの岩の群」があったという発掘調査の記録もなく、またそのような遺跡らしきものも見つかっておらず、畝傍山そのものにも信仰の対象となるような巨石も遺跡もありません。従って「イワレ」をたくさんの岩がある神聖な場所とするのにいささか疑問を感じざるを得ませんでした。そんな疑問を抱きながら、それでも三十年ぶりに畝傍山に登ってみた

ころ、道の途中で、表土がなくなって岩肌が露出している道をとところどころで見つけました。その岩肌を踏みしめながら頂上を目指したわけです。登山道に岩肌が露出しているも別に何の不審もありません。畝傍山は死火山で、噴出した溶岩が固まってできた山だからです。気の遠くなるような長い年月の間に土がかぶさり、その上に樹木が生い茂っていますが、もともとは一山これ岩山だったのですから。畝傍山はたくさんの岩が重なり合ってできた岩山だったのです。

縄文晩期ごろの山容など知る由もありませんが、麓に住んでいた当時の人々は畝傍山が岩山であることを知っていたはずです。橿原遺跡に住んでいた縄文晩期の人々にとって畝傍山はおそらくはアニミズムの対象であり、神聖な山として崇めていたでしょうから、山中に入って祭祀を行っていたと思われます。その名残が今に伝わる「畝火ノ山口ニ坐ス神社（畝火山口神社）」ではないでしょうか。貞観元年（八五九）正五位に叙せられ、『延喜式』では大社に列し、月次・新嘗の二祭に預かっていて、臨時祭の祈雨の八十五社の中にも列している神社です（『大和三山』池田源太著）。

このように見てくると、橿原遺跡に住んでいた縄文晩期の人々にとってアニミズムの対象である畝傍山は、山そのものが岩山であるところから「たくさんの岩が重なり合っている神聖な山」、すなわち「イワレ」そのものだったのではないかと考えられるではありませんか。

神武がこの「イワレ」と考えられる畝傍山とその周辺を支配下においたとすれば、神武の名前が「神倭伊波禮毘古命」（古事記）、「神日本磐余彦天皇」（日本書紀）であっても、地名の如何にかかわらず、おかしくないということになります。

ところで、神武が築いた古事記の「白檮原宮」の「白檮」は、そう読むものだという先入観のもとに「カシ」と読んで何の疑問も抱かなかったのですが、ふとしたことから「檮」の字を辞書（角川漢和中辞典）で調べてみました。

すると、

## 檮 木 14 トウ（タウ）

きりかぶ

解字 形声。壽しゆの転音が音を表し、切断の意の語源（殊）からきている。

字義 ①きりかぶ。木の切株。断木。②おろか。無知。

とあって、驚いたことに「カシ」の訓みもなければ「檜の木」の意味もないのです。慌ててほかの漢和辞典も調べてみましたが、角川漢和中辞典と大同小異でした。諸橋漢和大辞典にも「カシ」の訓みも「檜の木」の意味もありません。

古事記編纂担当史官は、「カシ」の訓みも「檜の木」の意味も持たない「檮」の字を使って、何故「カシ」と読ませたのでしょうか。ここで思いついたのが、橿原遺跡で見つかった「イチイガシ」の根株です。橿原遺跡の西部方含層と言われるところからイチイガシの巨大な根株が数本見つかっているのです。根株に混じって縄文時代晩期の多数の土器片や石器などとともに多量の炭化したイチイガシの果実（ドングリ）が出土しています。古い伝承が檜の木の根株について何かを伝えていて、それをもとに檜の木の森のあったカシハラに白檮原の字を使ったのでしょうか。なお、「檜」は国字、つまり日本でつくられた漢字で、記紀編纂時にはまだ生まれていなかったものと思われます。

古事記の中で、「白檮」が使われたのは「白檮原宮」が最初で、そのほかでは「甜白檮の前」（甘檜の丘）、「葉廣熊白檮」などやはり「檜」の意味で使われています。

この問題は、橿原遺跡の研究とともに今後の課題にしたいと思います。

畝傍山の頂上からは金剛山・葛城山・二上山の山容ばかりか、その麓まで、すなわち葛城の全域を一望の下に見渡すことができます。そればかりか目を北に転じれば信貴山から生駒山やその麓の平群までも遠望できます。麓に目をやれば神武陵の森が広がり、目を上げれば耳成山が屹立し、天香具山が横たわっています。かつての藤原京の麓<sup>いらか</sup>も眼下におさめることができるのです。

畝傍山の南麓に宮居を定めた神武も、その頂上から同じ景色を目にしたことでしょう。



## 五、北部九州の弥生王墓

ここまで、「神武東征」は弥生時代中期末から後期初めごろの出来事として話を進めてきました。つまり一世紀の初めごろに想定していたわけで、それについての検証を何一つしていません。神武が一世紀初めごろに活躍した人物だということを前提にして、神武の実在を語ってきたわけですから、本当にそうなのか、という検証を抜きにして「神武東征」を終わることはできません。

順番が逆になりましたが、この章では神武が活躍した時期について、北部九州の弥生王墓とされている遺跡や遺物、あるいは関連する中国史書などをもとに、検討してみたいと思います。神武の出身地である北部九州、筑紫の弥生時代を訪ねることにより、神武の活躍した時期を知る手がかりをつかめるのではないかと考えました。

なお、神武の出身地（筑紫の日向）と天孫降臨については、『失われた九州王朝』『古代は輝いていた』（ともに朝日新聞社、朝日文庫）など古田武彦氏の著作をご参照下さい。

### 1、弥生の時代区分

一般的な見解によると、筑紫を中心とした北部九州の弥生王墓とされているものに、早良国の吉武高木遺跡三号木棺墓、末盧国の宇木汲田遺跡一・二号甕棺墓、伊都国の三雲南小路遺跡一号・二号墓、同井原鎚溝遺跡甕棺墓、同平原遺跡一号墓、奴国の須玖岡本遺跡王墓などがあり、それぞれの国の王が葬られた墓だとされています。

これらの遺跡や墓が造られたとされるおよその時期を把握するために、弥生時代の時代区分についての一般的な見解を紹介させていただきます。本文に頻出する時代区分は、下記の時代区分に基づいていることをあらかじめご了承下さい。

- \* 早期……前五世紀初めごろ ～ 前三世紀初めごろ
- \* 前期……前三世紀初めごろ ～ 前二世紀初めごろ
- \* 中期……前二世紀初めごろ ～ 一世紀初めごろ
- \* 後期……一世紀初めごろ ～ 二世紀終わりごろ
- \* 終末期… 二世紀終わりごろ～ 三世紀前半ごろ

### 2、弥生王墓の副葬品とつくられた時期（資料8参照）

（大坂府立弥生文化博物館図録『渡来人登場』『発掘倭人伝』より要約）

まず最初に、先述した北部九州のそれぞれの国の王墓ではないかと推測されている遺跡の出土遺物などを調べてみました。

#### 代表的な六王墓

よししたけたかぎ  
吉武高木遺跡（福岡市西区吉武）

- \* 弥生前期～中期初めにかけての墳墓群で、三四基の甕棺墓と四基の木棺墓が見つかった。
- \* 三号木棺墓…多鈕細文鏡一面、細形銅劍二本、細形銅矛・銅戈各一本、翡翠製勾玉一個、碧玉製管玉九五個を副葬。三号木棺墓は、当墓地の盟主的存在。
- \* 弥生前期末から中期初頭（前三世紀末～前二世紀初め）。

宇木汲田遺跡（佐賀県唐津市宇木）

\* 弥生早期～後期にかけての集落・埋葬施設。前期末～後期に至るまでの甕棺墓一二九基、木棺墓三基が見つかっている。

\* 一・二号木棺墓…多鈕細文鏡一面、細形銅劍・銅矛・銅戈の青銅製武器、銅釧、勾玉、管玉など。

\* 弥生中期前半（前二世紀前半）。

三雲南小路遺跡（福岡県前原市三雲）

\* 青柳種信（江戸時代の福岡藩の国学者）によって記録された甕棺墓遺跡で、一九七五年からの調査でその位置が確認された。二基の甕棺墓が出土。

\* 一号甕棺墓…前漢鏡三五面、有柄式銅劍一本、銅矛二本、銅戈一本、金銅四葉座裝飾金具八個、ガラス璧八点、ガラス勾玉三個、ガラス管玉一〇〇個以上、朱入り小壺など。

\* 二号甕棺墓…前漢鏡二二面以上、翡翠勾玉一個、ガラス勾玉一二個、ガラス璧一点。武器類が副葬されていないので、被葬者は女性とされている。

\* 弥生中期後半～中期末（前一世紀後半？）

井原鎚溝遺跡（福岡県前原市井原）

\* 弥生後期の甕棺墓群で、天明年間（一七八一～八九）に、三雲南小路遺跡の南一〇〇畝の水田の溝から、二一面以上の後漢鏡の破片や大小三個の巴形銅器、鉄製武器などを副葬した甕棺墓が偶然発見されたことが、青柳種信によって『筑前国怡土郡三雲村古器図説』として記録されている。ただし出土品は現存しない。  
\* 甕棺墓は弥生後期中ごろ（一世紀終わりごろ）のもの。

須玖岡本遺跡（福岡県春日市岡本七丁目）

\* 墳丘墓を含む弥生中期の甕棺墓群。竪穴住居跡のほか、青銅器の鋳型や坩堝など青銅器生産を示す遺物が多数出土。

\* 王墓…明治三二年（一八九九）に、花崗岩の大石を家屋建設の妨害となるので動かしたところ、合わせ口甕棺が埋められていてその内外に多数の副葬品が置かれていた。

\* 前漢鏡三〇面以上、細形・中広形銅劍、銅矛・銅戈計八本以上、ガラス璧、ガラス勾玉、管玉など。三雲南小路遺跡の一号甕棺とならんで質量ともに弥生王墓の双壁をなす。

\* D地点より出土の夔鳳鏡の年代に問題有り（後述）。（資料9参照70頁）

\* 弥生中期後葉～末（一世紀初めごろ）。

平原遺跡（福岡県前原市有田）

\* 方形周溝墓を主体とする遺跡。一九六五年、

\* 平原一号墓（割竹形木棺の痕跡）…銅鏡三九面（四二面？）、素環頭太刀一、銅環一、ガラス勾玉三、ガラス管玉二〇以上、ガラス小玉四〇〇以上、瑪瑙管玉一一、瑪瑙小玉一、琥珀管玉一、琥珀丸玉六〇〇以上など。

\* 銅鏡のうち三二面が方格規矩四神鏡で、前漢末とされる虺龍鏡もあった。仿製鏡の内行花文鏡は、径四六・五釐あり、わが国最大。

\* 弥生後期後半～終末期（二世紀末～三世紀初頭）。

以上の代表的な六王墓を古い順に並べると、

- ① 吉武高木遺跡三号木棺墓…前期末～中期中頭（前三世紀末～前二世紀初め）
  - ② 宇木汲田遺跡一、二号甕棺墓…弥生中期前半（前二世紀前半）
  - ③ 三雲南小路遺跡一、二号甕棺墓…中期後半（前一世紀）
  - ④ 須玖岡本遺跡王墓…中期後葉～末（一世紀初めごろ）
  - ⑤ 井原鎚溝遺跡…弥生後期中ごろ（一世紀終わりごろ）
  - ⑥ 平原遺跡一号割竹形木棺墓…弥生後期後半～終末期（二世紀末～三世紀初頭）
- となります。

この代表的な六つの王墓の副葬品を比べてみたとき、吉武高木、宇木汲田とそれ以外の王墓との間にはっきりと違いのあることがわかります。その違いは、銅鏡の生産地と数において特に顕著に現れています。吉武高木と宇木汲田が、朝鮮系の多鈕細文鏡一面ずつしか副葬していないのに対し、その他の王墓は中国鏡を二〇面～四〇面も副葬しているのです。三雲南小路にいたっては一号墓と二号墓を合わせて、実に五十数面もの中国鏡を副葬しています。

埋葬された時期が異なるとは言え、あまりにも違いが大きすぎるではないでしょうか。一口に王墓と言っても、吉武高木、宇木汲田とそれ以外の四王墓とでは、その地位や権力構造に大きな格差があり、それが副葬品の違いとなっているのではないかと考え、そこから「神武東征」の糸口を探ってみることにしました。

### 【追記】須玖岡本遺跡「D」地点出土の「夔鳳鏡（径一四寸）」について

- \* 数種類のものがあり、古いものは後漢の「元興元年五月吉日」（一〇五年）や「永加元年五月」（一四五年）の紀年鏡（永加は永嘉のこと）がある。
  - \* 須玖岡本遺跡D地点出土の夔鳳鏡は、平素縁式と呼ばれるもので魏晋代の作とされている。これにも種類があって、別種のもは漢墓や西晋墓から出土したものもある。
  - \* D地点出土の夔鳳鏡と同種のもが、大谷一一号墳（京都府城陽市）から出土している。
  - \* 日本で出土する夔鳳鏡のほとんどは古墳からであり、弥生遺跡からは須玖岡本遺跡以外には見つかっていない。
  - \* 夔鳳鏡の年代については、後漢後期に出現したが、魏晋代になって盛行したものと見られる。
- （以上、『古鏡』樋口隆康著、新潮社、昭和五四年）

## 3、中国史書との関連

- \* 『夫れ楽浪海中倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来り献見す、と云う。』（漢書地理志、燕地）
- \* 『倭人、帯方東南大海の中に在り。山島に依りて国邑を為す。旧百余国、漢の時、朝見する者有り。今使訳通ずる所三十国。』（三国志、魏志倭人伝）
- \* 『倭は……凡そ百余国あり。武帝、朝鮮を滅ぼしてより、使訳漢に通ずる者、三十許国なり』（後漢書、倭伝）
- \* 『元封二年（前一〇九）、朝鮮王、遼東都尉を攻め殺す。……朝鮮を撃つ。』（漢書、武帝紀）
- \* 『武帝、朝鮮を滅ぼし、高句麗を以て県と為す。』（後漢書、高句麗伝）
- \* 『元封三年（前一〇八）、に至り、楽浪、臨屯、玄菟、真番の四郡を分置す。』（後漢書、倭伝）
- \* 『建武中元二年（五七）、倭奴国、貢を奉り朝賀す。使人大夫と称す。倭国之極南界也。光武賜うに印綬を以てす。』（後漢書、倭伝）
- \* 『安帝永初元年（一〇七）、倭国王帥升等、生口百六十人を献じ、願って見んことを請う。』（後漢書、倭伝）
- \* 『桓靈の間（一四六～一八九年）、倭国大いに乱る。更相攻伐して、歴年主無し。』（後漢書、倭伝）

以上は、弥生時代の倭国に関する中国史書（和訳文）からの抜粋です。これら中国史書から弥生時代の倭国について、いくつかわかることがあります。

1、漢書に言うところの「楽浪海中」は、魏志倭人伝の「帯方東南大海の中」と同じ地域を指しています。すなわち、北部九州を中心とした中国地方西部を含む地域を指していることは言うまでもありません。帯方郡は三世紀初めごろに、楽浪郡の南部を割いて設けられたものであり、漢書も魏志倭人伝も同じ地点（旧楽浪郡内）から倭国を見ているからです。

2、漢書の「分かれて百余国を為す」のは、楽浪郡設置（前一〇八年）以前の倭国の状況を説明したものです。文章の終わりに「と云う」と、昔はこうだった、と言っているのをみても明らかです。後漢書も、倭は凡そ百余国あったが、「武帝、朝鮮を滅ぼしてより、使駟漢に通ずる者、三十許国なり」としており、漢によって衛氏朝鮮が滅ぼされる以前は、倭は百余国に分かれていた、と記しています。「旧百余国」<sup>もと</sup>あったものが、武帝が朝鮮を滅ぼしてからは、使駟通ずるのは三十国ばかりだ、と言っているのですから、百余国が三十国ほどになったわけです。

これらのことから、衛氏朝鮮の滅亡という朝鮮半島の重大事件が起こった前二世紀終わりごろから、倭国にも弥生社会を揺さぶる大きな動きの始まったことがわかります。「旧百余国」あったものが「三十国ばかり」になる大事変のあったことを後漢書が示唆しているからです。

楽浪郡設置（前一〇八年）以後に、倭国の弥生社会を揺り動かす大事変が始まったのではないかということを示すものに、弥生中期後半から末にかけてのもの（前一世紀）とされる三雲南小路遺跡一号墓と二号墓に見られる副葬品の中国製品化と豪華さがあります（前一世紀のいつごろのものか、明確な年代は不明ですが、楽浪郡設置以後のものであることは確実だと思われまますので取り上げました）。三雲南小路遺跡に限ったことではなく、その後の王墓とされる須玖岡本・井原鎚溝（副葬品は現存しない）・平原などの遺跡にも多数の中国鏡が副葬されています。中国鏡のみならず、三雲南小路・須玖岡本遺跡の王墓からは、中国では皇帝が王侯クラスの臣下に与えるというガラス璧も出土しています。

これら四王墓の副葬品の中国製品化と豪華さは、武帝による楽浪郡設置と無関係だとはとても考えられません。衛氏朝鮮の滅亡と楽浪郡設置により、それまで主に朝鮮半島を経由していた中国大陸との交流の道が直接通じるようになった結果ではないでしょうか。このように考えると、弥生中期中ごろ以前の遺跡からは朝鮮系の多紐細文鏡<sup>たちゅうさいもんぎょう</sup>が出土していて、中国鏡が副葬されていないのも、あながち不思議とは言えません。

魏志倭人伝には、「賜汝好物」の一つに銅鏡（百枚）とありますが、これは何も卑弥呼に限ったことではなく、昔から倭人は「銅鏡」が好物だったと思われまますから、弥生中期後半以後の王墓に副葬されている多量の中国鏡は、漢の朝廷から代々の倭王に下賜されたものと考えられます。それが故に代々の倭王は、自分がもらった鏡を死後の世界に持っていったのでしょうか。漢の朝廷は、王墓の被葬者たちに銅鏡やガラス璧を下賜することによって、漢と交流する（楽浪郡を通じての交流としても）に相応しい一国の王、即ち倭国王として認知していたものと思われまます。

現在、倭国王に相応しい超豪華な副葬品をともなっている王墓は、三雲南小路・須玖岡本・井原鎚溝・平原の四遺跡で、この中でもっとも古いとされているのが三雲南小路遺跡です。弥生中期後半～中期末ごろにかけてのものとしてされていますから、約百年の時間幅があり、楽浪郡設置（一〇八年）からも前後一〇〇年以上の幅があります。中期後半（前一世紀初め～一世紀初め）の早い時期のものならば、楽浪郡の設置後すぐに漢との交流が始まり、一国の王として認知された時期も前一世紀の初めごろということになり、「認知された最初の倭国王」の可能性が高くなります。しかし、前一世紀後半以後の場合も考えられます。その場合は、楽浪郡が設置されてから数十年以後のものだということになり、三雲南小路の王墓を、楽浪郡設置と直接結びつけるのは難しくなります。この場合でも三雲南小路遺跡の被葬者を、漢から最初に認知された倭国王だと見ると、楽浪郡設置を境に起こった倭国の弥生時代を揺るがす大事変のあと、かなり長い年月、漢の認知に値する新しい国家としての体制が成立していなかったこととなります（今後

さらなる遺跡の発見を期待するのは無理でしょうか)。

漢との直接交流が盛んになったのは、楽浪郡設置以後のこと、つまり弥生中期後半(前一世紀初め)以後のことであり、その集大成とも言うべきものが、現在までに見つかっている四王墓であることは言うまでもありません。そして、弥生中期後半以後に、楽浪海中に住む倭人の世界に、後漢書が言うところの「百余国」が「使駅通ずる者、三十国」ばかりになった大事変が起こったのです。

この大事変とは何か。古事記・日本書紀には、ニニギニミコトの天孫降臨<sup>てんそんこうりん</sup>が伝えられており、これ以外に北部九州の弥生社会を揺り動かすような大事変に相当する記述はありません。すなわちニニギノミコトの天孫降臨によって、倭国を代表する王朝、もしくはその基礎となる政治権力が生まれたのではないかと考える次第です。衛氏朝鮮の滅亡と漢の楽浪郡設置を境にして、弥生中期後半に北部九州に天孫降臨したニニギノミコトとその子孫たちは筑紫を中心に支配体制を整え、倭国王たる地位を固めようとしたのではないのでしょうか。

天孫降臨の当初は、ニニギノミコトの政権はまだ、中国の漢から倭国を代表する王朝として認められていなかった可能性があります。ニニギノミコトの子の時代には兄弟による権力争いが起こっており、政権の不安定さを物語っています。有名な山幸・海幸の争いです。この争いが決着したところから政権は安定し、倭国を代表するに相応しい王朝として漢からも遇されるようになったのではないのでしょうか。

系譜上、神武は山幸の孫に当たりますから、ニニギノミコトから四代目の子孫になります。ニニギノミコトの天孫降臨が弥生中期後半の初め(前一世紀初め)ごろとすると、神武が弥生中期末から後期初め(一世紀初め)ごろの、ニニギノミコトの血筋に連なる一族の一人だとしてもおかしくありません。「神武東侵」は、ニニギノミコトの血筋に連なる一族の一人である神武によって起こされたものであり、その時期は、倭奴国王が「漢委奴国王」と刻まれた金印<sup>いんど</sup>を後漢の光武帝から下賜された時を遡ること三〇～五〇年ぐらい前、すなわち一世紀初めごろと推測することができます。(資料6参照)

## 4、各地域の有力者の墓・遺跡

中国鏡を副葬している遺跡は、既に述べた代表的な六王墓(正確には四王墓)だけではありません。北部九州には六王墓のほかにも中国鏡を副葬している有力者の墓と思われる遺跡が数多くあります。

### 対馬地区

塔ノ首遺跡(上対馬町比田勝、西泊まり湾を見下ろすところ)

- \* 岬の突端のなかほどに五基の石棺を確認。
- \* 三号石棺に広形銅矛二本を副葬。
- \* その他の石棺より、方格規矩鏡、朝鮮半島の土器、楽浪系銅釧、中国製銅鏡。
- \* 弥生後期の有力集団の存在がうかがわれる。

恵比須山遺跡(対馬西海岸の峰町吉田浦、一番奥まったところ)

- \* 石棺墓一二基、壺棺一基を確認。
- \* 八号石棺=朝鮮半島産の青銅製粟粒状方柱十字形把頭飾り。
- \* 六号石棺=変形細形銅劍。
- \* 弥生後期

かがり松鼻遺跡(美津島町、対馬を二分する万関橋の東に突き出た岬の上)

- \* 石棺はほぼ半壊状態。
- \* 流雲形花文を施した青銅製把頭飾り(黄河中・下流域で流行)、変形細形銅劍(対馬と韓国に数例)、ガラス小玉。

### 三根遺跡山辺

- \* 対馬には珍しい弥生集落跡。
- \* 百個以上の柱穴や竪穴住居跡、高床倉庫跡。
- \* 朝鮮半島の土器、楽浪系土器。
- \* 弥生後期。

### 壱岐地区

カラカミ遺跡（壱岐藤本町、刈田院川中流右岸に点在する遺跡の中心）

- \* 弥生前期から集落の形成が始まり、濠が巡らされている。
- \* 漁労関係の遺物が多い。
- \* 方格規矩鏡、銅鏃、ト骨、朝鮮半島系の瓦質土器、楽浪系滑石混入土器が出土。
- \* 弥生後期。

車出遺跡（壱岐郷ノ浦町柳田地区、壱岐西部で比較的まとまりのある平野部）

- \* 壱岐一宮の天手長男神社あり。
- \* 方格規矩鏡、貨泉、小型仿製鏡、銅鏃、土器溜、<sup>ぼっこつ</sup>ト骨などが出土。
- \* 弥生後期。

<sup>はる</sup>原の辻遺跡（壱岐）

- \* 円圈文規矩四神鏡・獣帯鏡・「長宣子孫」銘内行花文鏡などの中国鏡、<sup>ごしゅせん</sup>五銖銭・貨泉・大泉五十などの貨幣、トンボ玉、三翼鏃、鑄造鉄斧、戦国式銅劍、鉄槌、楽浪系土器など。
- \* 朝鮮半島からと思われるものに、板状鉄斧の鉄、無文土器、三韓系土器、陶質土器など。
- \* 弥生後期。

### 唐津地区

柏崎遺跡（唐津市、宇木川下流の低台地上に在る）

- \* 弥生中期後葉から後期にかけての王墓の可能性が高い。
- ：石蔵遺跡（中期）…甕棺から中細銅矛、触角式有柄銅劍（現在までに三例のみ）が出土。
- ：田島遺跡（後期）…連弧文「日光」銘鏡（中国雲港市で同型鏡出土）。

<sup>さくらのぼぼ</sup>桜馬場遺跡（唐津市）

- \* 弥生時代後期初めの甕棺墓。
- \* 後漢の流雲文縁方格規矩四神鏡、素縁方格規矩渦文鏡、<sup>ゆうこう</sup>有鉤銅釧二六、巴形銅器三、鉄刀片、ガラス製小玉が出土。

以上主なものを上げました。中国鏡の出土している遺跡は、そのほとんどが弥生後期のもので、楽浪郡が設置（前一〇八年）された弥生中期中ごろまで遡るものはありません。言い方を替えれば、楽浪郡設置以前に中国鏡が副葬された墓の遺跡が北部九州にはない、つまり、中国鏡が北部九州に現れるのは楽浪郡設置以後のことだということです。このことは、衛氏朝鮮の滅亡を機に起こったと思われる北部九州の大事変、天孫降臨の後で、中国との楽浪郡を通じた直接交流が行われるようになったことを意味しています。

これらの遺跡と、先に紹介した三雲南小路・須玖岡本・井原鍵溝・平原遺跡の四王墓を比べてみれば、その副葬品の豪華さにおいて歴然たる差のあることがわかります。この差はおそらく、倭国を代表する倭王朝に連なる倭王の墓（四王墓）と、その支配下にある有力豪族（あるいは各地域の王）との差を物語っているものと思われます。

## 六、「欠史八代」は語る

これまで、古事記・日本書紀が語る「神武東征」は、近畿天皇家の正統性を主張するという大義名分による脚色はあるものの、定説（一般常識論）の言うような「作り出された架空の物語」ではなく、歴史事実を反映した古くからの伝承を記録したものではないか、ということ考察してきました。ところが定説は、「神武東征」説話のみならず、それ以後の天皇についても「作り出された天皇」が数多くあると指摘し、だから「神武東征」説話も「作り話」だと主張しています。

定説によって、「作り出された天皇」とされているのが「欠史八代」と呼ばれている、二代綏靖から九代開化までの八人の天皇群です。これら八人の天皇については、古事記・日本書紀ともに何故か、その事績とも言うべき天皇や朝廷にまつわる説話を載せていません。したがって、その生存中に何をしたのか、何があったのか、どんな天皇だったのか、ほとんどわかりません。定説によって「欠史八代」と呼ばれ、年代合わせのために「作り出された架空の天皇」とされる<sup>ゆえん</sup>所以がここにあるわけです。

これら八人の天皇について記述されていることと言えば、その父母や后妃・皇子女・宮居・陵墓・崩御年齢などに関することだけです。他の天皇についてはそれなりの説話が語られているのに、この八人に限って「何故、説話がないのか」と誰しも不思議に思うところです。定説では、このような不思議な天皇の存在こそ、古事記・日本書紀の一部が編纂担当史官によって造作された有力な証拠の一つだとして、説話のある神武も含めて実在しない天皇群にしているのです。そして八人の架空の天皇を造作した理由として、神武を<sup>しんい</sup>讖緯説の<sup>しんゆうかくめい</sup>辛酉革命説にもとづく辛酉の年、すなわち前六六〇年に即位させてしまったために、後代の天皇との間にできた空白の年代・年数を埋める必要が生じたからだとしています。しかし、これもおかしな話です。「神武東征」説話を造作したのなら、その続きに八人の説話も造作すればよいのであって、わざわざ「欠史」のままほったらかしにしておく方が余程おかしいではありませんか。

### 1、欠落している奈良盆地平定説話

近畿天皇家の歴史は、神武天皇が奈良盆地の一隅、<sup>うねび</sup>畝傍山麓に居を定めて、<sup>いわれ</sup>磐余と呼ばれた可能性のあるその周辺（現：橿原市あたり）を支配下に収めたところから始まります。

古事記によると、熊野から紀伊山地を横断してきた神武は、<sup>うだ</sup>宇陀や<sup>おしざか</sup>忍坂、<sup>しき</sup>師木（磯城）などで熾烈な戦いをして奈良盆地の敵対勢力を倒し、<sup>かしはらのみや</sup>畝傍の<sup>あめ</sup>白檮原宮で天の下を治めたとあります。読みようによっては、宇陀や奈良盆地のいくつかの豪族と戦っただけで天下を支配下に収めたかのような書き方です。しかし、宇陀や奈良盆地のいくつかの豪族と戦っただけで天下に君臨できるはずはないのであって、そのためには盆地外の各地方勢力との激しい戦いが繰り返されなければなりません。ところが、奈良盆地外では、盆地に侵入する前の生駒山西麓（現：東大阪市日下）における手痛い敗戦と、和歌山平野・熊野地域、盆地への侵入ルートにあたる宇陀地域での戦いがあるだけです。つまり、奈良盆地に侵入するための戦いが盆地外の戦いとして記述されているに過ぎず、天下に君臨するための戦いなど一つもありません。奈良盆地外での戦い、盆地外への進出の戦いが始まるのは、十代崇神まで待たなければならないのです。

奈良盆地侵入を何とか成し遂げたに過ぎない神武を、あたかも日本列島の主になったかのごとく、「<sup>うねび</sup>畝傍の<sup>かしはらのみや</sup>白檮原宮に坐しまして、<sup>あめ</sup>天の下治らしめしき」としたのは、近畿天皇家こそが日本列島唯一無比の支配者であることを正統化し、主張しようとした「古事記編纂の目的」をズバリ、言い表したものに過ぎません。祖先神である天照大神の意思を体現した神武の血筋を引く近畿天皇家こそが、日本列島の正統な主であることを主張するためには、神武は「<sup>あめ</sup>天の下」を「<sup>したし</sup>治らしめ」ていなければならなかったのです。しかし、奈良盆地に侵入した神武が実際に支配領域として獲得できたのは、<sup>まわ</sup>畝傍山を中心とする盆地の一隅に過ぎません。その周りはおそらく、奈良盆地の在地豪族によって取り囲まれていたものと思われます。

奈良盆地の一隅に割拠する一豪族、それも精強な武力を有する外来豪族として盆地の在地豪族から常に警戒されていた近畿天皇家の祖先たちが、奈良盆地の外へ向かって活発な動きを始めるのは十代崇神の時からであって、この天皇の代から説話が再び記述され始めます。説話のない二代綏靖から九代開化までの間、神武の子孫たちは何をしていたのでしょうか。何もしていなかったから説話もなかったのでしょうか。

物事の順序からして、奈良盆地の一隅にいる豪族が盆地の外へ進出・発展していくためには、その前提として盆地を制圧・平定し、支配下に置いていなければならないはずです。ところが古事記・日本書紀ともに、奈良盆地の制圧・平定に関する経過を何一つ記していません。十代崇神に至っていきなり、盆地外への進出・発展の動きが現れます。神武の子孫たちが次第に実力を蓄えて奈良盆地の一隅から徐々に勢力を拡大し、やがて盆地全体を制圧・平定するに至るまでの経過を、説話として残していないのです。奈良盆地の外へ進出・発展していくためには、盆地の制圧・平定が前提であるにもかかわらず、その前提を語る伝承が何もないなど考えられないではありませんか。

この道理を推し進めていくと、奈良盆地の外へ進出・発展し始める崇神よりも前の時代は、すなわち説話のない九代開化以前は、奈良盆地平定の時代だったのではないかと、という考えに自然に導かれていきます。当然、その経過を語る説話もあったはずですが、それでいて古事記・日本書紀ともにその経過を記さず、奈良盆地平定の時代とも言うべき二代綏靖から九代開化までの説話をすっぱり欠落させているのは何故でしょう。

<sup>かんなんしんく</sup> 艱難辛苦を重ねて奈良盆地の一隅に居座った神武の子孫たちが、生き残る道を求めて勢力拡大に心血を注ぎ、遂に平定したのですから、その伝承も「神武東征」と同じように後世に伝えても何らおかしくないはずです。それどころか、祖先の輝かしい功績として、取り上げてしかるべきはずのものです。にもかかわらず古事記・日本書紀ともに後世、「欠史八代」とか「架空の天皇群」などと言われ、「記紀造作説」の有力な証拠の一つにされるような説話のない天皇を八人もつくり出し、大きな謎を残したままにしまいました。古事記・日本書紀編纂当時には、奈良盆地平定の過程を語る伝承が「神武東征」伝承の後に続いていたはずであり、この伝承の続きとして十代崇神が語られていたはずですが、奈良盆地平定過程を語る伝承を説話として記さず、欠落させたまま、あたかも争いも何もない平和のうちに代を重ねたかのようにしたのは、それ相応の理由がなくはなりません。また、その理由を、古事記・日本書紀編纂を担当した史官たちはもちろんのこと、天皇をはじめ、朝廷を構成する皇族・貴族たちも十分理解していたと言わざるを得ません。何故なら、本来あるべきはずの説話を欠落させた不可思議な天皇群をつくり出したままで、天皇をはじめ朝廷を構成する皇族・貴族たちの納得を得られるはずがないからです。

この欠落している奈良盆地平定説話を語る伝承が、奈良盆地の制圧・平定の時代であったと思われる二代綏靖から九代開化までの、古事記・日本書紀の記述の中に潜んでいるのではないだろうかと考え、「欠史八代」の天皇群と十代崇神の後妃の出自や宮居・陵墓の所在地などを調べてみることにしました。



## 2, 后妃の出自、宮居・陵墓の所在地 (比定地)

表Ⅰ 后妃の出自

		正妃	正妃の一書		妃	妃	妃
神武	記	大物主神の娘			日向		
	紀	事代主神の娘			日向		
綏靖	記	師木県主					
	紀	事代主神の娘	磯城県主	春日県主			
安寧	記	師木県主					
	紀	事代主神系	磯城県主	十市系?			
懿德	記	師木県主					
	紀	皇族(姪)	磯城県主	磯城県主			
孝昭	記	葛城系(尾張)					
	紀	葛城系(尾張)	磯城県主	十市系?			
孝安	記	皇族(姪)					
	紀	皇族(姪)	磯城県主	十市県主			
孝靈	記	十市県主			春日系	不詳	不詳
	紀	磯城県主	春日系	十市県主	十市系	十市系	
孝元	記	穂積臣			穂積臣	河内	
	紀	穂積臣			物部氏	河内	
開化	記	穂積臣			巨波県主	丸邇臣	葛城系
	紀	穂積臣			丹波系	和珥臣	
崇神	記	皇族(従姉妹)			木国造	尾張連	
	紀	皇族(従姉妹)			紀伊国系	尾張系?	

表Ⅱ 宮居・陵墓の所在地 (比定地)

天皇	宮居		陵墓	
神武	畝傍山麓	橿原神宮	畝傍山麓	橿原市四条町
綏靖	葛城	御所市森脇	畝傍山麓	橿原市四条町
安寧	葛城	大和高田市三倉堂	畝傍山麓	橿原市吉田町字西山
懿德	軽	橿原市大軽町	畝傍山麓	橿原市池尻町カシ
孝昭	葛城	御所市池之内	葛城	御所市三室字博多山
孝安	葛城	御所市室	葛城	御所市玉手字宮山
孝靈	磯城	田原本町黒田	葛城	王寺町本町
孝元	軽	橿原市大軽町	剣池	橿原市石川町剣池上
開化	春日	奈良市上三条町	春日	奈良市油阪町
崇神	磯城	桜井市金屋	柳本	天理市柳本字アンド

表Ⅰ、表Ⅱは、古事記・日本書紀を調べた結果をまとめたものです。各天皇の詳細については文末に記載します。(資料7参照)

宮居と陵墓の所在地については、古事記・日本書紀に記載されている所在地は文末に詳細を記載しますが、上記のまとめの表では、所在地に比定または治定されている現在の地名を使用しました。

### 3、奈良盆地平定の経過 (資料10参照)

#### 葛城地域への進出

后妃の出自を調べているうちに、古事記では師木しきのあがたぬし県主、日本書紀では磯城しきのあがたぬし県主を出自とする后妃の多いことに気がつきました。師木も磯城も字が違っただけで同じ地域を指していることは言うまでもありません。明治三十年に式上・式下・十市の三郡を合併して磯城郡としているところから、現在の桜井市(南端部を除く)と田原本町(南端部を除く)から川西町、三宅町にまたがる奈良盆地中央部を支配する有力豪族の一つではなかったかと考えられます。現在、磯城郡の名を残しているのは田原本町、川西町、三宅町の三町のみです。

古事記によると、二代綏靖すいぜい、三代安寧あんねい、四代懿徳いとくの三天皇の妃は全て師木しきのあがたぬし県主系の出身であり、三人の妃とも次代の天皇を生んでいます。二代綏靖は三輪おおもものぬしのかみの大物主神の娘、伊須いす氣け余より理ひめ比め売めから生まれていますが、三代安寧、四代懿徳、五代孝昭の三天皇は師木しきのあがたぬし県主系を出自とする妃から生まれており、神武の子孫と師木しきのあがたぬし県主との密接な関係を示しています。

日本書紀では、本文で磯城しきのあがたぬし県主系の妃として次代の天皇を生んでいるのは、七代孝靈こうれいの細くわし媛ひめ命のみこと一人だけで、本文による限りでは神武の子孫たちとの密接な関係は古事記ほど見られません。ところが、一書として出てくる正妃を見ると二代綏靖、三代安寧、四代懿徳、五代孝昭、六代孝安こうあんとかえって古事記よりも多くの磯城しきのあがたぬし県主系の妃を迎えており、やはり神武の子孫と緊密な関係にあったことがうかがえます。

神武が奈良盆地の一隅に居を構えたあと、その子孫たちは奈良盆地の有力豪族である磯城しきのあがたぬし県主と緊密な関係を結び維持することによって、奈良盆地での生き残りをはかろうとしたのではないのでしょうか。まわりを奈良盆地の在地豪族に囲まれた外来の一豪族が、在地の有力豪族と姻戚関係を結んで、その保護と支援を得て生き残りをはかろうとするのは、むしろ当然の政略でしょう。磯城しきのあがたぬし県主にとっても、神武の率いてきた強力な戦闘集団てなづを手懐けることができれば、他の在地豪族に対する有効な威圧手段となり、奈良盆地における地位の向上と安全を図る上で有利な立場を築くことができたのではないかと考えられなくもありません。

まわりを在地豪族に囲まれた神武の子孫たちが生き残る道は、有力豪族と姻戚関係を結んで持ちつ持たれつの緊密な関係を造り上げるほかに、もう一つ、しなければならないことがあります。実力の増強です。在地有力豪族との婚姻関係を重ねることに甘んじているだけでは、いつしか盆地片隅の一小豪族に埋没してしまい、盆地内勢力争いの嵐の中でいつ併呑され、消滅してしまうかも知れない危険にさらされ続けなければなりません。いわば自滅の道を歩む危険にさらされているようなものです。奈良盆地突入に際して神武が展開した残酷極まる熾烈な戦闘を思い起こせば、神武の子孫たちを快く思っていない在地豪族も多はずです。ひとたび風向きが変われば婚姻関係など消し飛んでしまうに違いありません。神武の子孫たちが奈良盆地で生き残りをはかるためには、押しも押されぬ実力を備える必要があります。

神武の子孫たちが、その生存をかけて取り組んだ実力増強の道は、おそらく支配領域の拡大ではなかったのでしょうか。しかし、神武が居を定めた畝傍山を中心とする地域の東や北側、いわゆる奈良盆地の枢要地域は磯城しきのあがたぬし県主、十市とおちのあがたぬし県主など在地有力豪族がすでに蟠踞ばんきよするところとなっており、そこへ進出して支配領域を拡大しようとするれば、再び盆地内の全豪族を相手に絶滅をかけた戦いを挑むことになり、先ず無理だと思われまふ。この方面とは有力豪族と婚姻関係を維持することによって争いを避けつつ他の地域への進出をはからなければなりません。

二代綏靖<sup>すいせい</sup>、三代安寧<sup>あんねい</sup>、五代孝昭<sup>こうしょう</sup>、六代孝安<sup>こうあん</sup>の宮居は、いずれも葛城<sup>かつらぎ</sup>に遷<sup>うつ</sup>されています。この四人以外に葛城地域に宮居を遷した天皇はその後一人もいません。また、初代神武から四代懿德<sup>いとく</sup>までの四人の陵墓は全て畝傍山の麓にあります。五代孝昭、六代孝安、七代孝靈<sup>こうれい</sup>の三陵墓は葛城地域に築かれています。特に七代孝靈の陵墓は葛城地域の北端、現在の王寺町にあります。欠史八代中、葛城地域に陵墓があるのはこの三天皇だけです。この三天皇以外に葛城地域に陵墓があるのは、二十三代顕宗<sup>けんそう</sup>と二十五代武烈<sup>ぶれつ</sup>の二天皇ですが、二人とも欠史八代の天皇群とは年代がはるかに隔たっており、時代やその背景も全く異なっているため同列に扱えないことは言うまでもありません。このように、宮居・陵墓ともに葛城地域に集中しているのは欠史八代の間だけです。このことは欠史八代の天皇群と葛城地域との、他の時代の天皇とは異なる強い結びつきのあったことを意味しており、それは、神武の子孫たちが支配領域拡大のために、先ず葛城地域へ進出したことを意味しています。神武の子孫たちは、その生き残りを賭けた実力増強の道、支配領域の拡大を奈良盆地の枢要地域から取り残されたような盆地西南隅の南葛城地域への進出から始めたと考えられるのです。

古事記によると、二代綏靖から四代懿德までの三天皇は、師木<sup>しきの</sup>県主系から妃を迎えてそれぞれ次の天皇を生ませています。奈良盆地中央を支配領域とする有力豪族である師木県主と婚姻関係を深めて後方の安全を維持しつつ、南葛城地域への軍事行動や懐柔策を積極的に推進した時代だと思われます。師木県主も神武の子孫たちを通じて葛城地域へ勢力を伸ばそうと考え、その行動を容認し、支援を与えたのかも知れません。

五代孝昭に至って、葛城の豪族である尾張<sup>おわり</sup>氏から妃を迎えて六代孝安を生ませており、陵墓も畝傍山麓から離れて、初めて葛城地域に造られています。このころに南葛城地域（御所市あたり）が支配領域として安定したものと思われ、その維持を図るための手段の一つとして、葛城在地豪族から妃を迎えたとともに陵墓を初めてこの地に築いたのではないのでしょうか。

六代孝安は、古事記・日本書紀ともに皇族から妃を迎えています。日本書紀の一書では、磯城<sup>しきの</sup>県主と十市<sup>とおちの</sup>県主からも迎えたとしており、周辺在地豪族との繋がりが保たれていることを示しています。宮居・陵墓はともに南葛城地域にあり、この地域の安定に力を注ぐとともに、北葛城地域への進出を目論んでいたと思われますが、奈良盆地中央進出への足がかりをつくり、神武子孫大飛躍の礎を築いたのは、次の七代孝靈でしょう。

## 盆地中央への進出

七代孝靈の正妃は古事記では十市<sup>とおちの</sup>県主の祖大目の女、日本書紀では磯城<sup>しきの</sup>県主大目の女とあって、名前も細比売<sup>ほそひめ</sup>・細媛<sup>くわしひめ</sup>と読みは違うものの同じ字が使われており、父親の名前も同じ大目なのに出身だけが十市・磯城と異なっています。日本書紀では一書として、妃も父親も違いますが十市県主系とされる妃を上げています。実は六代孝安にも一書として十市県主系の妃を上げており、何故か二代続けて十市県主系の妃が現れてきます。

七代孝靈が宮居を遷したところは「黒田<sup>くろだ</sup>廬戸<sup>いほどのみや</sup>宮」とあり、現在の田原本町黒田、古くは城下郡黒田郷の地とされています。黒田は奈良時代からその名が現れてくる古い郷名で、田原本町中央部西寄りの黒田の地とされており、いわゆる磯城の一部に属し、十市郡は現在の桜井市南部・橿原市北部（北端に十市町がある）・田原本町南部（太<sup>おお</sup>・千代<sup>ちしろ</sup>・佐味<sup>さみ</sup>など）のあたりと思われますから、孝靈は十市郡を通り越してその北側に宮居を遷したことになります。古事記・日本書紀に言う十市県主の支配領域は残念ながら明確にすることはできませんが、大宝律令の郡制施行により成立した十市郡（大和一五郡の一つ）のあたりだとすると、その北側に宮居を遷した孝靈のころには、十市郡のあたりは神武の子孫たちの勢力範囲に入っていたことになります。何故なら十市郡は、神武の子孫たちの根拠地である畝傍山周辺を中心とする現在の橿原市と、磯城の地に属していたと思われる田原本町黒田の間であって、この十市郡の西部が安定した勢力範囲に入っていなければ、そこを通り越してその北側に宮居を遷すことは難しいからです。孝安、孝靈

のころに十市県主系出自の妃が現れるのも、その経緯を暗示しています。

孝霊の陵墓は、片丘の馬坂、現在の北葛城郡王寺町本町（片岡神社など片岡の地名が残っている）に治定されており、この地は北葛城郡の地名が示すように葛城地域の北端に位置します。そこに陵墓が造られたということは北部葛城地域も陵墓が営めるほどの安定した勢力範囲に入っていたこととなります。つまり、孝霊のころには葛城地域のほぼ全域が神武の子孫たちの支配領域に入っていたとみられるのです。

孝霊の陵墓に治定されているところは、北流してきた葛下川が西へ向きを変えて大和川に合流する手前の南側に広がる丘陵地帯にあり、五、六百<sup>カ</sup>西側を流れる大和川を見下ろす丘の上に在ります。

大和川は当時の奈良盆地と河内平野を結ぶ大動脈です。古代から近世の終わりごろに至るまで、奈良盆地とその西側に広がる世界の間を、人と物が交流する大動脈であったことはよく知られています。孝霊の陵墓は、この大動脈の奈良盆地側出入口にあたる場所に築かれたことになり、このころには大和川の水運をも掌握していたことを暗示しています。係争中の不安定なところに陵墓を築くとは思えないからです。

古事記によると孝霊の子、大吉備津日子<sup>おおきびつひこ</sup>と若日子建吉備津日子<sup>わかひこたけきびつひこ</sup>の兄弟（異母兄弟）が「相副ひて」<sup>あいたぐ</sup>吉備国<sup>きびのくに</sup>を「言向和し」<sup>ことむけやわ</sup>て、大吉備津日子は吉備の上つ道臣<sup>かみつみちのおみ</sup>の祖、若日子建吉備津日子は吉備の下つ道臣<sup>しもつみちのおみ</sup>や笠臣<sup>かさのおみ</sup>の祖となつたとしています。つまり、孝霊の二人の皇子が協力して吉備国と平和的に友好関係（あるいは同盟関係？）を結んだという短い説話らしきものを、后妃・皇子女の中で語っています。日本書紀は、孝霊の皇子、稚武彦<sup>わかたけひこ</sup>を「是吉備臣の始祖なり」としているだけで吉備を平定したとも、「言向和し」たとも記しておらず、十代崇神に至って四道將軍の一人である孝霊の皇子、吉備津彦<sup>きびつひこ</sup>を西道（吉備方面）に遣わして平定したとしています。古事記で、崇神の派遣したのが三道將軍になっていて西道（吉備方面）への派遣が抜けているのは、孝霊の時にすでに吉備との間に和平・友好関係が成立していたという前提に立っているからでしょう。

まだ奈良盆地さえ平定しているとは思えない段階で、遙か彼方の吉備を平定することなどできるとは考えられませんから、河内を経て瀬戸内海に通じる大動脈である大和川の水運を掌握したところからこのような伝承が生まれたのではないのでしょうか。あるいは実際に吉備へ二人の皇子を派遣したのかも知れません。神武の奈良盆地侵入以来途絶えていた吉備との交流がこのころから再開したものと思われ、孝霊より少し後から出現する前方後円墳や、そのいくつかが特殊器台形土器や特殊器台形埴輪を伴っているのも、吉備との交流なしには考えられないことです。

## 吉備文化の流入

復元された古墳を訪れると、墳丘のまわりや墳頂に円筒埴輪や朝顔形埴輪が整然と配列されているのをよく見かけます。その数の多さと整然たる光景に思わず目を奪われてしまうと同時に、いったい何のためにこんなものをこれほど大量に作って墓を飾るのか、首を傾げさせられます。

実はこの円筒埴輪の起源が特殊器台形土器にあるとされているのです。特殊器台形土器から特殊器台形埴輪へと遷り変わり、やがて円筒埴輪が圧倒的な数で古墳を飾るようになります。

「特殊器台形土器」は、大型の特殊壺を載せる円筒形の器台で、その上端部は壺を載せるために二重口縁<sup>にじゅうこうえん</sup>になっており、また、土の上に置いて立てるので安定しやすいように基底部分が裾広がりにつくられています。胴部の円筒形の部分には何段かの区切りを設けて、巴形や三角形の透かし孔をとまなう弧状の複雑な文様が描かれています。

「特殊器台形埴輪」は、特殊器台形土器の基底部を土中に埋めて立てるようにしたものです。したがって基底部に裾広がり部分はあません。壺を載せるための二重口縁や胴部のつくりは特殊器台形土器と基本的には変わりません。

「円筒埴輪」は、壺を載せるための二重口縁がなく、胴部には三角形や方形などの透かし孔と何段かの区切りはあるものの文様は描かれていません。もちろん基底部の裾広がりもありません。大きな前方後円

墳になると千を超すとも推定される円筒埴輪が配列されていますから、特殊器台形土器や特殊器台形埴輪のように丁寧な作り方はできなかつたと思われます。

「朝顔形埴輪」は、円筒埴輪と特殊壺を組み合わせたものとされています。

以上、円筒埴輪の起源と変遷を概説しました。ところが、奈良盆地の弥生遺跡からは円筒埴輪の起源とされる特殊器台形土器が出土しないのです。古墳文化が奈良盆地で生まれたとされているのに、古墳文化の代表的特徴の一つをなす「円筒埴輪」の起源とされる「特殊器台形土器」が、「弥生時代の奈良盆地」で生まれた形跡がないのです。つまり、奈良盆地の弥生文化のもとで生まれなかつたものが、同じ奈良盆地の古墳時代初期に前方後円墳を飾る祭祀道具として出現したことになります。特殊器台形土器に関する限り、奈良盆地の弥生文化と古墳文化の間に継続性が見あたらないのです。

円筒埴輪の起源である特殊器台形土器が最初に現れたのは、弥生時代後期の吉備地方だとされています。弥生後期の吉備地方で生まれた特殊器台形土器が、奈良盆地の古墳時代初期の前方後円墳に現れるわけですから、順序としては吉備地方から奈良盆地に伝わったと考えざるを得ません。(資料11参照)

特殊器台形土器のもっとも古いものを立坂型と言い、弥生時代後期の<sup>たてつき</sup>楯築弥生墳丘墓・立坂弥生墳丘墓(岡山県総社市)などから出土しています。弥生時代末期から古墳時代初期にかけてのものを宮山型(宮山古墳出土：岡山県総社市)と言いますが、この宮山型特殊器台形土器が奈良盆地の箸墓古墳(桜井市)、西殿塚古墳・中山大塚古墳(天理市)、弁天塚古墳(橿原市)などから出土しています。

特殊器台形埴輪が最初に発見されたのが都月坂一号墳(岡山市津島)で、そこから名前のついた都月型円筒埴輪は吉備の<sup>びぜん</sup>備前南部を中心に多数出土しており、奈良盆地では箸墓古墳(桜井市)、西殿塚古墳・東殿塚古墳・中山大塚古墳・<sup>まきぐち</sup>馬口山古墳(天理市)から見つかっています。円筒埴輪は、都月型円筒埴輪から文様を取り去り、透かし孔を残したものと、と言えます。

奈良盆地で生まれたはずの古墳文化を代表する前方後円墳についても、特殊器台形土器と同様、理解に苦しむ問題があります。

不思議なことに弥生時代の奈良盆地には、前方後円墳に先行し、その起源となるべき弥生墳丘墓が見あたりません。前方後円墳は、ある日突然出現した、とでもいうような状況で奈良盆地に現れるのです。前方後円墳も特殊器台形土器と同じように、奈良盆地の弥生文化との継続性が極めて希薄な状態で出現するのです。

奈良盆地内の特定豪族の支配領域拡大や権力強化にともなって、その墓である墳丘墓が次第に大型化し、やがて周濠をめぐらすようになって、それが前方後円墳に変形していったのではないかと考えていたのですが、そのためには前方後円墳に先行する大型の墳丘墓が弥生時代の奈良盆地に存在していなければなりません。特に、最古級の前方後円墳が集中している<sup>まきむく</sup>纏向遺跡(桜井市)やその周辺に弥生墳丘墓が見つかって当然だと考えていました。ところが、過去数十年の調査にもかかわらず、纏向遺跡やその周辺には前方後円墳に先行する弥生墳丘墓が一つも見つかっていません。「これだけ調査をしても見つからないのだから、もともとなかつたのではないか」というのが専門家の意見のようです。

奈良盆地からも弥生時代の墓地が数多く見つかっているのは言うまでもありません。方形の土盛りのまわりを浅い溝で区切る、いわゆる方形周溝墓が密集した墓地などもあちこちで見つかっており、<sup>かめかん</sup>甕棺や木棺も多数出土しています。一つの方形周溝墓には複数の土壙のあるものもあり、一遺体を埋葬したとは限りません。しかし方形周溝墓は、その形、大きさ、土盛りの規模などからして、数十メートルの大きさと高い土盛りを持つ前方後円墳に先行する弥生墳丘墓と結びつけることは難しいのではないかと考えられます。前方後円墳や大型弥生墳丘墓が、明らかにその地域の特定の権力者やそれに連なる一族が葬られたと思われるのに対し、方形周溝墓にはそのような形跡が見あたらないのです。

奈良盆地に一つだけ、弥生墳丘墓らしきものが見つかったことがあります。昭和五十五年から同五十六年にかけて<sup>きたかつらぎぐんこうりょうちょう</sup>北葛城郡広陵町の<sup>しんやま</sup>新山・黒石古墳群の発掘調査が<sup>つぎやま</sup>橿原考古学研究所によって行われ、このうち、<sup>つぎやま</sup>築山古墳群(大和高田市築山)の北方にある黒石支群(近鉄大阪線の北側)から見つかつたのがそれです。

一辺一〇<sup>センチ</sup>前後、幅約一<sup>センチ</sup>の溝に囲まれた方形台上墓が一つ見つかり、黒石一〇号墓と名づけられました。周辺からは、木棺直葬や横穴式石室などの埋葬施設を持ち、円筒埴輪・須恵器をともなう円墳・方墳・前方後方墳など十数基の古墳が確認されました。新山・黒石古墳群は、馬見丘陵古墳群の中でも前方後方墳の多いところで、陵墓参考地に治定されている新山古墳（前期・墳丘長一二六<sup>センチ</sup>）をはじめ、合計四基が確認されています。この地域に限れば前方後円墳は、モエサシ三号墳（墳丘長八〇<sup>センチ</sup>）一基しかありません。

まわりを円墳や方墳・前方後方墳に囲まれている黒石一〇号墓が弥生時代の墓だとされるのは、東辺の溝から第五様式（弥生後期）に分類される弥生式の壺形土器を主に、若干の高坏が出土したからです。出土状況から見て、墳丘の縁辺に置かれていたものが溝内に転落したものと推定されています。しかし、規模が小さく、方形であることなどから前方後円墳に先行する弥生墳丘墓に結びつけるのは無理のようです。ちなみに、黒石一〇号墓は、周辺の住宅開発によって姿を消してしまい、現在見ることはできません。

奈良盆地内ではありませんが、実はもう一つ、弥生墳丘墓ではないかと言われた墓がありました。一九八〇年に発掘調査された見田・大沢古墳群で、宇陀郡菟田野町見田と大沢にまたがる標高三七〇<sup>センチ</sup>ほどの舌状の尾根上で、四基の方墳と一基の前方後円墳が確認されました。一時、弥生墳丘墓の可能性もあるかも知れない、と言われたこともありましたが、前方後円墳である一号墳からは須恵器が見つかっており、もっとも古いとされる四号墳からは「纏向一〜三式」（庄内式）とされる土師器が、また二・三号墳からは「纏向四式」（布留一式）の土師器が出土しており、そのほか棺の形態、副葬品の内容、墳丘の形態などから、現在確認されている古墳の中では最古の部類のものとされているものの、弥生墳丘墓ではないとされています。

奈良盆地および隣接する宇陀地域を見ても、前方後円墳に先行し、結びつきそうな大型弥生墳丘墓は現在のところ見つかっていません。特殊器台形土器だけでなく前方後円墳に関しても、奈良盆地の弥生文化と古墳文化との継続性を示すはずの大型弥生墳丘墓が見つかっていないのです。つまり奈良盆地に、ある日突然、前方後円墳が出現した、というような状況なのです。

北部九州や吉備、出雲の例を上げるまでもなく、形や大きさはともかくとして古墳が生まれる前には、古墳との継続性を持つ大型弥生墳丘墓が存在しています。吉野ヶ里遺跡（佐賀県）の弥生墳丘墓、吉備の楯築遺跡（岡山県）弥生墳丘墓、出雲の西谷三号四隅突出型墳丘墓（島根県）などにその例を見ることができます。（資料12参照）。このような弥生墳丘墓がやがて、方墳・円墳・前方後方墳・前方後円墳などの古墳へと変遷していったとしても別段の違和感はありません。ところが、古墳文化発祥の地とされる奈良盆地には、このような大型弥生墳丘墓が見つかっていないのです。吉野ヶ里遺跡に匹敵する規模を持つとされている大規模環濠集落の「唐古・鍵遺跡」（磯城郡田原本町）にも、また、弥生末期から古墳時代初期にかけての巨大遺跡で箸墓古墳が鎮座し、最古級の古墳が集中していて卑弥呼の都が置かれていたのではないかとの説さえある「纏向遺跡」にも、大型弥生墳丘墓は見つかっていません。極端な言い方をすると、奈良盆地で生まれたとされる古墳文化は、奈良盆地の弥生文化が発展して生まれた、とは言い難いほどその間に継続性が見あたらないと考えざるを得ないのです。

古墳文化発祥の地とされている奈良盆地に、弥生時代の豪族やその一族を葬ったはずの大型弥生墳丘墓が見あたらないということは、考えようによっては弥生時代の奈良盆地では、集落の指導者や支配階級の地位は弥生後期に至っても大型墳丘墓を造営し葬られるほどの高い権威も大きな権力もともなっていないのではないかと思えてくるのです。言い換えれば奈良盆地は、弥生文化発展の過程において北部九州や吉備・出雲地方、大阪湾・河内湖周辺に比し、その地理的条件からも後進地域ではなかったか、とさえ考えられるのです。

ある日突然、奈良盆地に前方後円墳が現れたというような状況、すなわち奈良盆地の弥生文化との継続性があまり見られない前方後円墳の突然の出現は、それが盆地外から持ち込まれたものではないか、と考えることによって理解できるのではないのでしょうか。さらに、古墳を飾る円筒埴輪の起源が、弥生後期の吉備に現れた特殊器台形土器にあるとすれば、その特殊器台形土器や特殊器台形埴輪とともに前方後円墳

も吉備から持ち込まれたものではないだろうか、と考えられなくもありません。もし、吉備の弥生墳丘墓に前方後円墳の起源的な要素があれば、前方後円墳も吉備から伝えられたものではないか、という可能性が出てくることになります。

吉備の弥生墳丘墓の中には、墓道ではないかと思われる長方形の突出部のついたものがあります。楯築弥生墳丘墓や鯉喰神社弥生墳丘墓などです（ともに岡山県倉敷市）。吉備だけではなく、播磨（兵庫県南部）の加古川市からも西條五二号弥生墳丘墓、養久山五号弥生墳丘墓にも突出部の設けられていることがわかっています。埋葬主体のある墳丘よりも低くつくられているこれら長方形の細長い突出部は、被葬者の祭祀を行う際に墳丘頂部へ必要な道具を運び、そこで行われる祭祀に参加する人々が通る墓道としてつくられたのではないかと考えられています。

楯築弥生墳丘墓は円形墳丘の南北に突出部がつくられており、突出部も合わせると全長約八〇センチになります。この長方形の墓道が前方後円墳の前方部になった可能性が大きく、前方後円墳の起源をなしたのではないかと考えられます。

現在、奈良盆地で最古型式とされている前方後円墳には、ある種の特徴のあることが近藤義郎氏（岡山大学名誉教授）などによって指摘されています。（資料13参照）

その一つは、前方部・後円部ともに傾斜がきつくて容易に登れないようにつくられているということです。後円部頂上に石室を造るための石材や、祭祀に必要な多数の埴輪など大きな重い荷物を持って登るにはかなり困難な急傾斜になっています。荷物を持っていなくても墳丘頂上部へたどり着くのがかなり難儀なことは、メスリ山古墳（奈良県桜井市）や室大墓宮山古墳（同御所市）などの後円部頂上へ登ってみれば実感することができます。今でこそ墳丘は草木が生い茂っていますからその枝や幹などをつかみながら何とか頂上へたどり着けますが、一面葺石で覆われた築造当時の墳丘に登るのは大変な苦勞が要ると思われます。そこでまず、一段低い前方部頂上へ登り、それから後円部を目指したのではないかと考えられます。多くの前方後円墳では前方部左右の二隅は、その角度や長さ、つまり傾斜の緩急に違いが設けられているそうですから、どちらかの緩い隅角から前方部頂上へ登り降りしたのではないのでしょうか。

その二は、前方部と後円部の接合部中央に、後円部頂上へ向けて「（後円部）隆起斜道」と呼ばれている傾斜の緩い斜道が付けられているということです。後円部頂上に墓壙・石室をつくったり、埴輪や祭祀用の大きな重い荷物を運び上げたり、あるいは葬送の列のために、斜道につながる後円部墳丘の一部を掘削して頂上へ達するようにした「掘削墓道」も、「隆起斜道」の延長と考えられています。

このような特徴、墳丘の傾斜が急で、後円部隆起斜道を持った奈良盆地の最古型式前方後円墳として箸墓古墳、西殿塚古墳、中山大塚古墳などがあり、そのほか橿原市の弁天塚古墳、纏向遺跡のホケノ山古墳・東田大塚古墳・矢塚古墳・纏向石塚古墳・勝山古墳なども同じ特徴を備えていた可能性の大きいことが指摘されています。これら奈良盆地の最古型式前方後円墳を遡ると見られる吉備の宮山古墳（岡山県総社市：宮山型特殊器台出土）や矢藤治山古墳（岡山市花尻：矢藤治山型特殊器台出土）などもこれらの特徴を備えているところから見ても、また、先述した長方形の墓道（突出部）も合わせ考えて、円筒埴輪の起源が吉備にあったのと同様、前方後円墳の起源も吉備にあった可能性が極めて大きいと考えられるのです。

前方後円墳やその墳丘を飾る円筒埴輪の起源（突出部付弥生墳丘墓や特殊器台形土器・埴輪）と奈良盆地の弥生文化との継続性が見あたらず、吉備にその起源があるのではないかと考えるとき、それらがいつ、どのようにして奈良盆地に入ってきたのか、ということが問題になるのは言うまでもありません。ことは古墳文化の始まりに関する大問題です。吉備の弥生文化を奈良盆地に導入する扉を開いたのが七代孝霊ではないかと考えられるのです。葛城地域南部を掌握した神武の子孫が、奈良盆地中央進出の足がかりをつくり、奈良盆地と河内・瀬戸内海を結ぶ大和川の水運をも掌握したと思われるのは、「盆地中央への進出」の項で述べたように七代孝霊に至ってからです。神武の次ぎに「吉備」の地名が出てくるのは孝霊に至ってからで、その皇子二人が吉備に赴いています。このことは、神武以来途絶えていた吉備との交流が再び始まったことを意味しており、同時に吉備の文化が奈良盆地に入ってくるきっかけとなったことを意味

しています。百数十年前、自分たちの祖先である神武が、奈良盆地に侵入するにあたって吉備の支援を受けた、という記憶が残っていて、大和川の水運を掌握して河内・瀬戸内海への門戸が開けたのをきっかけに吉備との直接交流をはかったのではないのでしょうか。派遣された二人の皇子が協力して吉備を言向け和したというのも、二人の皇子が吉備に土着したことをそのように表現したものと考えられます。

従来から大和川流域に勢力を維持していた葛城北部や磯城の在地豪族よりも、祖先が支援を受けたという記憶を持っている神武の子孫の方が、吉備の文化を受容し導入するという面では抵抗が少なく容易だったと思われます。また、孝霊の身近には、「神武東征」に随伴して奈良盆地に侵入した吉備出身者の子孫も居たと思われますから、むしろ積極的に吉備の文化を導入し受け容れたのかも知れません。あるいはまた、瀬戸内海の覇権を握り、奈良盆地よりも進んだ文化を持つ吉備との交流を誇示することによって、奈良盆地平定を容易ならしめようとしたのかも知れません。いずれにしても吉備の文化を受け容れることは、奈良盆地平定にあたっての有効な政策の一つになり得たであろうと考えられます。弥生後期とされる吉備の土器が奈良盆地の弥生遺跡から出土していますが、これもそのような事情を反映しているものと見ることができます。

吉備との交流が再開されたことによって、その文化が弥生時代の奈良盆地に流入し、受容されるようになったのが七代孝霊のころからだとする、吉備の突出部付弥生墳丘墓の影響を受けた前方後円墳が奈良盆地に出現するのも、さほど先のことではないでしょう。古事記によると、孝霊の妃の一人にかすかのちはやまわかひめ春日千速真若比売がいます。日本書紀の本文ではしきのあがためし磯城県主大目の娘が正妃にされていますが、一書によれば奈良盆地北部の春日地域出身と思われるかすかのちはやまわかひめ春日千乳早山香媛が正妃にされています。奈良盆地中央部に初めて進出してきた孝霊は早くも盆地北部進出を睨んでその地域の豪族、春日氏との接触を始めたのでしょう。

八代孝元の陵墓は、明日香村とゆら豊浦つるぎいけの東側になる橿原市石川町の劔池に突き出た丘の上に治定されており、宮居もそこからさほど遠くない橿原市大軽町に比定されています。七代孝霊以後、陵墓も宮居も葛城地域から離れたところに遷されています。奈良盆地北部への進出を視野に入れた場合、葛城地域は東南かたよに偏りすぎているのです。

孝元の正妃は、古事記・日本書紀ともにほづみのおみ穂積臣の祖の妹ウツシコメノミコトとなっていますが、九代開化かいがの正妃にもなって十代崇神すじんを生んだ別の妃イカガシコメノミコトは、古事記では穂積臣の祖ウツシコオノミコトの娘、日本書紀では物部ものべ氏の遠祖大綜おおへそぎ杵の娘となっていて出自が異なっているように見えます。ところが、穂積氏も物部氏もにぎはやひのみこと邇藝速日命（饒速日命＝日本書紀では、神武が奈良盆地に侵入したとき、長髓彦を裏切って殺したとされている）を祖先とする同祖の氏で、両氏の祖とも同じ支配領域から出たものと考えられるのです。物部氏の根拠地は、石上いそのかみ神宮を中心とする旧山辺郡やまべの布留ふる地域周辺とされており、穂積も山辺郡ゆかりの地名であるところから見て、物部氏と同族である穂積氏もこの地域の有力豪族であったと思われます。旧山辺郡の布留地域は孝霊が宮居を定めた「黒田」の地からさらに北東にあり、奈良盆地北部へ進出する途中にあたりると同時に、「磯城」の北にあたります。この地の有力豪族と婚姻関係を通じて緊密な関係を築くことは、奈良盆地全域の平定を目指す神武の子孫にとって、欠かすことのできない最重要戦略の一つだったでしょう。

さらに孝元は、河内出身のハニヤスヒメを妃の一人に迎えています。二人の間に生まれたタケハニヤスビコノミコトが十代崇神の時に騒動を起こしますが、孝元は河内の有力者と婚姻関係を結んで、父孝霊が開いた瀬戸内海との交流路やぐを扼す河内地域の安全確保につとめたものと思われます。このことは、神武の子孫が盆地外の勢力からも認められるほど成長してきたことを物語っています。大阪府東大阪市加納二丁目（旧盾津たてつ）にハニヤスヒメを祭神とする宇波うわ神社が鎮座しています。



## 奈良盆地の平定

九代開化は、父孝元の妃の一人、イカガシコメノミコトを正妃として十代崇神を生ませています。イカガシコメノミコトは前述したように、古事記では穂積臣ほづみのおみの娘、日本書紀では物部氏の遠祖の娘もののべとしており、ともに邇藝速日命にぎはやひのみこと（饒速日命）を祖先とする同祖の氏族で、旧山辺郡の布留地域を中心に勢力を持つ有力在地豪族です。その支配領域の位置からしてニギハヤヒ系豪族の協力なしには奈良盆地北部への進出は難しく、この豪族勢力との緊密な連繋があってこそ、初めて盆地北部への進出が可能となります。

父の妃を自分の正妃にしたのは開化が初めてですが、古事記では神武の子多藝至美美命たぎしみのみことが父の正妃であった伊須氣余理比売いすけよりひめ（三輪の大物主神の娘）を父の死後、自分の妃にしています。父の妃をその死後、自分の妃にしたのはこの二人しかいませんから、これは例外中の例外と言うべきで、弥生時代の昔でも倫理に合ったことではなかったようです。古事記が、こんな倫理に適合するとは思えない話をわざわざ載せているということは、伝承に基づいて記述したとしか思えず、後世の作り話ではないことを示唆しています。

正妃以外の妃は、古事記・日本書紀ともに、丹波たには（京都府西部）の豪族と、添地域そお（天理市北部から奈良市西南部）の豪族、和珥臣わにのおみ（丸邇臣わにのおみ）の祖から迎えています（古事記ではほかに、葛城の垂水宿禰たるみのすくねの娘を上げている）。

正妃でないにしても、奈良盆地外から妃を迎えたのは前代孝元が河内から迎えたハニヤスヒメが最初です。孝元のところになって盆地外勢力からも、神武の子孫たちの実力がようやく認められるようになったことを意味しており、奈良盆地平定の経緯がここにも現れています。開化の妃の一人に丹波地方（京都府西部）出身の娘がいるということは、奈良盆地の主となった神武の子孫が、やがて訪れるであろう盆地外の一大勢力との決戦に備えて、遠く北方に視野を向けていたのでしょう。

和珥氏は天理市の北部から奈良市にかけての添地域そおの豪族とされています。盆地北部の有力豪族です。婚姻関係を結ぶことは、それによって緊密な協力関係を築き、やがて勢力下に収めようとする神武の子孫たちの常套手段であり、開化の時代に遂に、盆地北部もその勢力下に入ったと見てよいでしょう。それを端的に現しているのが宮居と陵墓の所在地です。天理市北部の櫛本町いちのもと（名阪国道の北側）に和珥氏を祀る和爾神社わにがあります。

欠史八代最後の九代開化にいたって、宮居と陵墓が初めて奈良盆地北部に遷っています。宮居も陵墓も春日の「伊邪河いざかわ（率川いざかわ）」のあたりに築いたとされています。奈良市の旧市街地、近鉄奈良駅手前の大通りを南へ少し行くと右側に率川神社があり、今は暗渠になったり埋め立てられたりして確認できませんが、率川が西へ向かって流れています。この春日山西麓の丘陵地帯には、平城京造営時に削平されて姿を消したと思われる古墳が数基あったことが確認されています。

文久三年（一八六三）の改修時や明治八年の治定時には、率川あたりには天皇陵に比定すべき古墳が、念仏寺山古墳以外に見あらず、この古墳が開化天皇陵とされました。九代開化は、現存の確認されている前方後円墳が陵墓に治定された最初の天皇です。

念仏寺山古墳は、改修時に出土した埴輪の破片などから五世紀に築造されたものとされており、開化の時代よりもかなり後のもののようです。しかし、古事記・日本書紀の記載に従う限り、春日の率川、すなわち現在の率川や念仏寺山古墳のあたりに開化の宮居と陵墓があったことを否定することはできません。また、開化のころから桜井市の纏向地域まきむくに最古級の前方後円墳が築かれ始めたと思われるところから、開化の陵墓が前方後円墳であってもおかしくないのです。吉備の文化である突出部付弥生墳丘墓や特殊器台形土器、特殊器台形埴輪（都月型円筒埴輪）が形を変えながらも奈良盆地に出現し始めたのが開化のころではないかと考えられます。

神武の子孫たちが奈良盆地を平定したあと、盆地中央の有力豪族、磯城しきのあがたぬし県主はどうなったのでしょうか。その答えは十代崇神すじんが出しています。

十代崇神は、有力在地豪族である磯城県主の根拠地とも言うべき三輪山の西麓に宮居を定めました。桜井市金屋付近に比定されている「磯城の瑞籬宮（師木の水垣宮）」です。磯城県主を完全に制圧するか逼塞させなければ、その支配領域の中心地と思われるところに宮居を置くことなどできるはずがありません。そればかりではありません。三輪山は、縄文の昔から先祖代々奈良盆地に生活を営んできた人々にとって、もっとも関わりの深い信仰（アニミズム）の対象であり、神の住む神聖な山です。その神聖な山の麓に宮居を定めたということは、神武の子孫が磯城県主の支配領域を完全に掌握したことにより、奈良盆地の新しい支配者になったのだ、と内外に宣言したことになります。

数世紀の永きにわたって磯城県主の支配領域であった磯城地域の中心に宮居を定めた崇神は、盆地全域を支配する新しい大王の誕生を高らかに謳い上げ、神武子孫による永遠の支配を宣言する一大イベントとして、あの巨大な箸墓古墳を築いたのではないのでしょうか。箸墓古墳やその周辺から特殊器台形土器や特殊器台形埴輪の破片が出土しており、箸墓古墳を築造した当時の支配階級が、吉備文化の強い影響を受けていたことを物語っています。箸墓古墳と同じころか、またはその直後に造られたと思われる中山大塚古墳や西殿塚古墳などからも出土していますから、吉備文化が奈良盆地に流入していたことは間違いありません。

箸墓古墳周辺一帯の、弥生時代の終わりから古墳時代初めにかけての遺跡とされている纏向遺跡からは、日本各地で作られた土器類の破片が数多く出土しています。このことから纏向遺跡には倭国の首都があったのではないかとする説が唱えられています。そうだとすると、纏向遺跡は時期的にも卑弥呼の都と結びつくことになります。しかし、纏向遺跡からは、中国や朝鮮との交流を示す遺物がほとんど出土しないばかりか、交流の中間基地として重要な位置にある北部九州とのつながりを示すものもほとんどありません。大分県あたりから出土する土器によく似た小さな破片が一つだけ橿原考古学博物館に展示されていますが、これをもって北部九州との強いつながりを示すものとはとても言えないでしょう。纏向遺跡が卑弥呼の都ではないかと言うためには、纏向遺跡が中国や朝鮮との交流の中心地だったことになりますから、それを示すものが数多く出土しなければなりません。しかし、そのような出土遺物はほとんどないのです。中国や朝鮮半島との交流を示す出土遺物はもちろん、北部九州に集中しています。大陸との交流を示す奈良盆地全体の出土遺物は、北部九州の一遺跡の出土遺物にも遠く及ばない状態ですから、纏向遺跡に倭国の首都や卑弥呼の都があったなどと、とても考えられませんし、弥生時代にこの地に北部九州にまで勢力を広げるほどの一大勢力生まれたとはとても思えないのです。纏向遺跡は奈良盆地における各地との交易の中心地、それも市場的なものではなかったか、と考えられるのです。纏向遺跡は、やはり吉備文化の影響を強く受けた前方後円墳を中心とする遺跡なのです。

ちなみに、北部九州の弥生王墓を代表する四王墓（三雲南小路・須玖岡本・井原鎚溝・平原）だけでも合計一五〇余面もの中国鏡が出土しているのに、奈良盆地の弥生遺跡からは中国鏡が出土したという話を聞きません。この違いが何を意味するか、既におわかりいただけたことと思います。

## 4、欠史八代の理由

以上、后妃の出自、宮居・陵墓の所在地（比定地）などから、二代綏靖から九代開化までの、いわゆる欠史八代の間は奈良盆地平定の時代であり、その伝承も語り継がれてきたと考えられますが、それなら何故、古事記・日本書紀はその伝承を各天皇の説話として記述しなかったのでしょうか。

何故、後世に欠史八代などと呼ばれ、架空の天皇群とされて、今日の定説・常識である「記紀造作説」の根拠の一つにされてしまうような状態のままにしておいたのでしょうか。完成した古事記・日本書紀を読んだ人たち、当時の元明・元正・聖武などの天皇をはじめ朝廷を構成する皇族や貴族たちは、この説話のない八人の天皇群に不審を抱かなかったのでしょうか。

古事記・日本書紀が、日本列島を支配する唯一正統な血筋は神武天皇の子孫である、という大義名分によって書かれていることは今さら言うまでもありません。さらに遡れば日本列島は天照大神の血筋を引く

者が支配しなければならず、神武がその正統な後継者だと主張しているのです。しかも日本列島は、天照大神の意思により神武の時にはすでにその支配下にあったという大義名分の上に立っています。古事記は、神武がこの大義名分に逆らう者を退治して『畝傍の白檮原宮に坐しまして天の下治らしめしき』としています。奈良盆地はおろか、天の下を治めているのです。ところが実際は、神武の奈良盆地侵入は「神武東征」ではなく「神武東侵」であって、畝傍山周辺を中心とする「磐余」と呼ばれた地域の主になったに過ぎませんでした。奈良盆地の一隅を領域とする一豪族、それも地位の不安定な外来豪族になったに過ぎません。そしてこのような事情を物語る伝承も語り継がれてきたと思われませんが、その伝承をそのまま記述すると、天照大神の意思による「神武東征」と「天の下治らしめしき」いう大義名分が成り立たなくなります。二代綏靖以降の奈良盆地平定の経過は一豪族の成長過程に過ぎず、その過程をそのまま記述することは、近畿天皇家こそが「天の下」を支配する唯一無比の血統を継いでいるのだ、という大義名分を主張する根拠を失ってしまうこととなります。近畿天皇家こそが日本列島を支配する唯一無比の正統な血筋であることを主張するために、奈良盆地平定に奔走した二代から九代までの伝承を説話として敢えて記述しない道を選んだのでしょう。

神武の子孫が奈良盆地の外へ進出し、支配領域を拡大していったのは十代崇神に至ってからです。奈良盆地全域を掌握する一大勢力に成長した神武の子孫は、さらに近畿の覇者へと変貌を遂げます。もはや誰はばか憚ることなく説話を記述し、大義名分を主張できる地位を獲得したのです。

奈良盆地平定の説話らしきものが全くないわけではありません。神武即位前紀の己未年春二月の条に、そうのあがた はたのおかのみさき わ に層富の波哆丘岬や和珥の坂下などの盆地北部や、ほそみ ながらのおかのみさき たかおほりのむら臍見の長柄丘岬や高尾張邑など葛城地域での戦いが載っています。この通りだとすると、「神武東侵」時に奈良盆地の大半が平定されていたことになってしましますが、これらの説話部分は、神武の子孫たちの奈良盆地平定説話の一部が神武のところにはめ込まれたものではないかと思われまます。神武紀の二年春二月に神武が行った論功行賞を見ると、「神武東侵」に随伴した重臣たちは、畝傍山を中心とした今の橿原市内に土地を給わっており、盆地各地の要衝とおぼしきところに配置された気配がありません。このことから神武が奈良盆地全域を掌握したとは思えないのです。

古事記・日本書紀を読んだ天皇や皇族・貴族たちは、欠史八代に不審を抱かなかったのでしょうか。不審を抱いて訂正をした形跡が全く見受けられないところを見ると、誰も不審を抱かなかった、と考えざるを得ません。ということは、彼らは欠史八代についての事情を初めから知っていた、ということになります。これらの事情に十分通じていたからこそ、後世に欠史八代などと称されるような説話のない天皇群の存在に、あえて異議を唱えなかったのでしょう。

## 5、宮居・陵墓の比定地について

現在比定あるいは治定されている場所に、実際にその天皇の宮居や陵墓があったかどうかについては、もちろん確認されているものは一つもありません。宮居はもちろんのこと、陵墓についても比定や治定の前後に陵墓らしき形を整えただけで、そこに墓らしきものがあつたかどうかさえ不明なものが多いのは周知の通りです。中には弥生時代であるにもかかわらず、前方後円墳や円墳の形に見えるように垣を巡らしたり、整形したものもいくつかあります。

現在の神武天皇陵（ミサンザイ古墳）などは、明治三十一年の造作以前にあつた二つの小丘を繋ぎ合わせて土盛りし、八角形に造成されたもので、もちろん埋葬施設などはありません。二代綏靖天皇陵（塚山）も、江戸時代の元禄十年（一六九七）から文久三年（一八六三）までは公式には神武天皇陵に治定されていましたが、文久三年に神武陵が「ミサンザイ（神武田）」に治定替えされるにともなって綏靖陵に治定替えされたもので、「塚山」と呼ばれていた円墳状の小丘です。もとは綏靖陵ではないかとされていた近くにある前方後円墳の「スイセン塚古墳」を治定しなかつたのは、古墳の築造時期を推定する方法が未発達であつた江戸末期において、偶然とは言え賢明であつたと言うべきでしょう。三代安寧・四代懿徳天皇陵も

「アネイ山」「マナゴ山」などの地名・伝承をもとに治定されたもので、もともと古墳らしきものが存在した形跡はありません。橿原神宮外苑内の池田神社社地にある「イトクの森古墳」と呼ばれている前方後円墳が懿徳陵に治定されなかったのも古くからの地名や伝承の場所に合わなかったからです。

五代孝昭・六代孝安・七代孝霊の三天皇陵は葛城地域にあります。欠史八代中、陵墓が葛城地域にあるのはこの三天皇だけで、三陵とも眼下に広がる田園や人家を見渡すことのできる見晴らしのよい丘の上にあります。古事記に「掖上<sup>わきがみ</sup>の博多山の上」「玉手の岡の上」「片岡の馬坂の上」など「山・岡・坂」の上となっているので見晴らしのよい丘の上を治定したのではないかと思われそうですが、「上」は本来「辺」であって、上下の上ではなく「ほとり・あたり」意味する言葉として使われることが多いところから、丘の上にとられる必要はないと考えられます。そこに丘があったので、文字どおり「上」の場所を選んだ方が見映えもするし、陵墓にふさわしい場所と映ったのかも知れません。孝霊天皇陵は「御廟所<sup>ごびょうじょ</sup>」と呼ばれていた丘陵の上であり、尾根上に小古墳があったと言われていますが、現在は前方後円墳の形に石の柵が巡らされています。

次の八代孝元天皇陵も葛城地域ではありませんが、見晴らしのよい丘の上にあります。平成十二年の夏に発掘調査されて推古天皇と竹田皇子の合葬墓ではないかと騒がれた植山古墳から徒歩十分ぐらいのところにあります。劔池<sup>つるぎいけ</sup>（石川池）に突きだした小丘の上に「中山塚」と呼ばれる三基の小古墳があったと江戸時代の記録に残っており、そのうちの一基が前方後円墳だと記されています。もちろん、古墳の築造時期と孝元の時代が合うわけがありません。古墳があったから治定されたのではなく、「劔池」の伝承に基づいて治定されたものです。

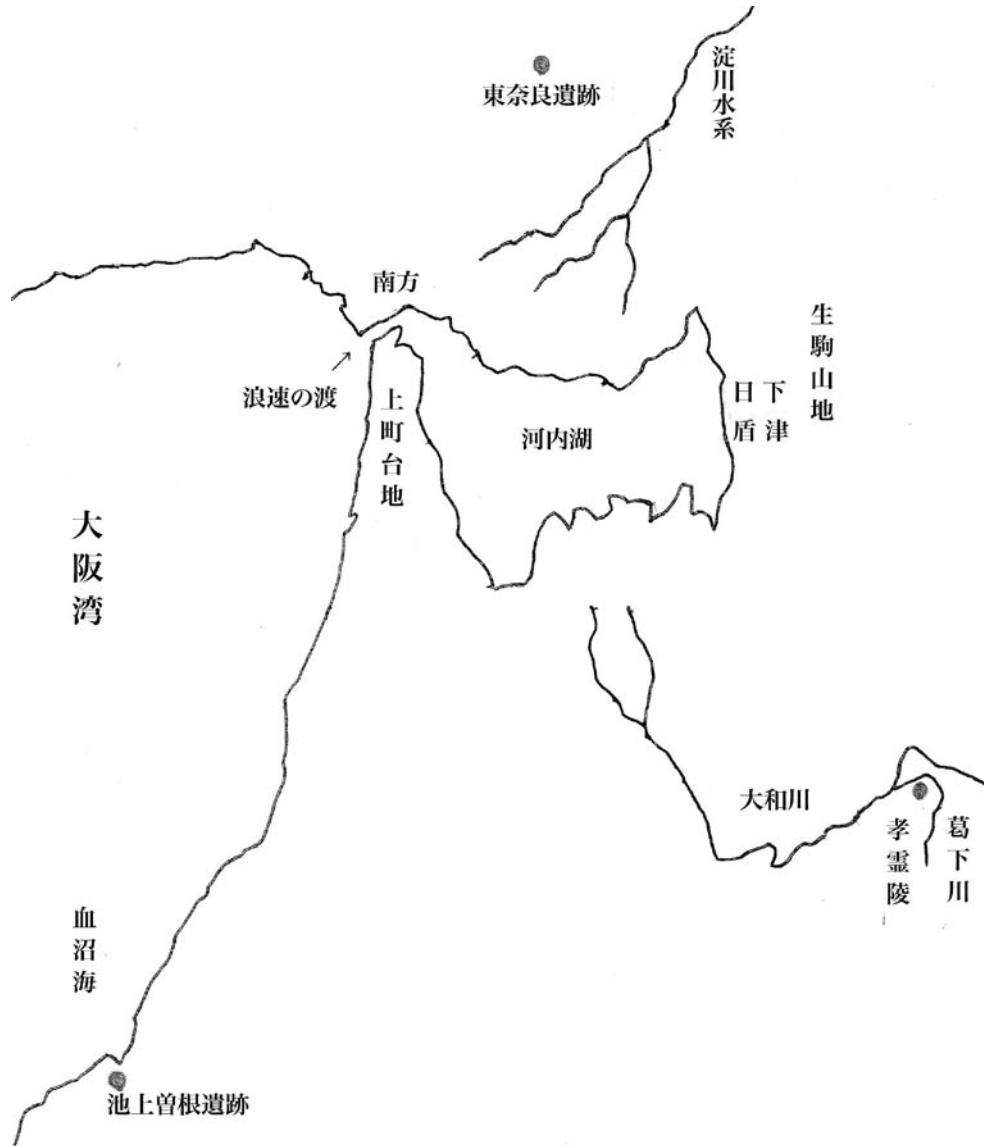
九代開化天皇は、八代までの天皇と違って奈良盆地北部に初めて葬られた天皇であり、また、それとわかる前方後円墳が陵墓として治定された初めての天皇でもあります。陵墓とされる「念仏寺山古墳」の呼称は、江戸時代の寛政年間に建立された念仏寺の境内に取り込まれ、後円部が墓地となっていたところから生まれたもので、弘法大師を祀るお堂のあったところから「弘法山」、古くは油阪村の坂の上にあるところから「坂の上山」「坂上古墳」とも呼ばれていました。大阪夏の陣の際に徳川家康が逃げ込んだと伝えられる西照寺が前方部の正面にあります。「春日の率川（伊邪河）<sup>いざかわ いざかわ</sup>」や「坂の上」などの地名と伝承などから明治八年に治定されました。後円部中央に高さ三丈ほどの円丘状の高まりがあり、元禄十一年（一六九八）に竹柵で方形に囲み、開化陵と掲示していました。改修時に出土した埴輪片などから五世紀代の築造とされていますから、開化の時代とはかなり離れた前方後円墳だということになります。

欠史八代に限らず古代の天皇陵については、古事記・日本書紀あるいは延喜諸陵式<sup>えんぎしよりょうしき</sup>の記述、その地に残る古い地名や伝承・伝説などによるほか推測のしようがないのが現状です。ましてや天皇陵はもちろんのこと、それらしき古墳も多くが陵墓参考地として宮内庁の管理下におかれており、発掘調査はおろか立ち入ることすら許されませんから、被葬者の特定などできるわけがありません。

現在治定されている古墳に、その天皇が葬られているかどうか、確認することは不可能であり、例えば発掘調査が許されたとしても墓誌でも見つからない限り確認するのは困難です。しかし、確認するのが極めて困難であるならば、せめて比定されたあたりに墓が造られていたらしいことが推測できればよしとしなければなりません。そしてそれは、古事記・日本書紀・延喜諸陵式などの記述やその地に残る伝承・伝説・地名などからある程度推測することが可能です。神武や欠史八代の天皇陵治定の経緯を述べるのが目的ではないので省略しますが、陵墓を治定するにあたっては、古事記・日本書紀・延喜諸陵式の記述のほかその地にかかわる古文書・伝承・伝説・地名などが極めて重視されていて、例えばその近くに天皇陵に相応しい前方後円墳があっても上記に適合しないものは選ばれていないのです。欠史八代中、九代開化を除いて、天皇陵としてもっとも見映えのする前方後円墳が選ばれていないのを見ても、陵墓治定の姿勢を知ることができるでしょう。現在の天皇陵治定地（その周辺も含めて）は、古事記・日本書紀の記述する陵墓所在地が間違っている、というはっきりした証拠がない限りこれを否定する根拠は何もありません。

# 資料編

## 資料1 弥生中期（約2000年前）ごろの大阪平野



大阪歴史博物館

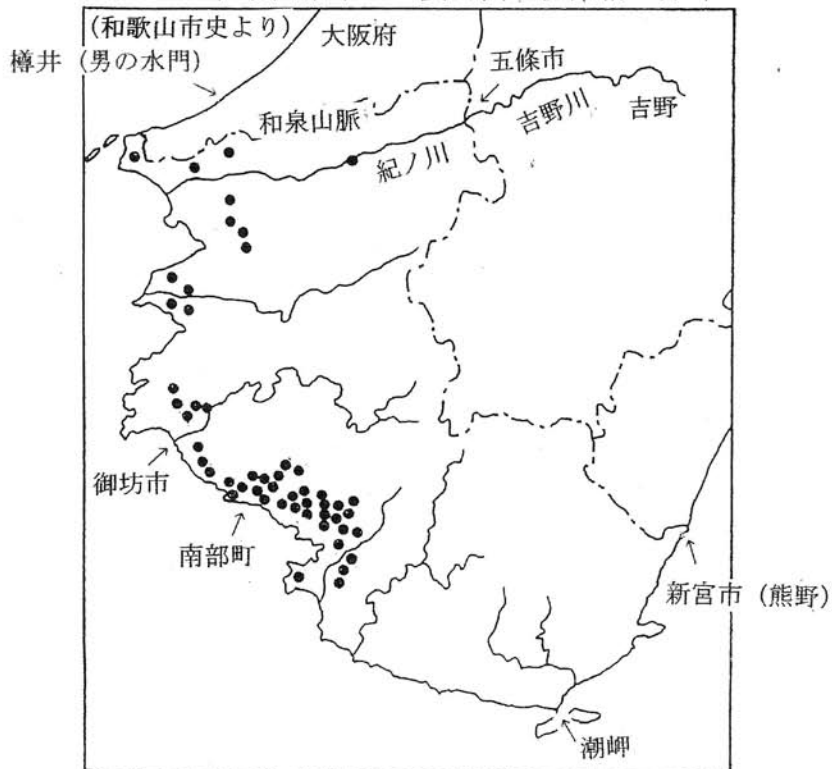
平成13度 特別展「大河内展」図録より作成

【弥生時代の和歌山平野概略図（和歌山市史より筆者作成）】



A 橋谷銅鐸出土地 B 宇田森銅鐸出土地 C 紀伊砂山銅鐸出土地  
 D 有本船渡銅鐸出土地 E 太田黒田銅鐸出土地 F 吉里銅鐸出土地

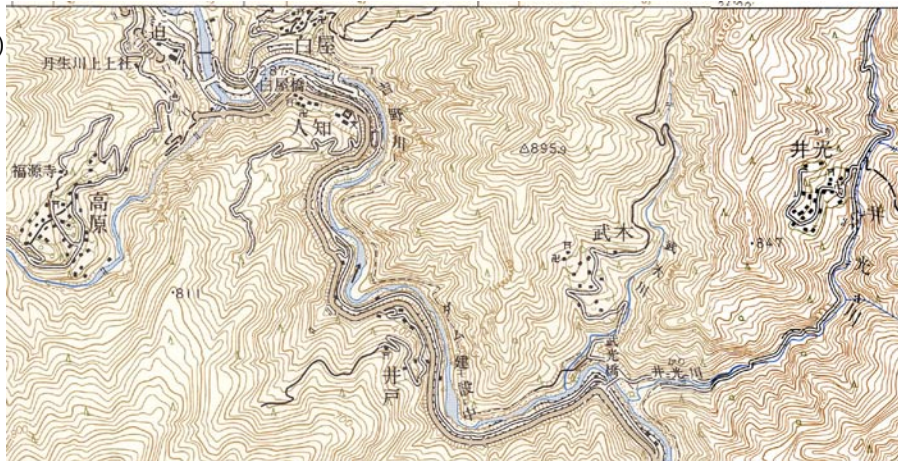
資料2② 和歌山県下の主要な高地性集落の分布





### 資料3 吉野川上流 (川上村)

(宮の平遺跡)



← 井光神社

「国土地理院発行の5万分の1地形図 山上ヶ岳・大台ヶ原地図」 合成表示

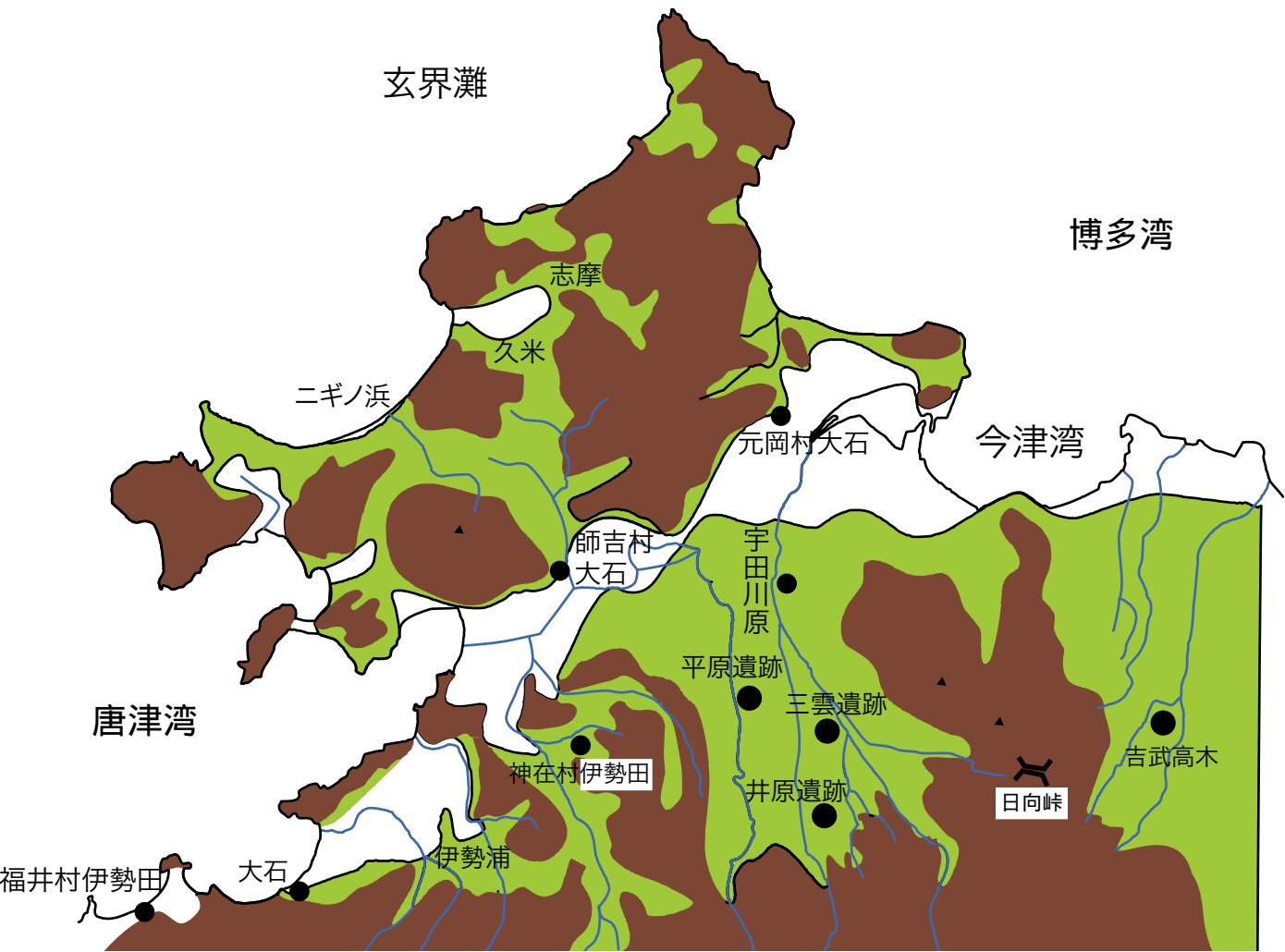
### 資料4 宇賀志・佐倉周辺



国土地理院発行  
2万5千分の1地形図  
(古市場)

芳野川  
桜実神社  
宇賀神社は加筆  
並びに強調線引き  
宇賀志・佐倉  
は強調線引き

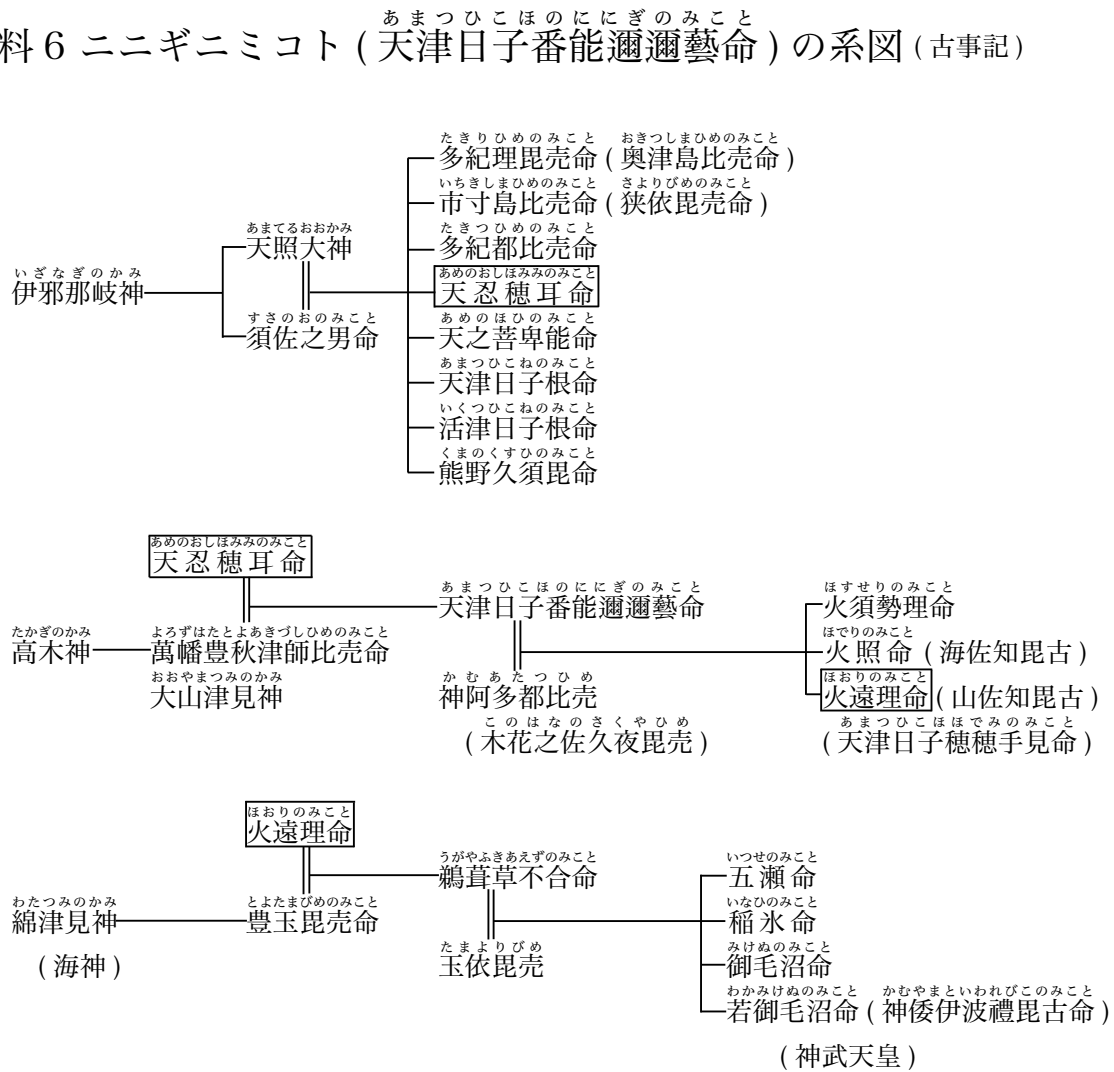
資料5 糸島半島周辺の地名



古田武彦講演会（平成10年6月28日）資料より作成



資料6 ニニギニミコト (天津日子番能邇邇藝命) の系図 (古事記)



資料7 欠史八代の后妃、宮居、陵墓

1, 后妃

① 神武

古事記

あひらひめ 阿比良比売

\* 伊須気余理比売

あまのほしのみこと 阿多(日向)の小埼君の妹。

みしまみぞくい おおものぬしのかみ 三島溝咋の孫娘、三輪の大物主神の娘。

日本書紀

あひらつひめ 吾平津媛

\* 媛蹈鞞五十鈴媛命

あとのむら 日向国の吾田邑

みしまのみぞくひみのかみ ことしろぬしのかみ 三嶋溝櫛耳神の孫娘、事代主神の娘。

② 綏靖

古事記

かわまたびめ 河俣毘売

\* 河俣毘売

しぎのあがたぬし おや 師木県主の祖。

日本書紀

いすよりひめ 五十鈴依媛

\* 五十鈴依媛 事代主神の娘で、母媛蹈鞞五十鈴媛の妹。綏靖の姨にあたる。

しぎのあがたぬし かわまたひめ おおひもろ (磯城県主の娘川派媛。春日県主大日諸の娘糸織媛)

③安寧

古事記

\* 阿久斗比売 綏靖の妃河俣毘売の兄、師木県主波延の娘。

日本書紀

\* 淳名底仲比売命 事代主神の孫鴨王の娘。亦の名を淳名襲媛。  
(磯城県主葉江の娘川津媛。大間宿禰の娘糸井媛)

④懿徳

古事記

\* 賦登麻和訶比売命 師木県主の祖。亦の名を飯日比売命。

日本書紀

\* 天豊津媛命 安寧の子息石耳命の娘で懿徳の姪。  
(磯城県主葉江の男弟猪手の娘泉媛。磯城県主太真稚彦の娘飯日媛)

⑤孝昭

古事記

\* 余曾多本毘売命 尾張連の祖、奥津余曾の妹。

日本書紀

\* 世襲足媛 尾張連の遠祖瀛津世襲の妹。  
(磯城県主葉江の娘淳名城津媛。倭国の豊秋狭太媛の娘大井媛)

⑥孝安

古事記

\* 姪忍鹿比売命 孝安の兄天押帯日子命の娘？

日本書紀

\* 姪押媛 孝安の兄天足彦国押人命の娘？  
(磯城県主葉江の娘長媛。十市県主五十坂彦の娘)

⑦孝霊

古事記

\* 細比売命 十市県主の祖、大目の娘。

千千速真若比売 春日の、とあるだけで出自不詳。

意富夜麻登玖邇阿禮比売命 出自不詳。蠅伊呂泥の別名。

蠅伊呂杼 阿禮比売の妹。

日本書紀

\* 細媛命 磯城県主大目の娘。

(春日千乳早山香媛。十市県主等が祖の娘真舌媛)

倭国香媛 十市県主系？ 亦の名は紐某姉。

紐某弟 倭国香媛の妹。

## ⑧孝元

### 古事記

うつしこめのみこと  
\* 内色許売命  
いかがしこめのみこと  
伊迦賀色許売命  
はにやすびめ  
波邇夜須毘売

ほづみのおみ うつしこのおのみこと  
穂積臣等の祖、内色許男命の妹。

内色許男命の娘。孝元の子開化の妃にもなり、崇神を生んでいる。  
河内の青玉の娘。

### 日本書紀

うつしこめのみこと  
\* 鬱色謎命  
いかがしこめのみこと  
伊香色謎命  
はにやすびめ  
埴安媛

うつしこのおのみこと  
穂積臣の遠祖鬱色雄命の妹。  
おほへそぎ  
物部氏の遠祖大綜杵の娘。  
かふちのあおたまかけ  
河内青玉繫の娘。

## ⑨開化

### 古事記

たかのひめ  
竹野比売  
いかがしこめのみこと  
\* 伊迦賀色許売命  
おけつひめのみこと  
意祁都比売命  
わしひめ  
鸚比売

たには ゆごり  
巨波の大梟主、由碁理の娘。

ままは  
開化の庶母。父孝元の妃で、十代崇神を生む。  
わにのおみ ひこくにおけつのみこと  
丸邇臣の祖、日子国意祁都命の妹。  
たるみのすくね  
葛城の垂水宿禰の娘。

### 日本書紀

いかがしこめのみこと  
\* 伊香色謎命  
たにはたかのひめ  
丹波竹野媛  
ははつひめ  
姥津媛

ままも  
開化の庶母。父孝元の妃で、十代崇神を生む。

出自の記載無し。伊香色謎売命より先に妃になる。  
わにのおみ ははつのみこと  
和珥臣の遠祖、姥津命の妹。

## ⑩崇神

### 古事記

とおつあゆめまくはしひめ きのくにのみやつこ あらかはとべ  
遠津年魚目微比売 木国造、荒河刀辨の娘。  
おほあまひめ おはりのむらじ  
意富阿麻比売 尾張連の祖。  
みまつひめのみこと  
\* 御真津比売命 孝元の皇子で崇神の叔父、大毘古命の娘。

### 日本書紀

みまきひめ  
\* 御真城姫 孝元の皇子で崇神の叔父、大彦命の娘。  
とおつあゆめまくはしひめ あらかはとべ おほしあまのすくね やさかふるあまいろべ  
遠津年魚眼眼妙媛 紀伊国の荒河戸畔の娘。(大海宿禰の娘八坂振天某辺)  
おわりのおほしあまひめ  
尾張大海姫 出自不詳。葛城氏系か。

[註] \* 印は、次代天皇を生んだ后妃を示す。また、( )内は、一書に出てくる 后妃。

## 2, 宮居、陵墓

### 宮居

#### ①神武

古事記 畝火山の白檮原宮。  
日本書紀 檀原宮、畝傍山の東南の地。  
現比定地 檀原市の畝傍山の麓。

#### ②綏靖

古事記 葛城の高岡宮。  
日本書紀 葛城の高丘宮。  
現比定地 御所市森脇。

#### ③安寧

古事記 片鹽の浮穴宮。  
日本書紀 片塩の浮孔宮。  
現比定地 大和高田市三倉堂(葛下郡)。

#### ④懿徳

古事記 輕の境岡宮  
日本書紀 輕の曲峽宮  
現比定地 檀原市大輕町。

#### ⑤孝昭

古事記 葛城の掖上宮。  
日本書紀 掖上の池心宮。  
現比定地 御所市池之内。

#### ⑥孝安

古事記 葛城の室の秋津島宮。  
日本書紀 室の秋津嶋宮。  
現比定地 御所市室(葛上郡)

#### ⑦孝靈

古事記 黒田の廬戸宮。  
日本書紀 黒田の廬戸宮。  
現比定地 田原本町黒田(城下群黒田郷)。

#### ⑧孝元

古事記 輕の堺原宮。  
日本書紀 輕の境原宮。  
現比定地 檀原市大輕町。

### 陵墓

ミサンザイ古墳  
畝火山の北の方の白檮の尾の上。  
畝傍山東北陵。  
檀原市四条町(大字洞字ミサンザイ)。

#### 塚根山

衝田の岡。  
桃花鳥丘上陵。  
檀原市四条町(字田の坪)。

#### アネイ山

畝火山の美富登。  
畝傍山南御陰井上陵。  
檀原市吉田町(字西山)。

#### マナゴ山

畝火山の真名子谷。  
畝傍山南織沙谿上陵。  
檀原市池尻町カシ(字丸山)。

#### 天皇山

掖上の博多山の上。  
掖上博多山上陵。  
御所市三室字博多山。

玉手の岡の上。  
玉手丘上陵。  
御所市玉手字宮山。

#### 御廟所

片岡の馬坂の上。  
片丘馬坂陵。  
王寺町本町(大字王寺字小路口)。

#### 中山塚

劔池の中の岡の上。  
劔池嶋上陵。  
檀原市石川町劔池上。

⑨開化

古事記 春日の伊邪河宮。  
日本書紀 春日の率川宮。  
現比定地 奈良市(添上郡率川)。

念仏寺山古墳

伊邪河の坂の上。  
春日率川坂本陵。  
奈良市油坂町。

⑩崇神

古事記 師木の水垣宮。  
日本書紀 磯城の瑞籬宮。  
現比定地 桜井市金屋。

行燈山古墳  
山邊道の勾の岡の上。  
山辺道上陵。  
天理市柳本町(大字柳本字アンド)。

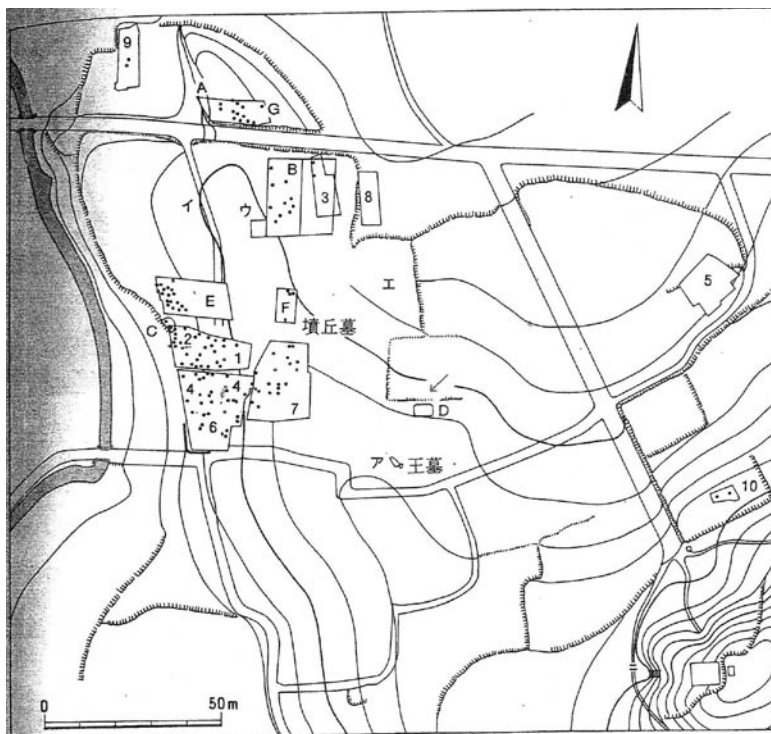
[註] 各天皇の陵墓欄上の地名は古くからの通称。( )内の地名は旧地名。

資料8 北部九州の主な弥生遺跡



北部九州の国々 (P 64) より筆者作成

資料9 須玖岡本遺跡「D」地点 (春日市史より)



ドットは甕棺墓・土壙墓  
 (「筑前須玖史前遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第11冊をもとに作成)  
 (基180-159図を一部改変追加)

資料10 欠史八代の陵墓と宮居 (数字は天皇の代数)

奈良県都市地図より筆者作成



天皇陵

- ①神武陵 ②綏靖陵 ③安寧陵 ④懿徳陵 ⑤孝昭陵 ⑥孝安陵 ⑦孝霊陵 ⑧孝元陵  
⑨開化陵 ⑩崇神陵

宮居

- ①神武 ②綏靖 ③安寧 ④懿徳 ⑤孝昭 ⑥孝安 ⑦孝霊 ⑧孝元 ⑨開化 ⑩崇神

# 資料1 立坂形特殊壺・特殊器台から円筒埴輪への変遷

平成15年12月4日 近藤義郎講演会（於：橿原考古学研究所）資料より

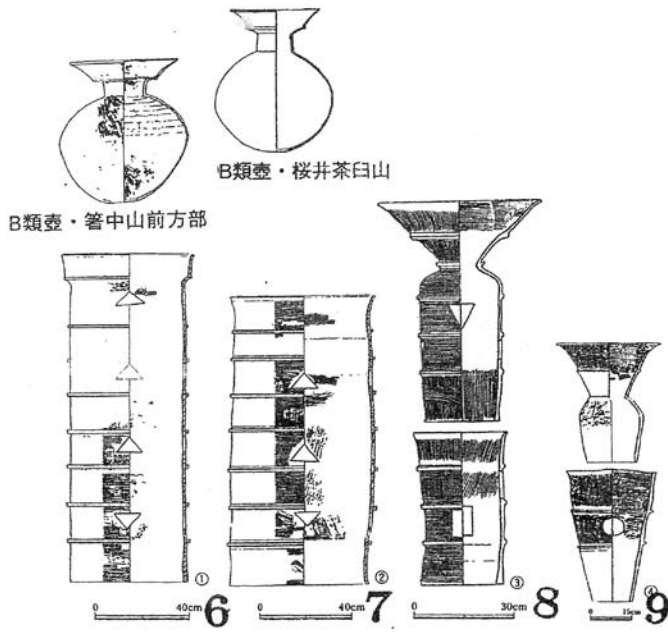
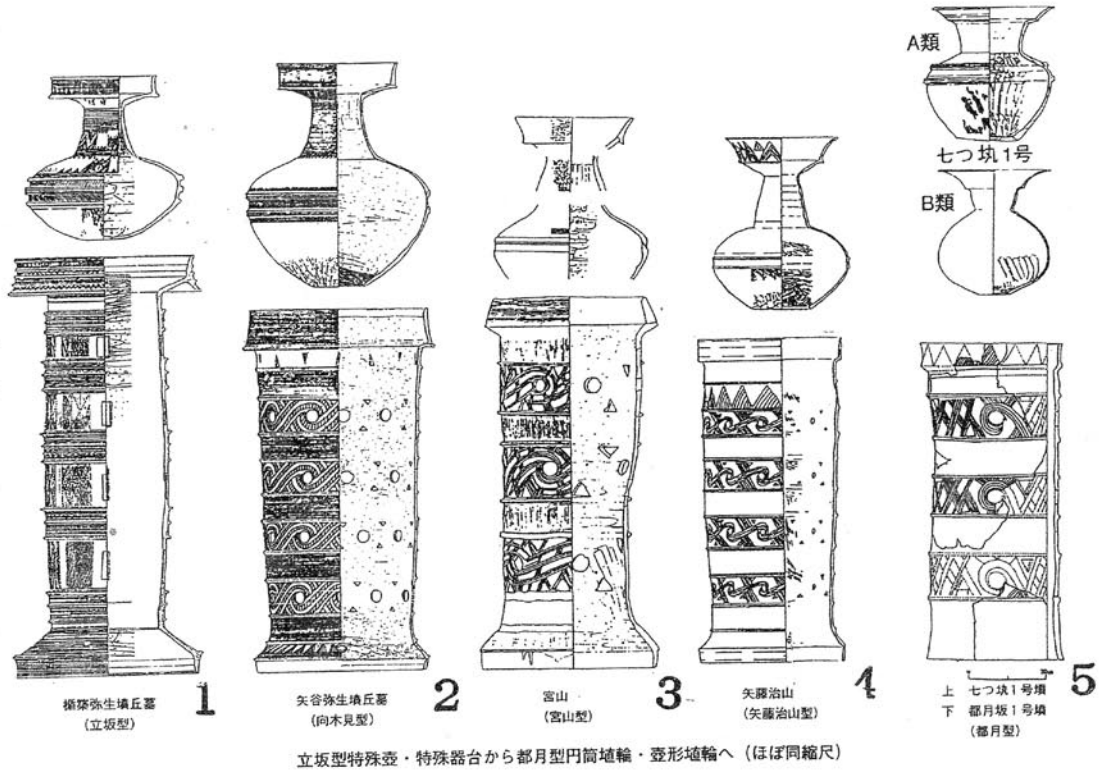
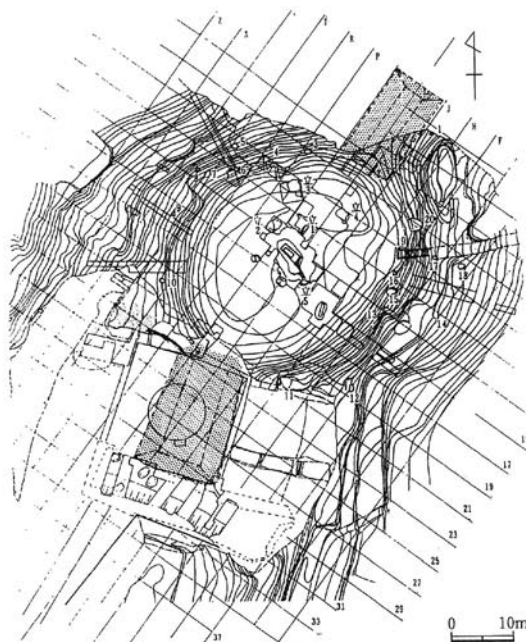


図2 埴輪の変遷 ①器台形、奈良県メスリ山古墳  
 ②円筒形、メスリ山古墳  
 ③朝顔形（上）と円筒、岡山県月の輪古墳  
 ④壺形あるいは朝顔形（上）と円筒、岡山県四つ塚13号墳

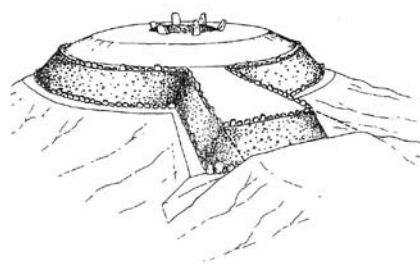
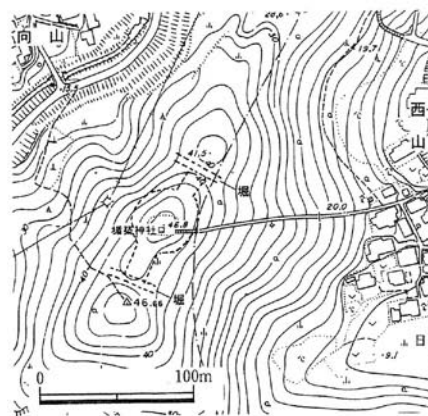


# 資料 1 2 楯築 (岡山県)・西谷 3 号 (鳥根県) 弥生墳丘墓

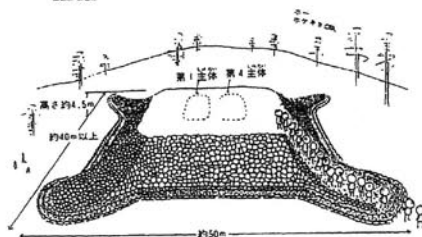
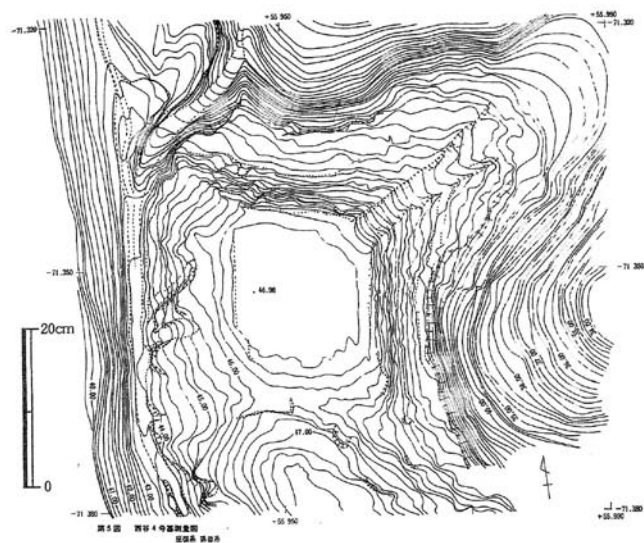
近藤義郎著『前方後円墳と吉備・大和』より



楯築弥生墳丘墓 (アミ部分は突出部想定復原)

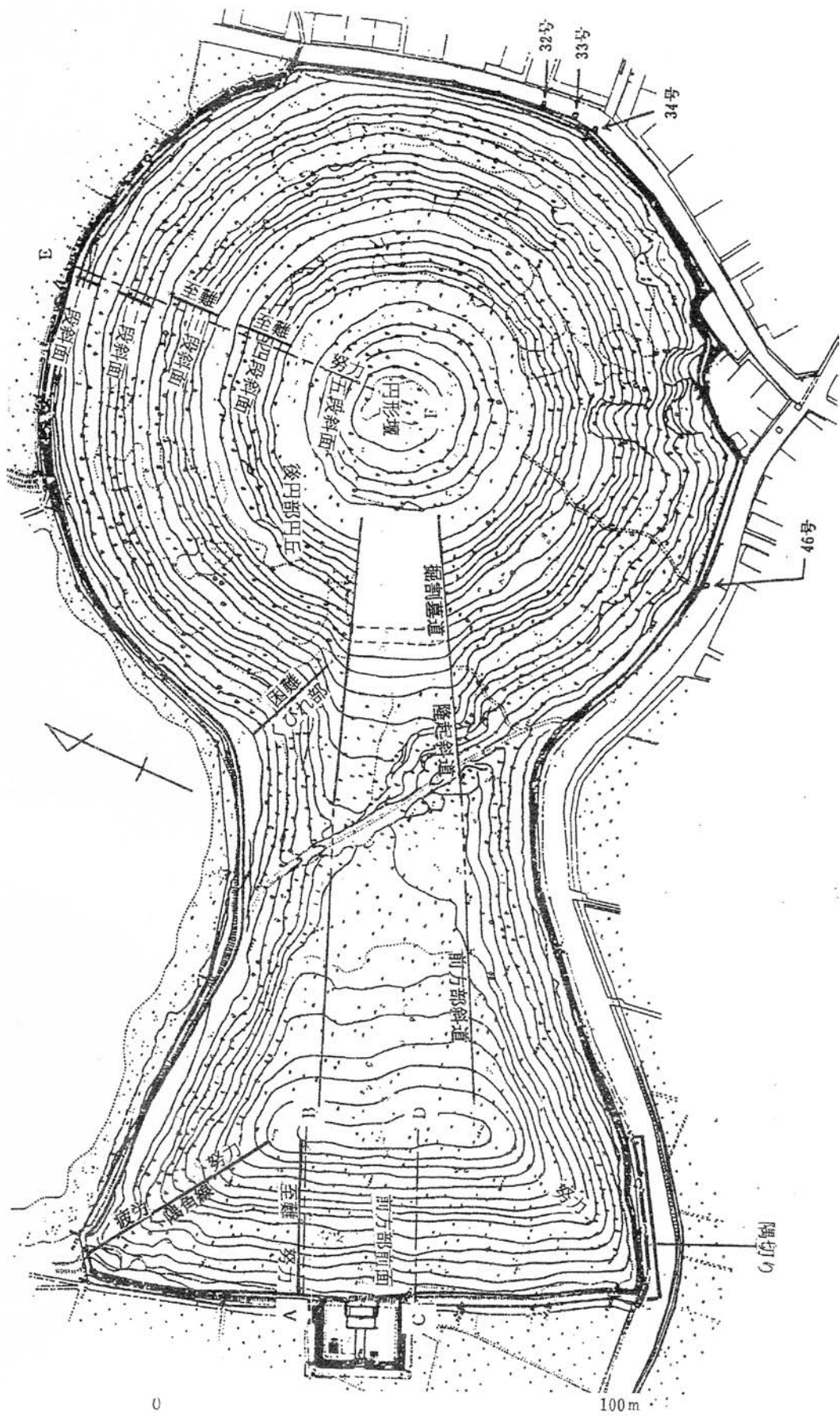


楯築弥生墳丘墓付近地形と突出部の想定復元 (地形は団地造成による破壊以前)



(上) 西谷 4 号四隅突出型弥生墳丘墓の墳丘  
(下) 西谷 3 号四隅突出型弥生墳丘墓の想像復元

資料 1 3 最古級前方後円墳の特徴 奈良県桜井市箸墓古墳



## 【参考文献】

- \* 『古代は輝いていた II』 古田武彦著 朝日新聞社
- \* 『古田武彦講演会資料』 平成 10 年 6 月 28 日 (於大坂天満研修センター)
- \* 『歴史読本特別増刊「天皇陵」総覧』 新人物往来社 平成 5 年 7 月
- \* 大坂歴史博物館平成 13 年度特別展図録『大河内展』(財)大阪府文化財調査研究センター
- \* 『和歌山市史』・『新宮市史』・『五條市史』
- \* 『堅田遺跡 弥生前期環濠集落』 御坊市 2000.11.19
- \* 『五條市「中遺跡」現地説明会資料』 五條市教育委員会・五条文化博物館 2000.6.23
- \* 『川上村史』・『吉野町史』
- \* 『新山古墳群 発掘調査概報』 広陵町教育委員会・橿原考古学研究所 1981 年 10 月
- \* 『見田・大沢古墳群 発掘調査現地説明会資料』 橿原考古学研究所 1980.9.13
- \* 『宮の平遺跡 発掘調査現地説明会資料』 橿原考古学研究所 2000.10.22
- \* 『菟田野町史』・『大宇陀町史』・『榛原町史』
- \* 『橿原考古学研究所附属博物館 常設展示図録』 橿原考古学研究所
- \* 『橿原市史』・『桜井市史』
- \* 大坂府立弥生文化博物館図録  
: 平成 11 年春季特別展『渡来人登場』 1999 年 4 月  
: 平成 15 年春季特別展『弥生創世記』 2003 年 4 月  
: 海の王都、壱岐・原の辻遺跡展『発掘「倭人伝」』 長崎教育委員会 2004 年 2 月
- \* 『春日市史』
- \* 『古鏡』 樋口隆康著 新潮社 昭和 54 年 10 月
- \* 『日本の歴史 巻 1・巻 2』 中央公論社
- \* 『前方後円墳と吉備・大和』 近藤義郎著 吉備人出版
- \* 『近藤義郎講演会資料』 平成 15 年 12 月 4 日 (於橿原考古学研究所)
- \* 『考古学研究』 第 13 巻 第 3 号「埴輪の起源」 近藤義郎・春成秀爾共著
- \* 『唐古・鍵遺跡 第 93 次調査現地説明会資料』 田原本町教育委員会 2003.10.19
- \* 『纏向へ行こう』 桜井市埋蔵文化財センター纏向展パンフレット 平成 15 年 11 月
- \* 『日本歴史大辞典』 小学館
- \* 『日本歴史地名大系』 岡山県・奈良県 平凡社
- \* 『角川地名辞典』 角川書店
- \* 『失われた九州王朝』 古田武彦著 朝日新聞社

■ 著者伊東義彰・発行人横田幸男より

- 1、引用される際は、本書を明示してください。(古田氏論考も含む)
- 2、この論集はテキストデータとしてダウンロードできません。

## 神武が来た道

600円(実費)

---

2005年 9月 1日 第1刷発行

著 者 伊 東 義 彰  
編 集 古田史学の会  
発行人 横 田 幸 男  
東大阪市寺前町2-3-16  
TEL & FAX 06-6727-0408  
郵便番号 577-0845

※本書の本文書体は、ヒラギノ明朝体を使用しております。